＜神戸市文化財調査報告　6＞

伯母野山彌生遺跡

——神戸市灘区篠原高地性遺跡出土遺物概況——

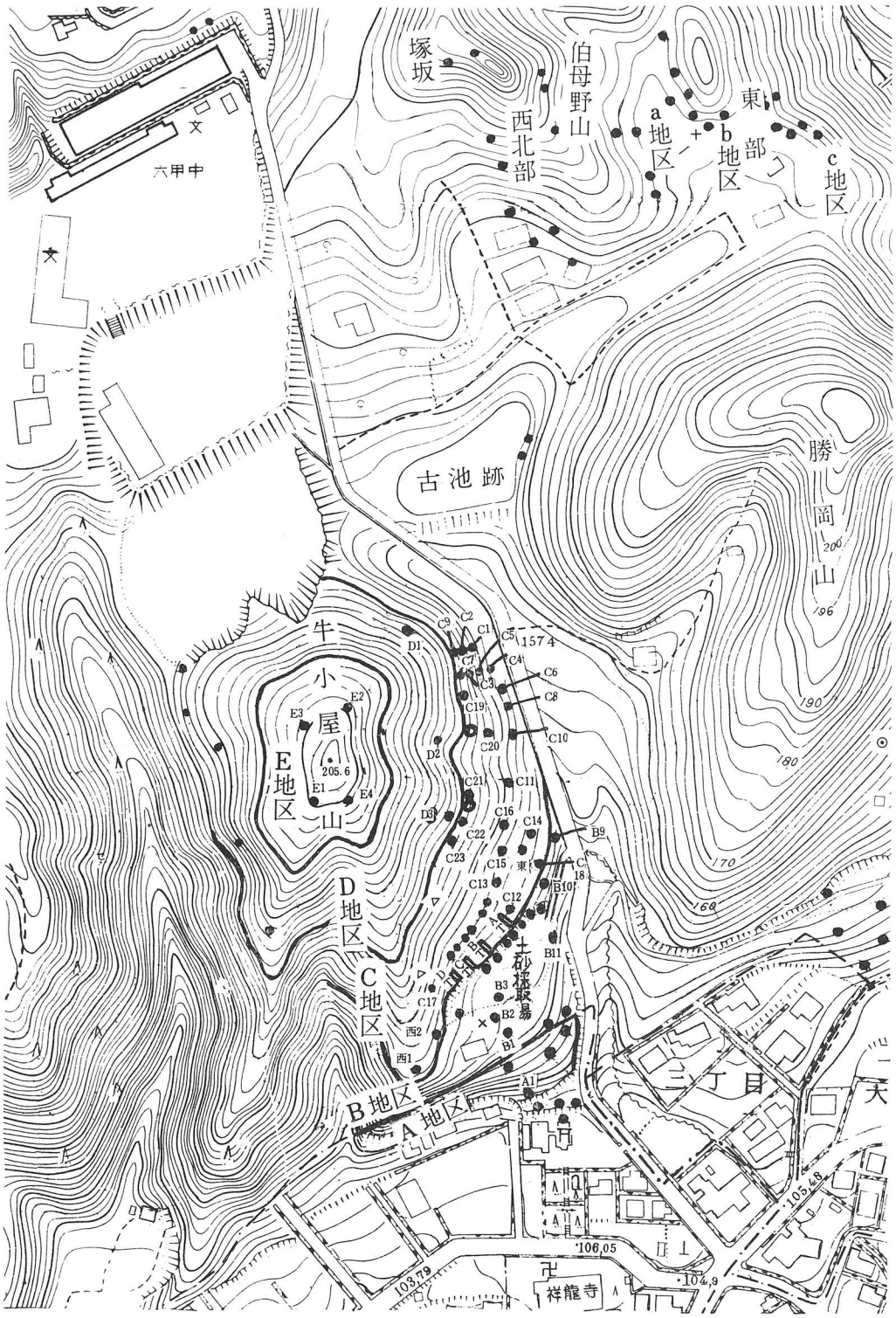
若林　泰

斉藤英二

1963

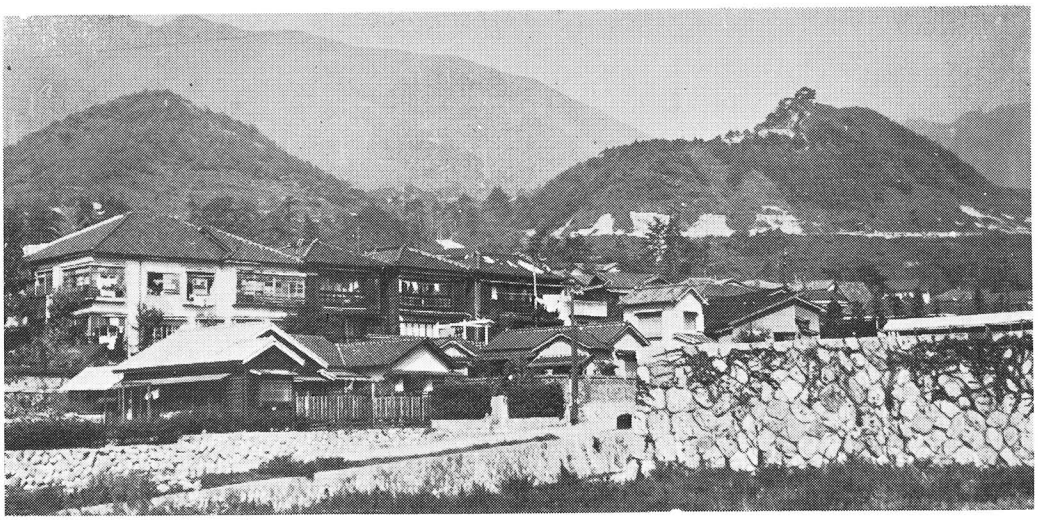
神戸市教育委員会

第１図　　伯母野山弥生遺跡周辺地図　　「神戸首部」より

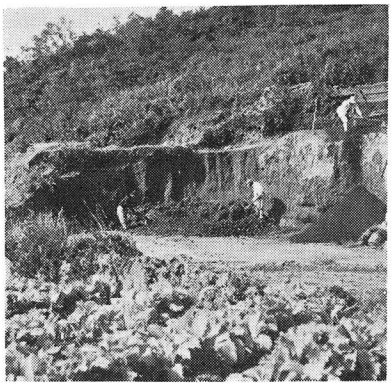


第2図　遺跡附近明細地図

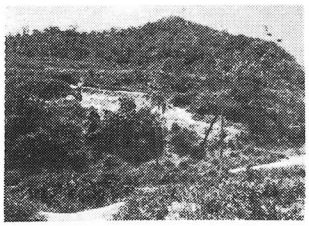
第3図
遺跡写真



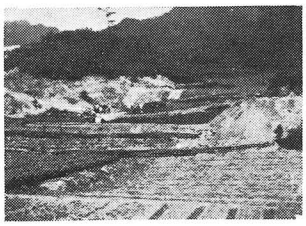
伯母野山遺跡旧観。　左牛小屋山、　右勝岡山、　背後六甲山系



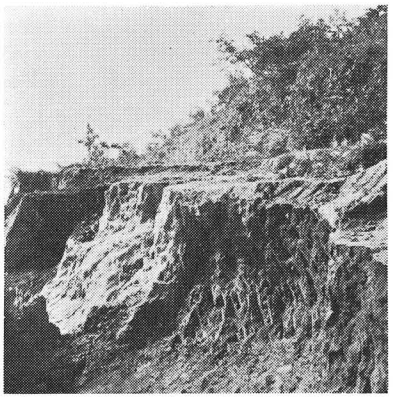
昭和30年における牛小屋山土取状況

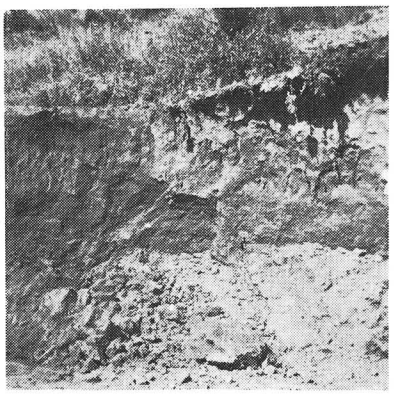


牛小屋山旧観（昭28）

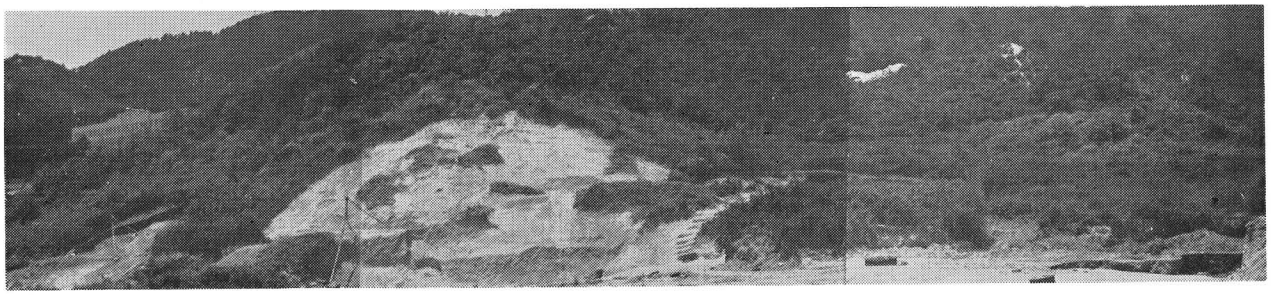


伯母野山旧観（昭28）

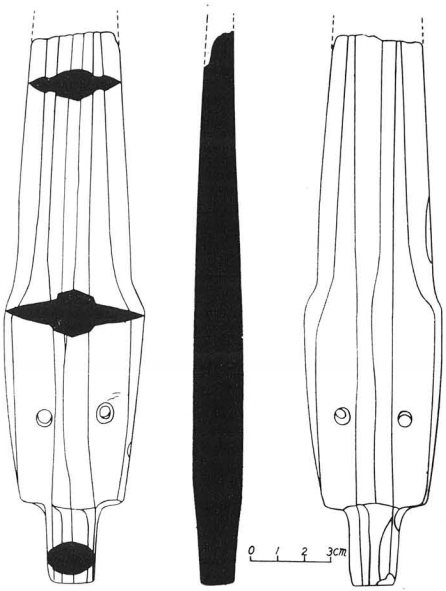


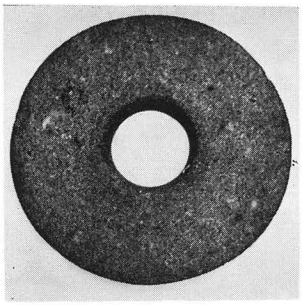


下図、伯母野山現状

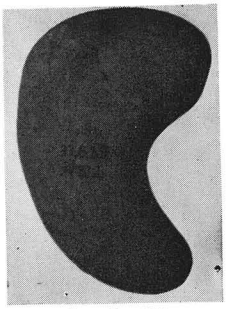


石　剣



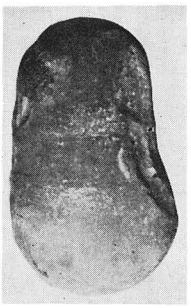


環状石斧



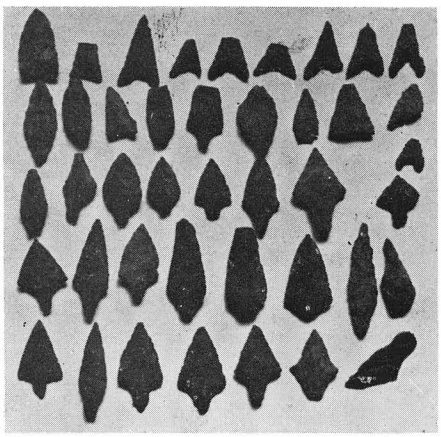
曲玉状石器

凹　石

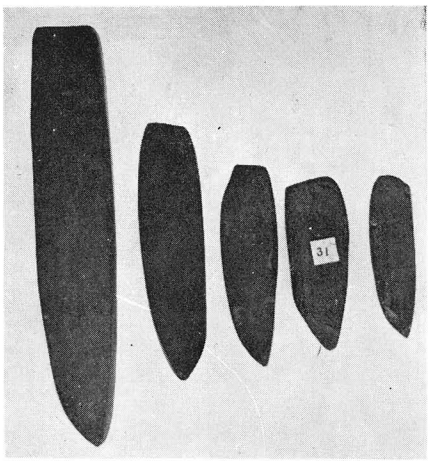


蛤刃石斧

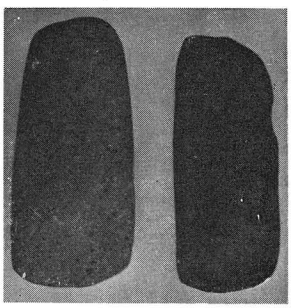
石　槍



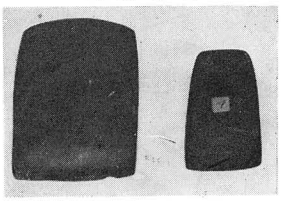
石　鏃（右下のみ石匙）



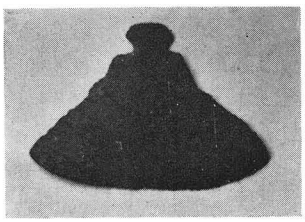
柱状片刃石斧



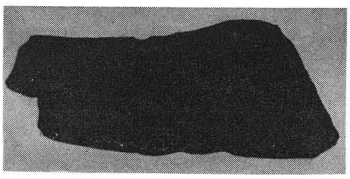
蛤刃石斧



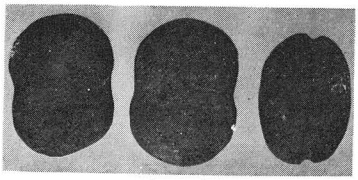
扁平片刃石斧



石　匙

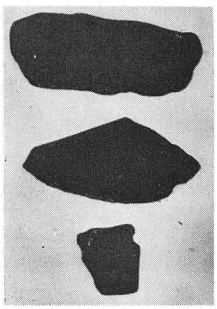


大型石包丁

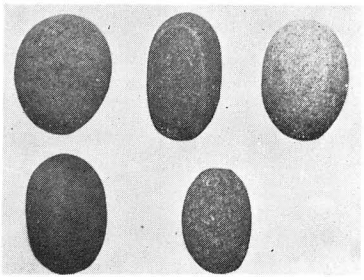


石　錘

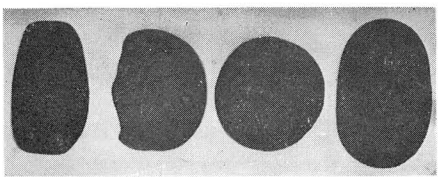
棍棒状石器



石包丁



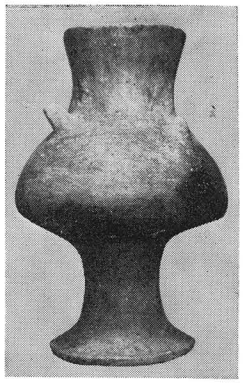
丸　石



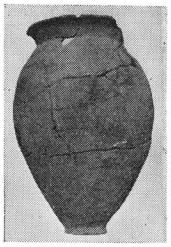
左石槌．中左敲石．中右，右磨石

投　弾

第４図　　出　土　石　製　品

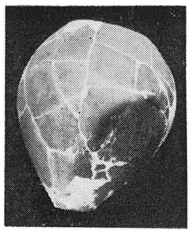


把手付台付壺

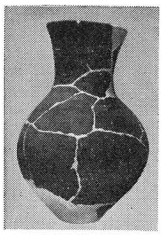


甕

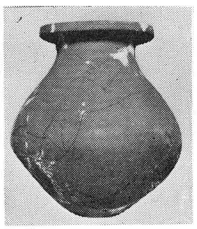
甕



甕

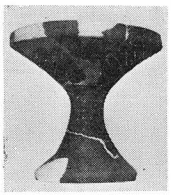


長首壺

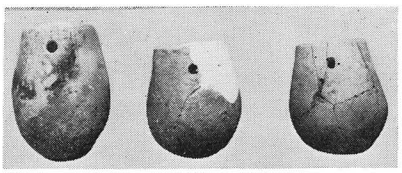


壺

壺

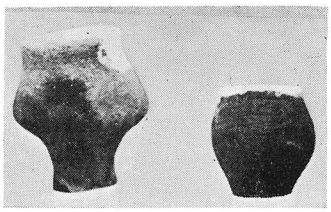


高杯

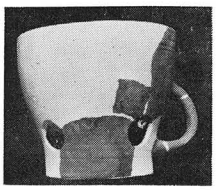


飯蛸壺形土器

飯蛸壺形土器

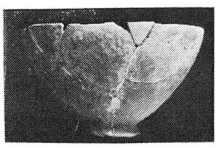


小形台付壺　　小壺



把手付台付鉢

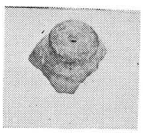
壺



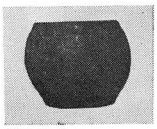
鉢

蓋

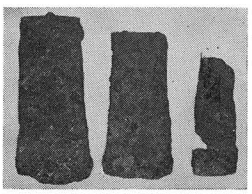
紡錘車



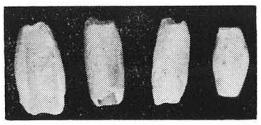
甑



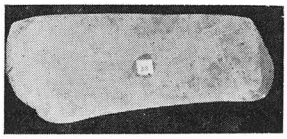
無頸壺



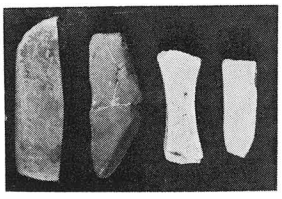
タガネ状鉄器



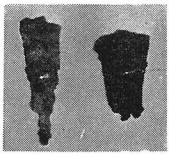
土錘



砥石



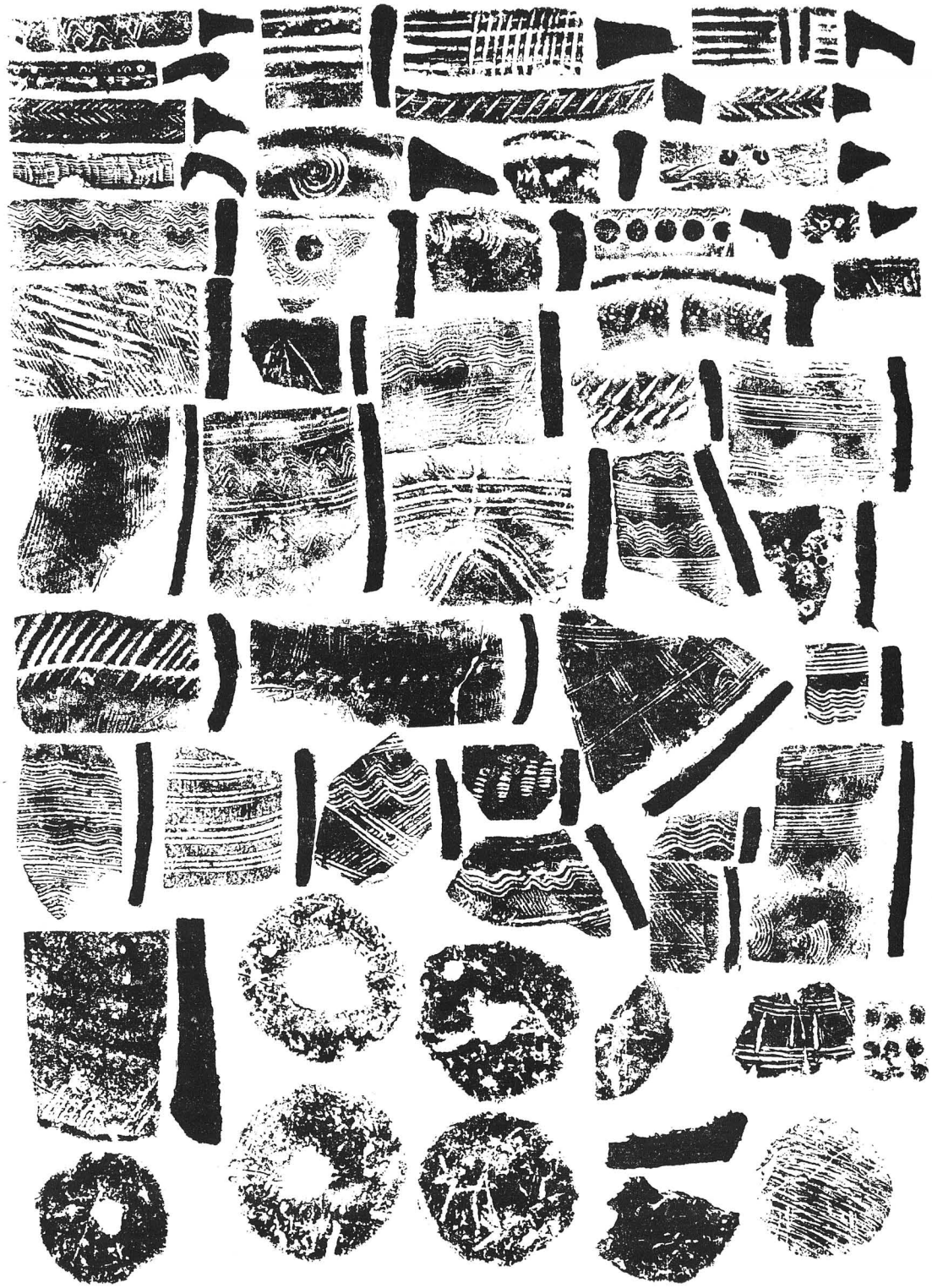
砥石



鉄鏃

鉄鏃

第5図　　出土土器・その他



第6図　出土土器文様拓本

はしがき

「神戸市文化財調査報告　6」として、若林　泰、斉藤英二両君による『伯母野山弥生遺跡』を出すことにしました。

灘区篠原の伯母野山遺跡は、まれにみる遺物の種類の多い遺跡だったといわれますが、残念なことに学術的な計画調査というものをほとんどおこなうことなく、土取作業のために滅んでしまいました。せめてそこから出た遺物だけでも記録しておきたいと考え、毎日のようにその土取場にかよって遺物の採集につとめた両君に報告をおねがいしました。

この報告書は、今までの本調査報告がその道の権威と目される方々によつてなされたのと違って、若い両君によってつくられたことを一つの特色とします。

こうした公けの報告書としては、できるだけ権威ある方に執筆を依頼すべきでありましょうが、両君の長期にわたる労苦を思って、いっさいを両君に依嘱しました。考古学者といわれる方々にとっては、未熟な点が目につくことと思いますが、あたたかいご教導をえたいと存じます。

報告文の執筆は若林泰君が、図版の作成は斉藤英二君があたりました。なお本調査については、下良之克氏、赤松啓介氏、石野博信氏、服部晃氏に多大の協力を仰いだようで、教育委員会としても厚くお礼を申させていただきます。なお、編集については落合重信氏のお世話になりました。

昭和３７年３月

神戸市教育委員会

神戸市文化財調査報告について

早いもので、この神戸市文化財調査報告書も企画してから約５カ年間経過しました。

いろいろな制約があって、年１冊程度発刊の遅々とした歩みでありますが、もともと古きを尋ねる地味な仕事ですから、むしろ遅くともその根を絶やさないように継続してゆきたいものと考えております。

下記に既刊目録と、刊行予定のものを列記しておきます。有識者の方々の御批判と御指導を願ってやみません。

社会教育課長　　折　茂　安　雄

＜既　刊＞

1. 遊女塚宝篋印塔	川辺賢武
2. 山田の千年家	村田治郎、増田友也、山本栄吾
3. 旧天城文書と都賀庄	今井林太郎
4. 福中城と間嶋彦太郎	岡　久雄、黒田義隆
5. 神戸の異人館	坂本勝比古
6. 伯母野山弥生遺跡	若林　泰、斉藤英二

＜刊行予定＞

7. 神戸市内の農村舞台	松崎　茂、角田一郎
8. 神戸市域の条里制	落合長雄、落合重信
9. 大山寺と如意寺	野地修左

もくじ

はじめに …… 1
経過 …… 1
範囲と位置 …… 2
遺跡と遺構 …… 3
遺跡の性格 …… 3
包含層 …… 5
住居址 …… 7
牛小屋山住居址調査 …… 9
出土遺物 …… 11
石器 …… 12
打製石器 …… 12
石鏃 …… 12
無柄石鏃 …… 13
有柄石鏃 …… 13
石槍 …… 13
石錐 …… 13
石匙 …… 14
小刀形石器 …… 14
石包丁 …… 14
石弾 …… 15
半磨製品 …… 15
大型曲玉状異形石器 …… 15
磨製石器 …… 15
石剣 …… 15
石斧 …… 16
環状石斧 …… 16
柱状片刃石斧 …… 16
扁平片刃石斧 …… 18
太形蛤刃石斧 …… 18
石槌 …… 19
石包丁 …… 19
棍棒状石器 …… 19
石錘 …… 20
砥石 …… 20
自然石利用のもの、その他 …… 21
石台 …… 21
大型磨石 …… 21
角石 …… 21
火打石 …… 21
丸石類 …… 22
焼石 …… 24
石屑 …… 24
水晶 …… 24
燧石 …… 25
瑪瑙 …… 25
軽石 …… 25
硅石および角石 …… 25
硅化木 …… 25
鉄器 …… 25
土器 …… 27
縄文式土器 …… 27
弥生式土器 …… 27
中期後半 …… 28
壺形土器 …… 28
甕形土器 …… 29
高杯形土器 …… 30
蓋形土器 …… 30
後期前半 …… 31
壺形土器 …… 31
甕形土器 …… 31
鉢形土器 …… 32
高杯形土器 …… 32
蓋形土器 …… 32
後期後半 …… 33
壺形土器 …… 33
甕形土器 …… 33
鉢形土器 …… 33
高杯形土器 …… 33
紡錘車 …… 34
飯蛸壺形土器 …… 34
口縁部破片 …… 37
壺形土器 …… 37
甕形土器 …… 39
鉢形土器 …… 40
高杯形土器 …… 40
蓋形土器 …… 41
底部破片 …… 41
把手破片 …… 45
土師器．須恵器．土錘 …… 45
古墳 …… 47

図版および写真もくじ

巻　頭

第１図　伯母野山弥生遺跡周辺地図
第２図　遺跡附近明細地図
第３図　遺　跡　写　真
第４図　出 土 石 製 品
第５図　出土土器・その他
第６図　出土土器文様拓本

文　中

第１図　伯母野山遺跡縦断面図……３
第２図の１　牛小屋山Ｂ地区測量調査……５
第２図の２　Ｂ地区調査図……６
第２図の３　Ｂ地区トレンチ地層図……６
第３図　字塚坂地層図……６
第４図　牛小屋山Ｃ地区包含層断面図…７
第５図　昭和33年調査見取図……７
第６図　昭和33年調査写真……８
第７図　昭和34年調査実測図……８
第８図　昭和34年調査写真……９
第９図　牛小屋山住居址出土石鏃、甑…９
第10図　牛小屋山東麓住宅址図……10
第11図　住居址遺構（写真）……10
第12図　石　包　丁……14
第13図　石　　弾……15
第14図　十字型石鏃……15
第15図　石斧破片……18
第16図　火　打　石……21
第17図　丸　石……22
第18図　敲　石……23
第19図　凹　石……24
第20図　水　晶……25
第21図　縄文式土器……27
第22図　高杯形土器……30
第23図　甕形土器……32
第24図　鉢形土器……32
第25図　高杯、台付無頸壺、壺……34
第26図　古　墳……47
第27図　古墳出土須恵器……48
第28図　西摂主要遺跡発展経過表……48

巻末折込

打製石器（１～54）……１
磨製石器（１～35）……２
鉄器（１～６）……３
弥生式土器（１～190）……３
土師器、須恵器、土錘（１～16）……５

伯母野山弥生遺跡

——神戸市灘区篠原高地性遺跡出土遺物概報——

若林泰
斉藤英二

はじめに

この篠原伯母野山の弥生遺跡をみたひとが、まず驚くことは、昔の人がどうしてこんな急傾斜の住みにくい山腹に住んだのだろうかということである。

場所は六甲登山口から一つ西のバスの停留所から少し上ったところだが、今は鉄筋のスマートなアパート（神戸製鋼独身寮）が建ってしまって、その面影を全くとどめないが、この寮のあるところが伯母野山遺跡のうちの牛小屋山である。

高地性遺跡というのはここばかりでなく、表六甲山系においては、かなりの高所（標高100m以上）から石器や弥生式土器の出土が知られている。東灘区岡本保久良神社境内（175m）、芦屋市三条町会下山山頂（175～185m）、同城山山頂（250m）、西宮市仁川五ケ山（140m）などが遺物包含地として著名である。これらが知られるようになったのは、保久良遺跡を除いて、すべて戦後もほぼ昭和30年以後のことであって、高地性跡遺とその住居址のことは最近学界において重視されるにいたり、いくたの研究が発表されつつある。なぜ耕地のある平野から遠く離れて、非生産的な地形に住居を営むようになったのか、そうしてそれがまたどうして弥生中期になってあらわれてくるのか、というような問題である。

経過　この遺跡は若林泰が、その住いに近い関係から昭和22年3月発見した。新聞に報道されたのはそれより少しおくれて神戸新聞22年11月11日である。最初弥生式土器を発見したのは、厳島神社北隅であった。それからそのうしろの字牛小屋山におよび、さらに通称古池の北の字伯母野山にも遺跡のあることを発見したのであった。28年ごろから字牛小屋山南斜面に土取場ができ、多くの遺物が掘り出されはじめた。30年春から土取作業がにわかに活発になりはじめたので、若林は下良之克とともに遺跡の調査にかかったが、報告するほどにはまとまらなかった。32年ごろから赤松啓介、斉藤英二がこの地に着目しはじめた。ことに若林、斉藤は徹底した採集に当った。33年2月末には赤松、若林、斉藤らによってトレンチ調査がおこなわれ、34年2月には村川行弘、岩本昌三、石野博信らによる調査があり、このとき住居址が発見され

た。昭和34年末牛小屋山遺跡は完全に破壊され、神戸製鋼寮と六甲高校運動場の一部になってしまった。

字勝岡山の方は33年ごろの土取作業により貴重な石器類を出して注目されたが、石器土器ともに量は少なかった。字伯母野山における遺物の採集は早くからおこなわれていたが、石剣が出土したことは貴重な発見であった（大畑氏蔵）。

本報告書の作成は、36年2月から若林を中心に、下良・斉藤の3人が計画したが、下良は身辺多忙のため参加できず、若林・斉藤の2人でこれに当ることになった。若林が最初からの関係もあって、企画・渉外・報告文作成のいっさいに当り、斉藤はこれを援けて図版の作成に当った。

本報告に当っては、下良之克、赤松啓介、石野博信ら諸氏の援助にまつところ大きく衷心より感謝の意を表するものであるが、さらに牛小屋山については吉岡勝蔵氏の、伯母野山については安田新五郎氏の協力は大きかった。土取作業中目にとまった遺物はすべて保存恵与されたのみならず、その出土状況についても可能なかぎりの説明を与えられた。両氏の理解ある協力あってこそはじめて本報告も可能となったわけである。

（遺物の説明はすべて36年10月までに出土したものにかぎられたが、これは整理上の都合による。）

範囲と位置　本稿表題の「伯母野山」というのは単に字伯母野山をさすのでなく、字牛小屋山、字勝岡山、字伯母野山の3地域をふくむ汎称として用いたものである。

厳島神社の裏手の山が牛小屋山で、谷川を距てて東が勝岡山、伯母野山は勝岡山の道を距てて北にある（巻頭第1図、第2図）。遺物説明に当っては、3地域に分けて説明するから、単に伯母野山とあれば汎称としてのそれでなく字伯母野山のことと承知ねがいたい。

牛小屋山地域は遺跡の範囲広く、南および東斜面を主としてその周辺山頂附近におよび、実に多種多量の貴重な遺物を出し、かつ調査もおこなわれているから重視すべきで、標高150～180mあたりの包含層がその中心であった。

勝岡山地域はその西南端近かくに散布するごく狭い範囲の遺跡で、包含層などもほとんど見当らず、多少あっても層は薄く、遺物も環状石斧や大型曲玉状石器など特異な存在をみるが、他の遺物はごくわずかであった。祭祀遺跡を中心としたものと思われる。

伯母野山地域も遺跡の範囲が広い。仮りに西北部と東部に分ける。西北部とは六甲農園のあったころ採集した地点で、古池の北方にある農園周辺を中心にして北方通称塚坂と呼ばれるあたりのゆるい傾斜地をさし、その中程に舟形状に突出した小山があって、地形と出土遺物から祭祀遺跡もあったようにみられる。石錘、土錘、大型器台（鋸歯文）のほか土師器に類するもの多く、若干須恵器も採集した。

同東部は36年6月以来踏査の地で、大西養鶏場より東方一帯にわたる。土器は今のところ第4様式以降を主とするが（稀に第3様式あり）、石器には弥生前期またはそれ以前にさかのぼりうる横形石匙、石鏃が見出され、磨製石剣とそして水晶も非常に多量出土した所である。なお当地域は東北方および西南方の一部に遺跡が続くようで点々と若干の遺物を採集した。当地域も土取作業により⅔近かく

が崩壊したが、現在遺物採集のできるのは当地域のみであり、今後どのようなものが出土するか興味がもたれる。

このほか、牛小屋山と伯母野山には各一、二の古墳＝小円墳が見られたが、今は全く崩壊してその跡を残さない。

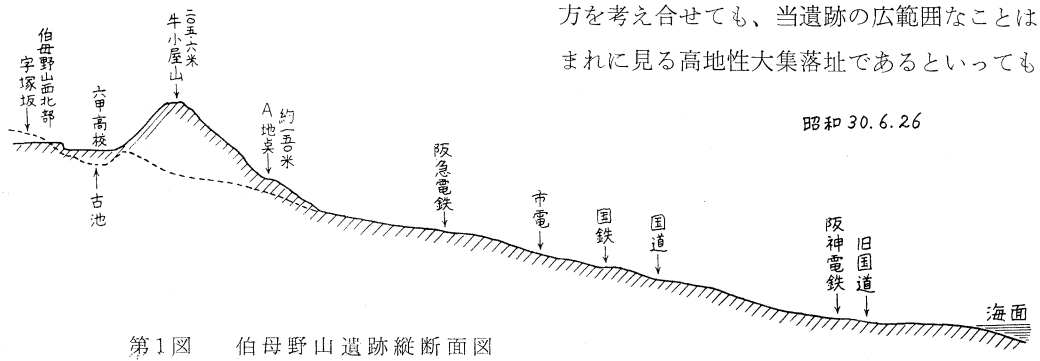
本遺跡全体の位置を一口にいえば、表六甲山系南麓に位置する小山塊の一つであって、京阪神急行電鉄六甲駅北西部にあたり、灘区のほぼ中央を流れる大石川（都賀川）が六甲川と杣谷川に分岐する地点から北方約１kmにあたる。阪急の車窓からも、大石川鉄橋を渡るころその北方に神鋼赤マーク入りの白い近代建築のある地点として見ることができる。これは阪神電鉄、国鉄からも眺められる。

道順としては市バス篠原本町２丁目より六甲川に沿い北進し、ややして左に折れ祥龍寺、篠原墓地の北を六甲川支流通称大月川沿いに上れば約10分で神鋼独身寮に達し、次いで六甲高校の運動場を見る。遺跡はその周辺である°遺跡はすこぶる景勝の地で、東は大阪平野が眺められ、西は神戸市街につづいて須磨方面に至る。南は大阪湾を一望の下に見渡せ、生駒連山につづく紀伊半島の山々が望まれる。北は六甲山系に接続する要害の地で、芦屋市会下山遺跡と立地条件的によく似ている。

なお附近の遺跡と歴史的背景を少しく述べるならば、前述バス停留所の西南一帯は小林行雄氏によって調査された篠原中之島（現在篠原本町２丁目）があり、筆者居宅のすぐ南から縄文末期の甕棺とその近隣から渦状連続文弥生式土器片や石器の採集があり、南部の東神戸工業地帯ないし酒造地域の方面には伝説に有名な３つの処女塚がある。東部では高羽の一王山周辺に弥生遺跡・土師遺跡・古墳もあり、東灘方面では住吉町渦森山中および本山町森の旧広岡邸に銅鐸の出土があり、またクリス形銅戈出土と磐境で知られる北畑保久良神社遺跡、岡本ヘボソ塚古墳がある。西部では摩耶山附近で石器が出土したことを聞くがくわしいことはわからない。その西の布引丸山は弥生遺跡として知られている。

遺　跡　と　遺　構

遺跡の性格　当遺跡の集落は山脚の平地ではなく、山腹の傾斜面に作られ、かなり特色ある遺跡であることはすでに述べた。芦屋市会下山遺跡とよく似た立地条件であるが、それよりも大きく、西宮市仁川五ヶ山遺跡その他と比較して、県下はもちろん近畿・中国地方を考え合せても、当遺跡の広範囲なことはまれに見る高地性大集落址であるといっても



第１図　　伯母野山遺跡縦断面図

過言ではない。赤松氏も完全に調査をおこなったならば少くとも50以上の住居址を見出すことができたのでないかといっているが、十分に考えられることである。

当遺跡には縄文文化の遺物をごく少量認めることができるが、その遺跡や遺構についてくわしいことはわからない。といってもこれらのものが第二次的に混入されたものとは地形上全然考えられない。弥生文化については土器が示すように、他の高地性遺跡とほぼ似て中期に属する第3様式にはじまり後期に属する第4・第5様式のものが見られ、そのほかまれに土師器・須恵器の時代のものも採集された。これらのことから中期中頃（約2000年前）はじめて集落として拓かれ、それから200年前後、中期後半から後期全般を通じてが最盛期で、後期後半も末期に近づくにつれて大半が他へ移住してしまったと考えられる。その移住理由は明らかでないが、考えられることは、全く農耕を専業とするようになり（農業技術の大進歩）、限られた耕地と宅地に不便を感じ(人口の増加)、また防備の必要もなくなって低地に進出したものと思われる。もちろん時代の要求もあろう、それは中期の集落単位の社会組織はおそらく特定個人の台頭はなかったろうし、生活は共同体の内のみでおこなわれたと思われる。しかし、それ以後の地域的統合への運動は主として特定個人の指揮でおこなわれたと思われるから、永らく自己の生活を自然の限定内において享楽した弥生文化も、末期に至るや特定個人の台頭につれて地域的統合の中に包括されていったと考えられる。また技術進歩と人口増加はその共同工事によって、より広大な農耕地が出現したのではないかと想像される。そのため多くの居住者は山を下って平野の河川流域に進出したのではなかろうか。

また後期古墳時代前後にも、当地にわずかな住居はあったと思われるが（継続か再起か不明）、そのことも明らかにできない。

なお当遺跡に他の高地性遺跡にほとんど見られない飯蛸壺形土器を数種にわたって多量に採集されたことは一特色で、大阪湾東岸の飯蛸壺形土器を出す遺跡とは密接な関係があったのではなかろうか。石器も他の高地性遺跡では弥生中期以後という時代性からその出土例ははなはだ少ないが、当遺跡では土器に比較して少ないとはいえ多種にわたって出土する。勿論川西市加茂遺跡のように多量ではない。銅器（未出土）鉄器（鉄鏃その他若干採集）の出現と集落の増加により再び生産されはじめたもの、または模造されたものもあろう。また狩猟具、漁具の相当数採集は、農耕が生活の主体とはいえ、農閑期または季節的に比較的得やすかったと思える漁猟ないしは天然物採集がおこなわれて生活を助けたことが想像される。

さてここで、当遺跡を中心としていささか高地性遺跡の出現について触れてみたい。遠く瀬戸内西部、すなわち周防、安芸方面を中心にこの種の遺跡が相当あり、従ってこの方面の研究も相当進んでいる（小野忠熙「瀬戸内地方における弥生式高地性村落とその機能」<考古学研究22、昭35>、その他)。表六甲山系においても調査の増加するに従って、活発な研究がおこなわれつつある。前者の中には後者と立地条件を等しうするものがあるから、大いに参考とすべきであろう。

高地性遺跡について考えるべきことは大別して、弥生中期という時代的特殊性と自然地

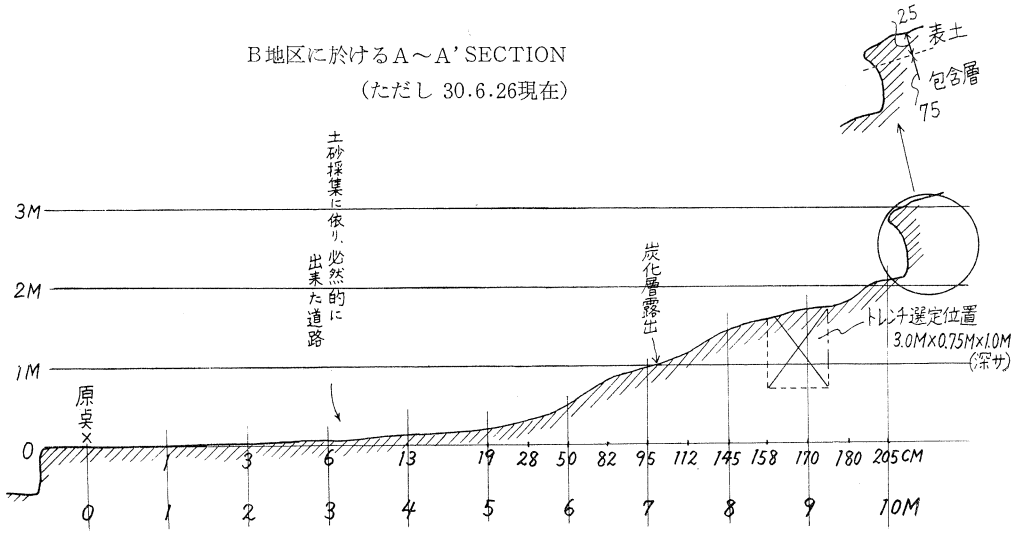
理的条件とである。なお弥生前期は大部分が低地性であり、中期といえど全部が高地性でないことは立地的、地方的特徴もあわせ考えなければならない。当遺跡においては石包丁のような農耕用具や籾痕の明らかな弥生式土器や甕などを相当採集しているから、農耕生活を主体とした人々であることには間違いないにかかわらず、非生産的な地に居を占めることは、年代的にみて、後漢書倭伝にいう「桓・霊間(147～188年)倭国大乱、更相攻伐、歴年無主」（岩波文庫本）と考えあわせて、集落間の闘争激化の内乱時代に当り、社会的緊張が存したため防衛に有利な山腹要害の地に居を移したことがまず考えられる。実際安芸の西部から周防にかけての高地性遺跡には土塁や空濠をめぐらしたものがある。あるいは農耕面で焼畑を主としたこと、農耕技術の普及あるいは鉄製工具の出現により生産性の高い開折谷に耕地（谷水田）を求めたことも考えられるし、景勝の地で海上の見通しが十分にきくから、海上支配にも関係していたかもしれない。あるいは単に洪水や海侵などの自然的原因によるものかも知れない。

高地性遺跡の性格がはたして以上に述べたような普遍的理由にもとづく事象であるかどうかもかなりの考究を要する問題であって、その点、本遺跡の究明は重大であるといわなければならない。ところが残念なことは、ほとんど学術的計画的調査がおこなわれないで終ったことである。

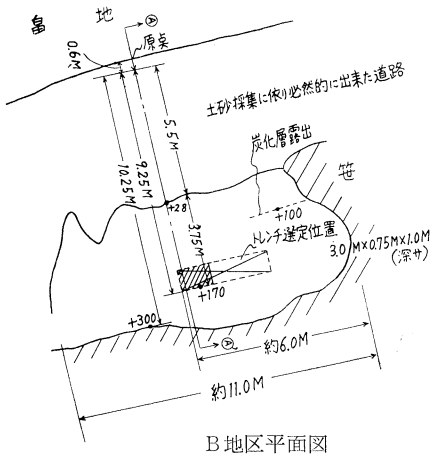
なお、山頂にも住居址ないし包含層と思われるものもわずかに見られたが、今はすべてなくなってしまった。

包含層　さて若林・斉藤が包含層についてメモしたものを記そう。

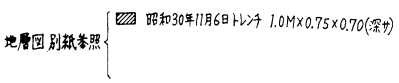
第２図の３つの図は筆者が牛小屋山地域の湮滅を恐れ、昭和30年余り破壊されぬうちに概報を試みようとしたとき、下良の協力を得て周辺の簡単な実測をおこなったもので、当時の地形も幾分うかがえる。場所はＢ地区（以下Ａ地区Ｂ地区Ｃ地区というのは巻頭第２図参照)の後述する古墳にほどちかい東側で、



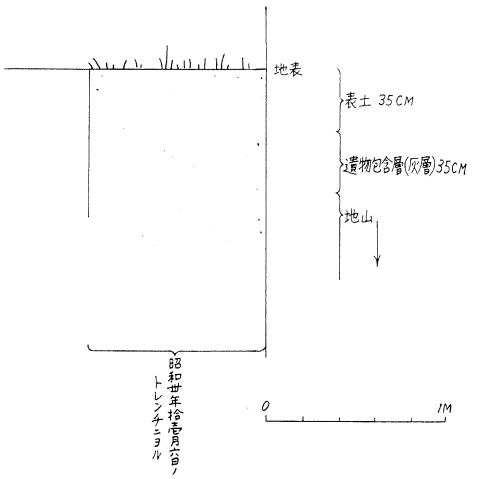
第２図の１　　牛小屋山Ｂ地区測量調査



B地区平面図



第2図の2　B地区調査図

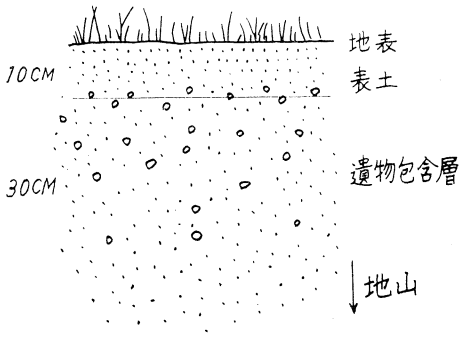


第2図の3　B地区トレンチ地層図

炉址と思われる炭化物を混入する灰黒土層の付近であった。出土品はごく薄手の石ノミ破片（ノミ形石斧ではない）と弥生式の器台その他若干の破片であった。

なおその少し前、下良と伯母野山西北部通称塚坂と呼ばれる付近で、土取作業により切り立つ崖となった包含層を実測したこともあった（第3図）。

また斉藤は昭和33年牛小屋山地域C地区に



第3図　字塚坂地層調査

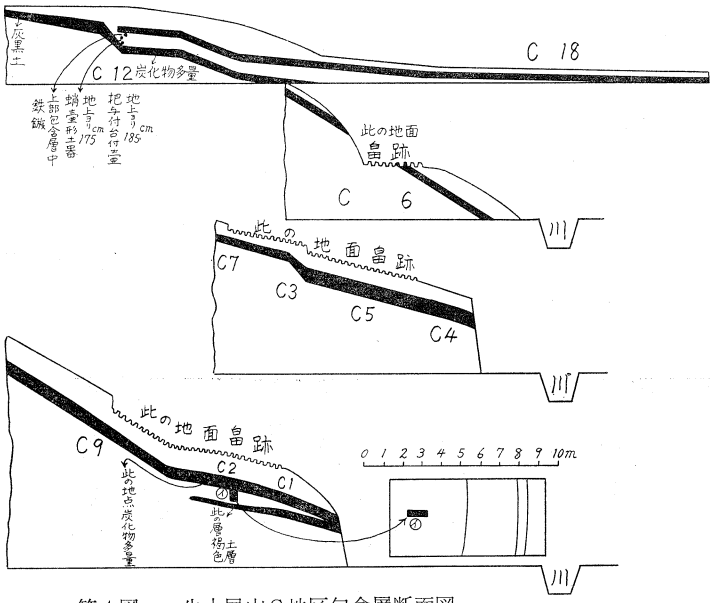
ついて広く実測および目測をおこなってメモしている。もちろん概略ではあるが、これでも遺物包含層の有り方はほぼわかるだろう（次ページ第4図）。

これについて簡単に説明をつけよう。黒く塗った部分が遺物出土の黒土包含層で、灰黒土の多い所を撰んで図示した。上図C18地点付近はゆるい傾斜をもち、C12地点付近で地上の傾斜が強くなり包含層も2層が見られ、少し上る所でまた1層となる。下層からは炭化物多量出土の箇所や灰黒土の所も多かった。遺跡形成当時の地形もややうかがえる。C12地点の上下層の間は砂質で、その部分より飯蛸壺形土器をC21地点付近とともに多数採集し、把手付台付壺も現われ、また上層下端より鉄鏃および板状鉄器も採集した重視すべき位置である。

中上図C6地点付近は強い傾斜面で多数の弥生式土器と若干の石器が現われ、畠跡でも表面採集ができた。

中下図は地山に沿って段状に上り、かなり包含層は厚く、全域ことにC4、C5地点附近では非常に多量の弥生式土器と若干の石器を採集した。

下図の東面して川に近い山裾はC1、C2地点付近は2層の包含層よりなる。最も下層は薄くてあまり遺物を出さない。上層は地山



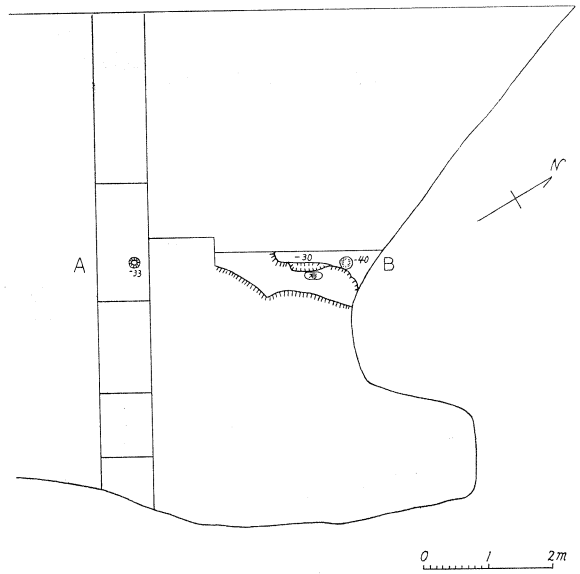
第4図　牛小屋山C地区包含層断面図

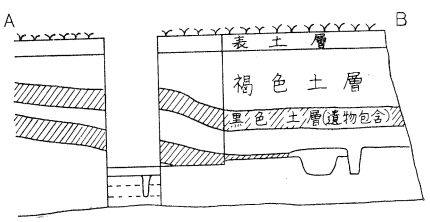
に沿ってかなり急な勾配で上り、包含層は厚く非常に多量の弥生式土器と若干の石器を採集した。なおC２点では落込みがみられる。自然に少し凹みのあった所を人工的に掘下げて塵捨場としたのであろうか。大きさから見ても柱穴とは思えない。

住居址　ついで住居址の遺構についてであるが、多くを語ることができない。というのは住居址や炉址と思われるものは各所に見られたが、発掘調査というほどのものはほとんどおこなわれなかったからである。幸い芦屋市教育委員会郷土室の方々によって調査された部分があり、その１人である石野博信氏に依頼して執筆してもらったものがあるからこの項の終りに掲載する。

当遺跡の住居址が山頂ではなく中腹を主とし階段状に住居が作られているため、一般に見られるようにタテ穴を掘ること少なく平面ないしは片面のみ少し切下げた半タテ穴半平地のものが多く、度々火災があったらしく、火災後は捨てて近辺へ移動した（中腹５合目位から次第に８合目附近まで）ようにも思われる。赤松氏は地形的に南面した山の斜面につくられているので、別にタテ穴を掘らずとも十分保温ができたためだろうといっている。

33年２月28日から約２週間おこなわれたトレンチ調査（Aトレンチ）においては偶然的に住居址を見出した。柱穴は径21cm、深さ40cmほどで、すぐそばに短径30cmの長円形の炉址があり、周囲から

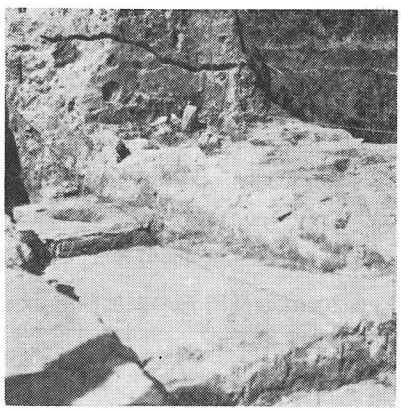


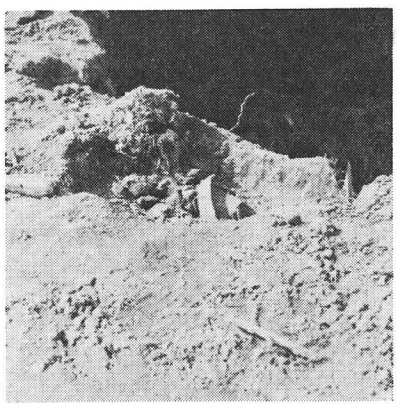


第5図　昭和33年調査見取図

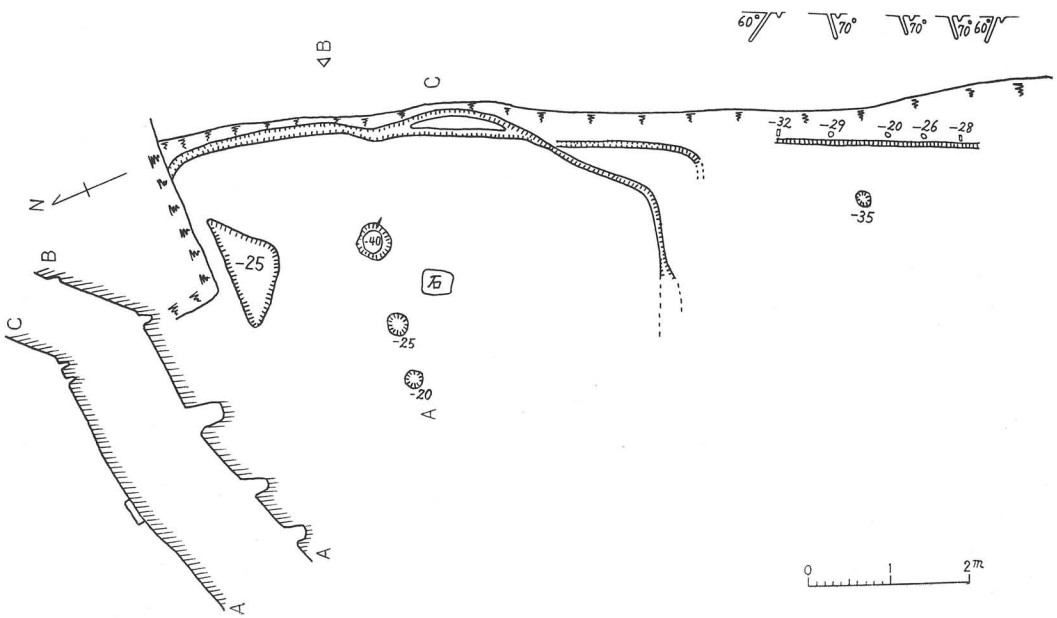
は焼土、炭、弥生式土器片が混在して出た。柱穴は1個しか調査できなかった。この調査で出土した遺物は赤松氏の手もとに保管されている。途中赤松氏は病気入院、斉藤は勤務上の都合もあって見取図程度のものしか書けなかった（第5図、第6図）。

なお昭和34年3月には、石野氏等の調査したところから南30mほどにおいて土取作業により住居址の⅔ほど削り取られたのを発見、主として赤松氏と筆者が簡単な実測をおこなった。1面は山の斜面を20cmほど切りさげた壁が見られ、平地の面もあったから、半タテ穴半平地の住居址だろう。排水溝の一部も見出され、その中には二重になった所がみられた。この遺構外に炭を2列杭状に埋めた所もあった（第7図、第8図）。

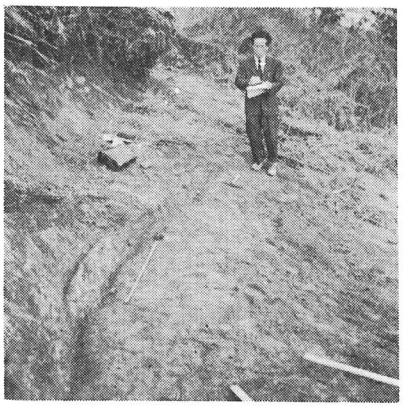


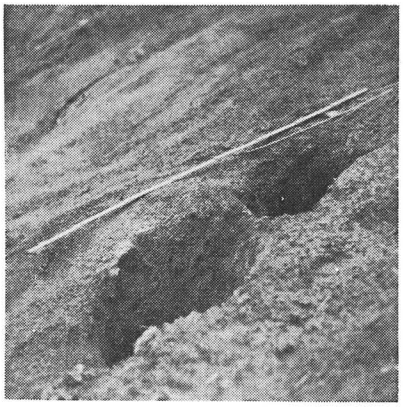


第6図　昭和33年調査写真



第7図　昭和34年調査実測図





第8図　昭和34年調査写真

牛小屋山住居址の調査（石野博信）

住居址は牛小屋山の東斜面――中腹、標高160m（山頂205.6m）にあり。勝岡山に対峙し、その間を流れる大月川にのぞむ。

遺構は、斜面を切って、南北に8m余にのびる。周溝状遺構は北端に、おちこみが南端に、その間に柱穴列が連なる。北より1～3号遺構とする（次ページ第10図参照）。

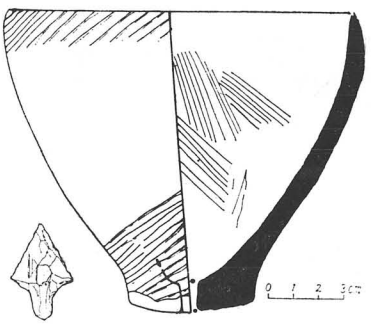
1号遺構　幅10cm、深さ10～15cmの小溝が3m、両端で直角にまがる。いわゆる隅丸方形の一辺をつくる。周溝内側は、溝より60cm余だけ平らかな面が残る。平坦面のほぼ中央に、40×15×15cmの自然石がすわる。接して、甑片出土（のち完形品に復原、第9図）。周溝外側には、径10～15cm、深さ10～20cmの小穴が、80～100cmの間隔で並ぶ。Pit 4は周溝方向に35°傾く。

この事実より、直ちに住居址とするには疑問がある。1）床面と考えられる面に主柱穴がない。2）外縁の柱穴が小さく浅い（主柱を支えるにふさわしくない）。3）隅丸方形住居址として、一辺3mでは小さい、等である。さらに遺構が、すでに崩れてしまっている部分にどのように展開していたか全く不明であることも資料として弱い（両端で直角にまがった小溝が、60cm余の平坦面にのびきらない）。

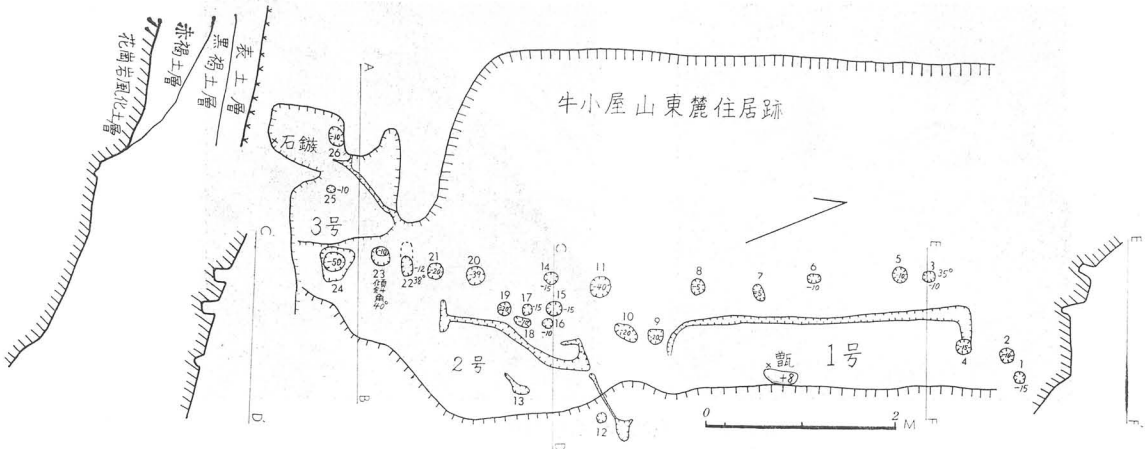
1）2）の、住居址で床面に柱穴のない例は、東京都栗原、H1・13・14号（中川成夫『栗原』―土師期タテ穴）、奈良県唐古、No, 99タテ穴（大和唐古弥生遺跡の研究）をはじめ多い。特に本遺跡の場合、立地条件から、山腹を切る周溝内外縁に、大きい柱は不用である。

3）の一辺3m内外の遺構も、さきの両遺跡はもとより、各地にみられる。全て住居址とは考えられないにしても、住居址に伴う建築遺構にはちがいあるまい。

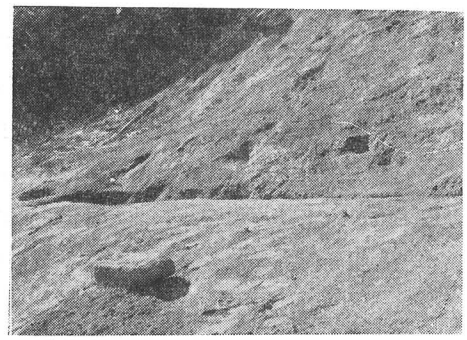
この他、芦屋市会下山F・L住居址（村川行弘『芦屋市会下山遺跡発掘調査概報』）、姫路市名古山（姫路市教育委員会報告）と同巧

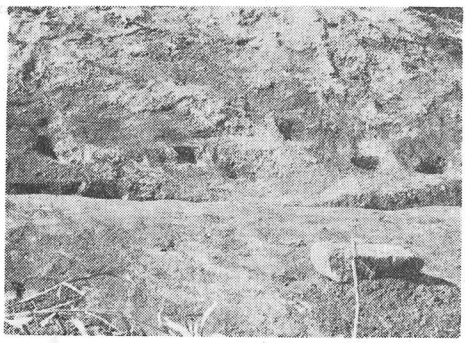


第9図　牛小屋山住居址出土石鏃、甑



第10図　牛小屋山東麓住居址図





第11図　住居址遺構

の床面中央の平石と甑の出土が、住居址と考える有力な根拠となる。

このようにみてくると、結論的には住居址とみてもよかろう。ただ、このとき他遺跡の小構造と共に、住居址に伴う小建築と考えうる可能性は留保しなければならない。一辺3mの隅丸方形の住居とすれば、床面に柱穴なく、外縁に柱穴列があるところから、むしろ土師期のタテ穴住居の類型に近い。

2号遺構　1号遺構と3号遺構の間3mにほぼ一列に小柱穴が連なる。Pit 11～24とする。中に、160cm余りの小溝が不整にみられるが、C－D断面にみる自然傾斜からも、構造上大きな役割をはたしていたものではないと考える。

Pit 11～24の柱穴は、明らかに二種に分れる。Pit 11、20、24の深さ40cm以上のものと、その他の20cmまでのものである。この抽出されたPit 11、20、24が一直線にあり、その上、さきに1号遺構の一辺と同じ方向をとることは、意味深い。ここに建築物があったとすれば、この3柱穴を中心にしてであろう。もちろん、他の小柱穴を併せても上屋構造を考えることは不可能である。

1、2号遺構とも、堆積土はほとんど削られてしまっていた。

3号遺構　南端の、土のとり残された崖面に、20cm余の地山のおちこみが認められた（A－B断面）。遺物の包含は比較的多く、土器片と共に石鏃1とサヌカイト片が採集された。

部分的に床面を追求した結果、方70cm余の平坦面は認められたが、西に進めば地山は自然に上昇した。したがって、A－B断面でのおちこみが、南に伸びるものなのか、あるいは限られた現象なのか判明しない。もっとも、A－B断面地層図の堆積土（黄褐土層、赤褐土層）の走向――おちこみの肩で強く下向する様相より、堆積当時の普遍的なおちこみであったことを思わせる。この見解をとればおちこみは南の未発掘部分に拡がるものであり、さきの Pit 11、20、24を延長して、一つの構造を考えることが可能となる。即ち2・3号遺構を一連のものとみるのである。

なお、 Pit 24が3号遺構に伴う可能性はあるが、 Pit 11、20との対応性から2号遺構に入れた。

なお、この調査は34年2月4日より村川行弘氏を主査として調査3日間にわたったものである。（村川氏の本遺跡に関する論考は『芦屋市会下山遺跡発掘調査概報』芦屋市文化財調査報告第1集に一部発表されている。）

出　土　遺　物

（以下の説明は巻末折込の図を参照しながら読んでください）

当遺跡における採集遺物の豊富なことは驚くばかりである。

1片の縄文式土器および環状石斧、横形石匙、石鏃の若干をのぞいては高地性遺跡にともなう弥生中期後半ないし後期の遺物で、土師器、須恵器、土錘も部分的に小量採集できた。

遺跡の持つ時代からみれば石器は多量といえぬにしても多種で、前述のほか扁平片刃石斧の採集例が多く、石鏃も相当量採集できたし、他に石包丁、蛤刃石斧をはじめ多種にわたる。36年伯母野山地域東部から細形銅剣を実にうまく模写した稀に見る立派な石剣が出土した。（他の高地性遺跡では時代性から石器は非常に少ないようだ。）

石器は非常に用途が多く、折れた蛤刃石斧は石槌に、丸石類は時々の都合で幾通りにも使用された形跡がある。

鉄器は若干採集し、川西市加茂遺跡出土の銅鏃によく似た鉄鏃があり、扁平タガネ状鉄器も出た。

弥生式土器は完形品から小片までを合せると無数なほどに多くて、形状も多種にわたり大遺跡であるから墓地も発見されて壺棺も出土し、また飯蛸壺形土器の採集も多量で、土製紡錘車まである。

その他土師器、須恵器、土錘なども若干採集している。

土取作業が激しく、さりとて科学的発掘調査を望んでも手の打ちようもなかった筆者や斉藤は個人的プレーに終るのを欲しないままにも筆者は昭和22年春より、斉藤は32年春より出来る限り遺物の採集につとめた。両人の遺跡をおとずれた回数については日誌を一々

くるわけにもいかぬが非常な数となるであろう。遺物は整理の都合上36年10月まで採集したもので打切った。伯母野山地域東部ではその後もかなりの遺物が採集できたがやむなく別の機にゆずりたい。なお両人の採集日記はその幾分でも抄出したかったが、ページの都合ですべて割愛した。

石　　器

弥生式土器類の多種ではなはだ多量なのに対して石器類はそれほど多量には採集していない。これは表六甲山系高地性遺跡一般に見られるところであるが、それでもこの方面で近年有名になった芦屋市会下山、西宮市仁川五ケ山に比べると石器の種類数量ともにかなり多い方であろう。筆者の参加した川西市加茂遺跡（関西大学、関西学院大学史学科共同調査、昭和27～31年）に比べて石器類、ことに石鏃類が少ないのは地域的なものばかりではなく、同じ弥生文化期の中期より後期にまたがるものであっても加茂遺跡の方が、その盛期が幾分とも古いことを物語っているものであろうが、それは土器の文様に一層明らかである。本遺跡の盛期には農耕も普及しており木器、鉄器も相当使用されたに違いなかろうが、その遺物は当遺跡の土質上甚だ残りにくいことと思われる。また農耕はかなりの発達を見るとはいえ、地形等の関係から農業のみの生産生活にはまだ不十分であり、季節的に狩猟、漁撈に依存することも少なくはなかったことは一つの特徴といえよう。石器と鉄器の併用時代からやがて鉄器の方が重んじられる時代に住みながらも、その割にすれば石器の使用は多い方と見るべきで、消耗品はもちろんのこと農工具にもかなり多種の石器を使用したようである。

本遺跡では打製、半磨製、磨製および自然石利用の石器がある。

打　製　石　器

特殊形態の一、二を除いて打製石器はすべて安山岩（輝石安山岩＝サヌカイト）である。その原石の主産地は奈良県二上山南部とされているが、ほかに近くの西宮市甲山にはこの種の岩石で出来ており、また市内垂水区西舞子大歳山遺跡附近の福田川およびその附近には自然礫として包含された事実がある。二上山産のものと甲山産の石材は近似しているが、福田川附近の礫は色調など多少異にしているようにも思える。当遺跡は何れの産のものであろうか？、こう考えて当遺跡の打製石器や石屑を熟視すると２種類くらいあるようにも思える。当遺跡の打製石器は加茂などに比べて比較的精巧なものが多い。分業による専門化の結果として完製品および半製品の移入が多分に見られたであろうが、一部には当遺跡での作成の跡も見出される。その一つは36年５月以降伯母野山地域東部ｂ地区で多量に採集した水晶の一括であり（後述する）、もう一つは牛小屋山地域及び伯母野山地域で採集した安山岩石屑である。安山岩石屑の採集量は比較的少なく、それも小さな剥片が大部分で礫や大きな石屑は非常に少なかった。

石　鏃　当遺跡の打製石鏃を無柄と有柄に大別したが、しかし中間式を加えて三つに大別することができよう。無柄のうち底辺が次

第に切込んで雁股のようになったものは逆刺式と呼んでおり中間式は茎の部分の不顕著なものであって、一般に柳葉形などと呼ばれるものである。

弥生文化期において比較的古いものほど無柄のものが多く、時代の下降にしたがって有柄厚肉のものが増してくる傾向にあるといわれているが、その傾向は金属器の形態と対照して考えるべきであり、おそらく製作上の技術とも関係してくると思われるので、有柄無柄などのみで新古を論ずることは出来ないだろう。当遺跡において他の石器にくらべて石鏃の出土量は多いから材料の不足はなく、比較研究にも役立つといえよう。本遺跡には有柄厚肉のものが比較的多く、無柄と有柄は1：2.5位の割合で採集されている。

無柄石鏃　割合厚肉な三角型(1)（巻末折込付図の番号、以下同じ）を除いて、他は比較的薄味で逆刺の顕著なのが多い。ごく最近36年10月伯母野山地域東部で採集したのは長めのもので他と形状を異にし手法などよりみて縄文文化期の特徴が強い(2)・(3)、その前者は逆刺に後者は形状による。その他は正三角ないしはそれに準ずる縦長で何れも10～20mm前後のものである(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)・(12)、何れも両面をほぼ同様に二次的の剝ぎ取り（Chip）がほどこされている。(8)の尖端、(10)の逆刺には特色がある。

(1)は23年牛小屋山地域南部のA地区、(4)・(6)・(7)・(8)・(9)・(11)は28～32年同地域B地区(2)・(3)・(10)・(12)は36年夏より秋に伯母野山地域東部a地区およびb地区、(5)は同地域西北部で採集した。

有柄石鏃　牛小屋山地域の中腹以南厳島神社の背斜面にかけては普通ないしやや小型のものが多く、同地域中腹あるいはそれ以北および伯母野山地域東部では大型ないし特大型のが多いように思われる。いわゆる細長形(13)、変形(14)・(15)・(16)・(17)・(18)から少し茎のある40mmの精巧なもの(19)、茎の顕著な二等辺三角形を基礎的とするものは大型で精巧に作られたのが多く、(20)・(21)・(22)・(23)・(24)・(25)・(26)・(27)・(28)・(29)・(30)・(31)、それよりも正三角に近づく小型を主としたものがある(32)・(33)・(34)・(35)・(36)・(37)、ほかに中間式の柳葉形に近いもの(38)・(39)・(40)、二等辺三角形両裾の丸味あるもの(41)、一端を欠く不整形のものがある(42)、なお細長形の特色あるものの尖端(43)、特大型のものの尖端(44)・(45)がある。後者の2点は大きさより石槍であったかも知れぬ。全体に厚肉で中央部または茎の根元で最大幅5mmで8mmに及ぶものもある。

(13)・(14)・(15)・(21)・(27)・(28)・(29)・(30)・(31)・(34)・(36)・(37)・(38)・(39)・(40)・(41)・(42)は22～32年に牛小屋山地域A地区より南部の厳島神社背斜面、(16)・(17)・(18)・(22)・(23)・(25)・(26)・(32)・(45)は33～34年同地域B地区、(20)はBT（トレンチ）下、(43)はBT（トレンチ）右横、(19)はC12地点、(24)はC1東地点、(33)は同地域西端でそれぞれ32～34年に、(35)・(44)は伯母野山地域東部b地区で36年7～10月に採集した。

石槍　刺すことを目的とし槍に使用されたと思われるもので、形は柳葉形石鏃の大型のもので長さは79mmあるのを、25年牛小屋山地域南部の段々畑で採集した(46)、ほかにこれよりやや大きな未製品で作成中破損し前半分程度のを34年伯母野山地域西北部で採集した。

石鏃　当遺跡のは石鏃に類似し、不整形で頭に小さなつまみと、先に細長い尖りがあり錐に使用されたと見られるもので、24年牛

小屋山地域（以下単に「牛」と略す）A地区で採集(47)。他に同B地区で33年ごく小型未製品の剥片と思われるものを採集している。いずれも錐状突起の部分は比較的短い。なお錐としては竹製品や木片なども使用されたであろう。

石　匙　36年7月伯母野山地域（以下単に「伯」と略す）東部b地区で採集したものは横形の甚だ精巧な作りである(48)。この種のものは筆者の浅学故か表六甲高地性遺跡は勿論阪神地方より播磨にかけてその出土例を知らない。刃の部分は最長68mmで直線的でなく約10mmの内反りでその両端は石槍を思わせる尖りがある。縦はつまみと共で48mm、つまみは横12mm、縦7mmでその凹みと共に実に巧妙に出来ている。恐らく紐でしばって人体に携えたのだろう。全体の形は台形を基礎形として一見がま口を思わせる形状である。皮剥ぎとして使用されたものであろうが或は石包丁的な役目も果したかもしれない。この種の横型左右対称のものはすでに縄文文化前期にしばしば見られるが、遺跡の地点より見て弥生文化前期くらいではないかと思われる。

他に一つ極く小型で切出しナイフの先きのような縦型の剥片石器がある(49)、皮剥ぎの名にふさわしい。石質は他に比して黒味が強くて堅い。32年「牛」B地区で採集した。

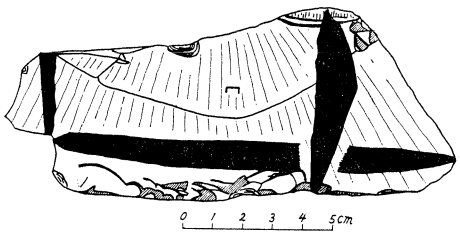
小刀形石器　半月というよりは烏帽子形に近い剥片石器で先端が少し反上っている。みねと思われるほど顕著なものはなく、上面は原石面を残している。33年「牛」B地区で採集(50)。

石包丁　その一つは長方形で平たく打かいた四方を二次的に整え、荒い刃をつけたもので讃岐、吉備地方および離れて日向に多くの出土例をみる特徴あるものである。当遺跡で採集したのは珍らしいが、弥生式土器の文様にも吉備地方出土のものにかなり似かよったものがあり（後述する）、吉備地方の文化が少なからず伝播されているようだ。本品の石質は他の打製石器などと比べてかなり異なる。淡緑黒色で手なれがひどくて新鮮味に欠け一見水成岩のようになっている。風化によるものであろうが、或は遠方からの伝来と考えるべきであろうか。33年11月勝岡山地域（以下単に「勝」と略す）で採集。縦38mm、横95mm(51)。

一つは半月形貝殻状に剥離した石片に、二次的に刃面を細かく加工し内反りして丸味をおびさせた特色があり、刃のない二辺は10mm前後の厚みで原石面を残す。33年3月「牛」BT（トレンチ）右横で採集(52)。

一つは薄身の剥片で未完成な一部である。刃は極く薄く細かい剥離が見られ、みねは少し外反りがある。23年「牛」南部段々畑の中段で採集(53)。

今一つは大型石包丁の半折粗製品であるが刃部は勿論みねの一部にも二次的加工があり刃部は所々小部分的に磨いて黒味の強い箇所がある。みねは外反りし、しのぎに当る部分は貝殻状に剥離されている。先端の斜面は全体に原石面のままである。半折部分の厚みは

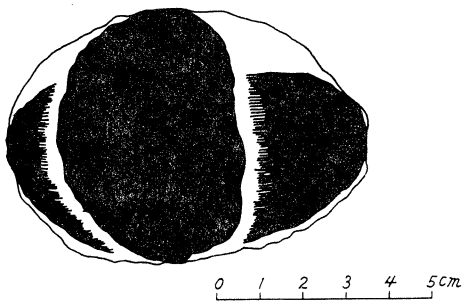


第12図　石包丁

1mm強で非常に薄く或はこれ自体で一つの利器かもしれない。本品は或は石鎌的ものの未製品かも知れぬ（第12図）。33年「牛」B地区で採集した。

石包丁はいうまでもなく稲の穂つみを主体とする用具で用途的に大型と小型は区別すべきだという説が強いが、一括しておいた。

石　弾　家鴨卵形で大きな異型石器で全面を巧みに細かく打砕いて成形している。投弾

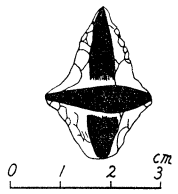


第13図　石　弾

用には少し手の込み過ぎた感じがするが、全体として投弾用に都合よく出来た形状である。或は叩き石など別の用途があったかもしれない（第13図）。27年「牛」A地区で採集。石質は花崗岩らしい。

附　記

36年12月「伯」c地区より十字型石鏃を採集したので記しておく（第14図）。



第14図
十字型石鏃

半磨製品

大型曲玉状異形石器 ㈭　余りにも類形のとぼしい特殊品のため説明に苦しむもので、前期古墳出土の曲玉を大型として孔のないもので、弥生後期に属するものであろうか。いわゆるコンマ状で厚さはほぼ45mm前後、底部に近づくにつれてやや厚味を増す。横に寝させて見ると明らかに表裏の区別がつき、両面とも平面的で表面は自然石の比較的滑らかな部分を利用し、裏面は細かい打撃で巧みに整形され頭部はよく磨かれ、頭部を除いて全体の⅔は火災にあってただれたあとがある。その部分は打製である。これは火災により打撃を加えられたような状態になったか、或は火災後再整形のためにおこなったものではないかと疑って見たが、やはり作成当初の打撃と見るのが妥当であろう。先端にはかなり原石面を残している。頭部の磨製面の一部に朱が附着している。思うに元来自然的に曲玉状に近い形で存在し、当時の人が興味を見出し整形したものであろう。実用品とは思われがたい点もあり、その採集場所からも祭祀用の崇拝物ではなかろうか。砂岩質である。33年6月「勝」地域で採集。

なお石錘のうち半磨製に入れるべきかと思うものもあるがその性格上磨製に入れた。

磨製石器

磨製石器はまず土製品についで文化的価値に富んだ遺品で、当遺跡では石剣をはじめ種類量共に多い。石斧やその他数種の磨製品を採集しているが、石鏃は一個だに見当らない。おそらく何か理由があろう。磨製品の出土例は阪神地方ないし播磨では種類量ともに非常に少なく、当遺跡ほどの出土例を見ることは稀である。

石　剣　この石剣（巻頭第4図）は西日本で発見される最も古い細形銅剣を原形とし、それを実に正確にうまく写し取り甚だ精巧美麗である。銅剣は中国に起原をもつ武器で、朝鮮、中国東北に分布しているが、日本へは最初の金属文化として北九州へ伝えられたのがこの細形銅剣。その後、日本で作られた銅

剣などにくらべて甚だ鋭利な実用品である。銅製は数少なく貴重視され、手に入れることが出来なかったから石製に模造されたわけであるが、本品は写実のうまさと、鋭利な点から、銅剣輸入からほど遠くないころ作られた実用品と思われる。石質は黒鼠色の粘板岩。形状は細長い短剣に近い形、両刃で中央に鎬が、その両側に樋がとほり（有樋式）、根元の部分に短い茎を出して柄をつけるように作られているが惜しいことにその先端を欠損している。その欠損は使用当時であろう。全長の推定は300mm位である。断面は両先つるはしにやや似ている。茎は長さ29mm、幅19mm、厚さ12mm。身は根元より82mm、先きまで斜に突出気味で、そこが段落状となり尖端に向ってゆるやかに狭められており、最大幅53mm、同厚み18mm、現存先端の幅32mm、厚み12mm、孔径6mm位で両方より孔を穿ち左右やや対称でない。「伯」地域b地区で灘建材店の土取作業中出土し、店主大畑氏所蔵。阪神地方における石剣の出土は稀れで、それも兵庫区道場町のは形も悪く実用品とは思われないし、高槻市天神山のは有柄式ながらごく小片である。

石　斧　当遺跡より採集の石斧は木工具に使用されたと思われるのが多く、変化に富み種々の形状のがある。柱状片刃石斧（俗にノミ型石斧という）の出土例が比較的多いのは当遺跡ないしは弥生中後期高地性遺跡の特色である。

環状石斧　（石環ともいう）(1)　異形石斧の一種で、円盤を小さくした竹刀の鍔のような形状で中央に丸い孔を持ち、中高に磨きあげた凝灰岩質のもので、棒にはめ込んで使用したようだ。用途は闘争用或いは指揮棒などといわれるがあまり役に立つ武器とは思われないので、ほかの用途も考えるべきではなかろうか。たとえば土掘り工具のような。

この種のものは縄文後期からも弥生前中期にも出土例がある。本遺跡のものは弥生前期と見るのが妥当であろうか。畿内といわず、ごく稀にしか発見されないが、本州、九州の各地はもちろん東北アジアからも同様なものが出土している。全形も孔もほぼ正円で、孔を含めて径86mm、孔の径は22mm、32年「勝」地域で吉本建材店の土取作業中出土し、店主吉本正雄氏が所有している。

柱状片刃石斧（ノミ形石斧）　図示以外に見聞したのを加えると15本以上を数えられる。ほとんど緑泥片岩の美しい石質で淡緑青ないし緑青であるが稀に黒緑色のもある。製作に当り石質のタテわれしやすい節理をうまく利用しているが、使用中タテわれするような難点もある。横断面は短形ないし台形を呈する厚身柱状で刃面と対称面は美しく研磨されているが側面は磨きが荒く、ほとんど磨かれていないものもしばしば見られる。各面の稜は角ばったのが多い。当遺跡より抉入のものはまだ発見されない。大きさは252mmのものから82mmのものまで各種あるが、150mm前後のものが多い。なおこの種のものは刃のある方を表裏面とし、そうでない方を側面とする。

(2)特大品で非常に立派である。表裏、両側面ともよく磨かれているが、両側面には節理のあとが顕著に残る。各面の稜はこれのみ丸味が強くふくれ上ったように作成されている。頭上部は元来山形に少し突出していたが使用により打撃磨滅のためほぼ水平となっている。長さ252mm、最大幅47mm、厚み32mm。

33年3月「牛」C地区出土。長さに比して幅はやや狭い。

⑶長さ166mm、刃面の幅25mm、側面最大幅36mm、側面の一方に原石面の残るところがある。刃面と相対面の弯曲具合はほとんど同一で先端は二等辺三角形に近い。頭上部は使用により水平になっている。33年10月「牛」C地区で採集。

⑷全形がよく整っている。側面殊にその一方はほとんど磨かれていない。刃面は反りが強くきわだってつけられている。長さ156mm、最大幅40mm、厚み22mm、32年12月「牛」B地区採集。

⑸全形よく整い前者に比して短いが幅のあるもので、4面がよく磨かれている。頭上部は元来水平でよく磨かれたままで使用痕は少ない。刃面の反りは強い方である。長さ124mm、最大幅34mm、厚さ28mm。25年「牛」A地区採集。

⑹石質のやや劣る紫味のかかったもので、側面の一方は使用中水平な節理に従ってさけたように思われ、その先端を斜に少し磨かれている。頭上部に低い山形が残っている。長さ104mm、最大幅38mm、厚さ24mm。31年「牛」A地区採集。

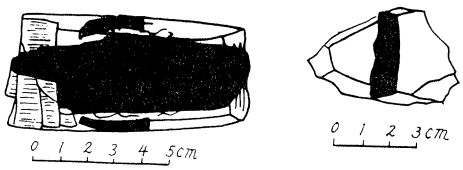
⑺やや小型のよく整ったもので両側面はほとんど磨かれていない。刃部面は上部よりゆるい弯曲で先端にいたっている。頭上部は顕著な山形で一方に使用痕が強い。長さ102mm、最大幅28mm、厚さ18mm。30年「牛」A地区採集。

⑻この種の異形で蛤刃石斧にも入れられぬ短冊形のもので石質は黒味を帯びている。本来のものに比して幅に対する厚みは薄く平たいもので、稜は角ばらず丸味をなす。本来のものは側面の方が刃面やその対称面より幅があるが本品は反対である。刃面は頭上より106mmまで平面で、以下は丸味を帯びながらもきわだった刃がつけられ、その対称面はその10mm上から弯曲して先端にいたる。刃は鋭利性に欠き、刃部を除いて荒い磨製で打製のあとも残っている。長さ134mm、最大幅46mm、厚み26mm。33年11月「勝」地域採集。

⑼絹雲母片岩を用い異形に属する小型のもので柱状の礫を扁平に近く割り、横断面は半月形で多分に自然石を利用し、弧状の原石面を節理に合わせて少し磨き、打割られた面は先端のみを磨いて小さな刃をつけている。本品を丸ノミ形とする説もあるが、普通いわれている丸ノミ形石斧とは相当異なるように思われる。長さ78mm、幅28mm、厚みの最大は12mm。34年4月「牛」C地区で採集。再製品であろうか。

⑽紫味のかかったやや劣等の石質、扁平なこの種のやや異形かと考えられるものの刃先きの一部で全形は推定出来る。さけた裏面の先端に二次的なよく磨かれた刃面を持っているから使用中さけた破片を再製したらしい。幅の広い表面は数角の面ながらよく磨かれている。側面は非常に薄く現存の一面はわずか6mmである。本品は筆者にとって古い思い出の一つである。当遺跡一応の概報作成を古くから考えて来た筆者が下良之克氏の協力を得てはじめて手がけようとした際、その必要から30年6月25日「牛」B地区の住居址炉跡と思われるところにトレンチを行った時採集したものである。

ほか破片2個を採集した（第15図）。右側は縦にさけた頭部より中央部までのもので頭上部は原石面のままに近い山形で、使用によ



第15図　石斧破片

る磨滅はほとんど見られぬから早く破損したのだろう。左側はさらに小さい破片で比較的扁平にさけて形状などは推定する余地もないが石質は紫味が強い。左側は34年3月「牛」C21地点、右側は24年厳島神社の背斜面で採集。

なお赤松氏の手もとにこの種のものが最底3本所有されている。一番大きいものは長さ150mm、幅45mm、厚み30mm。頭上部は傾斜して切立っている。次のは長さ130mm、幅38mm、厚み30mm、刃こぼれが大きい。一番小さいのは(7)に似て頭上部は傾斜して切立っている。いづれも32～33年頃「牛」B地区附近で出土した由である。

扁平片刃石斧（カンナ刃形石斧ともいう）　いずれも硬質水成岩で作られ、カンナ刃を思わせる、工具としての石器文化の最終的なものであろう。今のカンナのように幅広で、比較的薄い片面のもので最後の一つを除いて一般に見られる形状である。刃を一面から磨いた方が手数も少なく非常に鋭利なものが得られると思いつくまでには、大陸文化の影響を必要としたかもしれぬ。

(11)灰緑色粘板岩で非常に美しく形もよく整っている。刃を持つ表面はきわだった一面でなく丸味を帯び刃先きにいたり、頭部は少しく打製を残し、裏面はほぼ水平で先端近かく角ばって内反りしている。側面は丸味なく角に磨かれている。長さ88mm、最大幅68mm、厚み17mm。32年12月「牛」C10地点採集。

(12)白黄色の砂岩質少しく縦長で全体よく研磨されている。前者に類似して表面はきわだつ刃面を持ち、左肩部に見られる大きな打撃のあとは使用中にできた破損であろう。裏面の反りは弱い。長さ98mm、刃先きの幅65mm、厚さ17mm。32年8月「牛」C地区採集。

(13)灰緑色凝灰岩の小型で次に述べる蛤刃石斧と中間型といえよう。片刃でノミようの刃面を有するも前二者とはかなり相違する。表面は平面的で刃面はきわだって作られ縦幅があり、頭部より刃先へ少しずつ広がりを持つ。裏面は丸味を持った弯曲で側面に接し、従って側面は丸味ながらも数角を見せている。24年「牛」A地区採集。

太形蛤刃石斧　肉厚で頭部から段々幅広に刃部に移り、形状も美しく一般に磨製石斧の概念を形作るもので、刃は鋭利ないわゆる蛤刃、斧の両面はその区別なく磨かれ、側面は少し中高となり、横断面は長円形となる。

(14)灰緑色緑泥片岩で蛤刃石斧としては異型に属し、短冊形に近かく先端の幅も少し広がるのみで、刃は蛤刃でよく磨かれ、頭部は多少破損があるにしろ不整形であまり美しくない。長さ132mm、幅56mm、厚み38mm、側面は角ばっている。33年6月「牛」C11地点左上採集。

(15)薄青緑色凝灰岩質で、大きく形状美麗な代表的完形品である。中央部ほど肉厚にふくれ上り、それが顕著で、頭上部は傾斜があり一部に強い打撃のあとがあり滑らかでない。長さ138mm、最大幅66mm、厚み40mm。33年5月「牛」DT左上採集。

(16)太形蛤刃の特色をよく現わした灰緑色の砂岩質。刃部を欠くも、ごく刃先き近くまでを現存しているようだ。頭部の磨きは荒らく

凹凸があるのは使用によるものであろう。頭上部は少し傾斜している。刃の両面は薄く貝殻状に破損剥離している。刃の破損後石槌などに利用されたらしい。現長110mm、最大幅64mm、厚み46mmで、33年「牛」C地区で採集した。

⑰珍らしく良質の石英で作られ、鉄分を含んで全面は淡黄褐色、長めで形の整った自然礫を側面および頭上部を巧みに加工し使用に便利なように作っている。刃部はほとんど原石のままである。長さ158mm、最大幅86mm、厚み42mmの大きなもの。33年「牛」C地区採集。

石槌⑱　閃緑岩質。自然石を巧みに加工し、一応形も整っている。形状の割りには上下両頭面の面積はやや小さく打撃磨滅が見えとりまくまわりの面はよく磨かれている。この種のものは現在まで他に出土例を知らない。長さ108mm、幅64mm、厚さ50mm。23年厳島神社背斜面採集。

石包丁⑲　打製のものはすでに述べたが磨製は一小片のみで、幸いにもみね近く2個の孔のあとを残す。孔は紐通しのためで、それによって人体に携え、或は木製の柄をつけたのもあろう。裏面は節理状にさけている。石質は灰緑色の粘板岩。幅30mm。孔は右側径7mm左側5mmぐらいで、23年厳島神社背斜面採集。

この種のものは川西市加茂遺跡に非常に多い出土例を見る。播磨以西瀬戸内沿岸地方では安山岩打製品が多い。

棍棒状石器　当遺跡はしばしば異形の石器を出土する。ここに述べる棍棒状石器とは筆者が仮りにきめた名称の石器類でその形状や用途について説明に困難を感じる。乳棒状石器に近いと思われるのもあるが、棍棒状を呈したと思われるものをこの種として取扱った。

⑳砂岩質、表面は淡黒褐色であるが内部は白色に近い。徳利を小型にしたような形状で割合平たい。一端にある突起は角ばり特によく磨かれている。丸い部分の横断面は長円形、突起の部分はほぼ正方形である。全長98mmうち突起の長さ34mm、丸味部分の最大幅48mm、厚み29mm。34年3月「牛」C21地点住居址と思われる所で採集。石製磨鏃とする説もある。

㉑石質色調前者に同じ。形状は前者をかなり大きくし、形のくずれたもので、柄のごとく見られる突起部分は角ばってよく磨かれ、表面は丸い塊状の部分を通じて水平である。風化が強く先端は採集後破損した。現長100mm、丸味部分の最大幅59mm、厚み32mm。24年厳島神社背斜面採集。

㉒縞目のある緑泥片岩の自然石で、片方でかなりくびれた不整なすりこぎ形で、横断面は長円形となる。側面は先端から約50mmにわたって少しずつ打撃磨滅のあとを見、ことに40mm前後の所に顕著である。34年3月「牛」C21地点住居址出土。

㉓棒状突起部分を残すのみであるが、現状より破損部分の先はくびれて相当の広がりを持つようだ。やや不整形ながら全体にわたって凹凸があるがよく磨かれて淡茶色で、横断面は鶏卵状に見える。現長101mm、幅36mm、厚み25mm。34年3月「牛」C21地点採集。ほかにこの種のもので、棒状突起部分で完形とする棒状のものを「伯」c地区で36年11月採集。本品と大きさ、石質はほぼ同じである。

石　錘　花崗岩質のが多く、溝は縦も横もあり全形を細かい打撃で加工整形し、そのあと溝を中心として軽く磨いている。いずれも形が整って美麗である。横溝式花崗岩質の美しく大きなものが氷上郡山南町井原から出土し、そのほか石錘に類するものが中央山岳地帯の盆地からも出土しているから漁具以外（ムシロ編み機など）のことも考えるべきであろうが、当遺跡は他に漁具と思われるもの（後述する）も出土しているから一応漁具と見るべきであろう。なお多数採集した丸石類（多くは自然石のまま）の中に或は石錘に属するのがあるかもしれぬ。

⑵4両端の少し細まった俵状で。風化もなく、形状磨きも美しく立派なもので、縦に 6 mm幅の精巧な縄掛け溝は顕著で幅も一定しているが、右の中心部に溝をつけようとしたため少しよじれたようになったのが面白い。横断面は正円に 近い。長 さ 70mm、幅48mm。24年「伯」西北部、当時六甲農園開墾地で出土。

なお円形に近いこの種のものが36年11月「伯」c 地区で出土した。溝は浅く作りもやや劣り、風化が強い。

⑵5硬質砂岩で、川原石を巧みに加工し、分銅形に整形している。溝でない部分は所々に原石面を残す。中央部に浅く幅広い横溝をめぐらすが、⑵4ほどきわだった顕著なものではない。両頭石槌のような感じもする。長さ74mm、幅53mm、溝幅22mm前後。33年２月「牛」Ｃ９地点採集。

⑵6前者に類似して横溝のみを加工したもので、溝は更に浅くほとんど凹みのない箇所もあり、端になるほど溝幅は大きく深さも加わる。溝幅は14～40mm、長さ78mm、幅55mm。33年８月「牛」Ｄ２地点採集。

砥　石　ほとんど砂岩および粘板岩で、その出土例の多いことは磨製石器（ことに大型）の生産・使用の多かったことを意味し、これはすなわち木工具（主として農器具）の発達を示し、鉄器のかなりの普及と相まって農業の高度発達と住居者の富有を見るものであろう。

自然石利用のは砂岩で大きく荒く割り一面ないしはその一部を使用したに過ぎぬのがほとんどで、不整形であって大形ブロックぐらいのものから練瓦ぐらいまで各種で、破片と共に多数採集した。

次にいわゆる砥石（４面とも砥がれているもの）は普通の大きさのを数個採集している。中に鉄器で砥石をすり切ったり、鉄器を砥いだと思われるごく細い溝、点線などが砥面に見られるのもある。

⑵7良質の砂岩、大きく美麗で相当使用されたらしい。長さ264mm、幅93～105mm、厚み48～54mmのほぼ長方形で、平たい表裏両面の反り具合と全形状から蛤刃ないし扁平片刃の相当大きな石斧を主としたことは推定にかたくない。また鉄器を砥いだらしい細線も一端に見られる。33年４月「牛」Ｂ地域採集。

⑵8黄褐色粘板岩で、現在使用される合せ砥に等しく一見現今のものかと思われる位である。砥ぎ減りが強く薄身で扁平状を呈す。石質は良質ながら含まれた鉄分が斑らに所々に出ている。表面は水平で反りも凹みもない。裏面は石材をたち割ったままで砥がれていない。側面は鉄器でたち切ったように思われ、少し砥石としても使用された部分がある。出土に際して両端が破損した。現長219mm、幅72～84mm、厚みは18mm前後。前者と同

地区でほぼ同じ頃採集した。ほかに硬質砂岩で火に合い砕けた一部分がある。厚みは48mm位でかなり厚い。33年2月「伯」地域採集。

次に小型の砥石で、通常さげ砥石などと呼ばれるもので必要に応じて携えて使用したらしいものも数個採集している。

㉙36年7月「伯」b地区石剣出土のすぐ東側で採集した。4面とも使い古されて反りが強い。1面には針のような多くの細線とそれに交わる1本のやや太い線を有する。灰白色砂岩で長さ104mm、幅25～39mm、厚み22～38mm。

㉚現今使用の青砥に似た小型の硬質粘板岩。光沢の美しいもので、沈んだ草色を呈し各面ことに2面に顕著に鉄錆ようのものが付着している。側面の右側はかなり砥がれて弯曲を持つ。3面は砥面と平行あるいは斜に細線と点線を多く持つ。32年11月「牛」C6地点採集。

㉛硬質砂岩で火に逢って赤褐色を呈す。一側面は「く」字型に曲り他の側面は直で、表裏面はいずれも少し傾斜している。長さ130mm、最大幅46mm、厚み20～34mm。32年7月「牛」B地区採集。

㉜砂岩質灰色で赤い縞目がある。薄身の長方形で表面は少し尖り気味の一端に向って反り、図に見られる立切られたようになった一端は幾分とも破損している。33年8月「牛」E6地点採集。

なお赤松氏の手もとに34年春神戸高校生により「牛」DTで採集されたごく小形の美しい硬質砂岩のものがある。

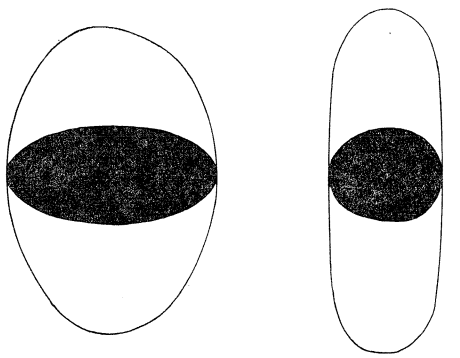
自然石利用のもの、その他

石台（？）その他　石台と思われるものは花崗岩製、縦285mm、横255mm、厚み95mmの1側のみ隅丸となった自然石で表面は非常に滑らかで磨滅の跡が見られるもの。

大型磨石　閃緑岩質長円形で、その半分近くを欠く。全面よく磨かれ、古墳の葺石を見るような感じ。長径推定150mm、短径115mm位。

角石　角石という名はないかもしれぬが、厚み35mm位の煉瓦状をした意味ありげな砂岩質のもの。表面はやや磨滅したようにも思われる自然石。その他表面の滑かでない将棋盤ぐらいの大きさの花崗岩自然石。すべて石剣出土の近辺で採集した。

火打石　火打石と思われるものは、良質の石英で自然の光沢と丸味を持ち、大きさも手頃のものである。大小数個あるが、どの程度までのが、はたして火打石と呼ばれるか疑問を持つ。比較的形の整ったものとしては、第16図左は先きが少し尖りめの長円形で両端に磨擦の跡がある。35年「伯」地域で採集した。右は鉄分を含んで淡黄茶色柱状で両端は丸味を持ち、両端及び片方側面一部に磨擦の跡を見る。34年4月「牛」C21地点住居址採集。長さ90mm、幅29mm、厚み24mm。ほか前者



第16図　火打石

に近い不整形扁平なものは「牛」「伯」両地域で数個採集した。

丸石類　磨石、凹石、敲石など呼ばれているものから、いわゆる丸石の類全般で、中には石錘あるいは石弾に使用されたものも含まれているかもしれない。

まず形のよく整った比較的加工を加えたものとして磨石が見られ、他を兼用したのもある。

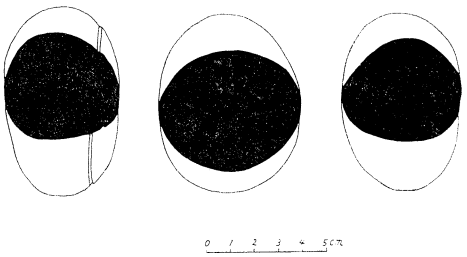
(33)鉄分が薄茶色に出た花崗岩質で、よく磨かれ美しく整形された中高の長円形で一部に角ばりがあって、砥石を使用した跡が顕著である。この種のものとしてはやや異形で相当大きい。長さ124mm、幅79mm、厚み47mmで横断面も長円形。33年6月「勝」地域採集。

(34)石英粗面岩で円形に近い厚みのあるもので¼ほどを欠いている。表裏両面ともほぼ中央に径40mm ぐらいの磨滅による凹みが不整円形に見える。側面も丸味をもってよく磨かれ、これにも左右ほぼ相対して径20mm前後の浅い凹みを有する。33年4月「牛」B地区採集。前者と共にこの種の代表的である。

(35)石英粗面岩の川原石を利用。ほぼ円形で縦横の断面は長円形で、全形がなだらかな丸味で終らず側面はやや角ばっている。また側面は一周するそのほとんどが鉢巻状に細かい打撃加工で仕上げられている。表裏面は多少磨かれ、ごく浅い使用痕が見られる。比較的形の整った良品である。長径94mm、幅85mm、厚み66mm。33年9月「勝」地域採集。

なお大形の磨石は石台(？)と附属しては出土したものがある。

その他俵形ないしはそれに類似し大きさ鶏卵前後の丸石は少くも30個以上採集している。形の整ったのを選出して説明を加える。



第17図　丸　石

1．閃緑岩。やや不整形な俵形で全面磨かれ中央よりやや片寄り、ふくれ上った部分に縦に細線を鉢巻状にめぐらす。人工的と思われるが何のためかわからぬ。長さ76mm、幅56mm、厚み48mm。33年9月「勝」地域採集（第17図左）。

2．薄茶色花崗岩質。大きさ、形状とも家鴨卵位。川原石に多少の磨きをかけている。長さ76mm、幅56mm、厚み48mm。31年1月「牛」C12地点採集。

3．閃緑岩。川原石に多少の磨きをかけている。前者より丸味を持つ。長さ79mm、幅54mm、厚み49mm。34年7月「牛」C21地点上採集。

4．花崗岩質、全面が薄赤黒に焼けている。丸味のある俵形川原石。長さ74mm、幅59mm、厚み50mm。34年「牛」C22地点採集（第17図中）。

5．花崗岩質、全面が赤黒く焼けた不整俵形で一面はすり減って平面的になっている。採集地は住居跡ないし炉跡の顕著な構造はないが、附近より棒杭状の炭化物（長さ約400mm、幅約30mm、厚み約20mm、先はやや尖っていた）がほぼ水平に見出され、とりまく10メートルの周囲からは不思議にも大型水晶を非常に多数採集した。36年9月「伯」b地区採集（第17図右）。

6．石英粗面岩の川原石で両端は少し尖り

めの俵形である。長さ66mm、幅46mm、厚さ44mm、33年「牛」B、C地区接点で採集。

7. 花崗岩質、約⅛を欠く。ほぼ俵形の川原石で磨製らしい。破損面は風化が強くボロボロしている。現存部分も茶碗のひび破れのような亀裂が各所に見られる。またその附近に二、三の浅い凹みが見える。恐らく火災にあったようである。36年7月「伯」a地区採集。

なおこの種の中で砂岩質のが1個あることを記し他は省略する。

次ぎに小型で同上の形および円形のを選出すると

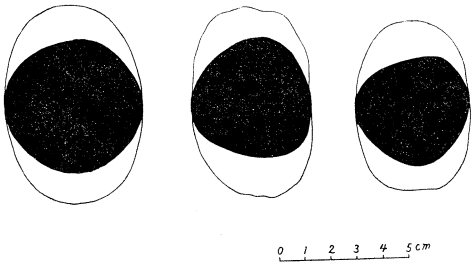
1. 花崗岩質の川原石。やや尖った小型鶏卵形で全面が焼けて灰色になっているが風化は見られない。長さ54mm、幅38mm、厚み34mm。33年6月「牛」BT採集。

2. 同質やや不整な同形で同じく焼けて灰色を帯びる。長さ51mm、幅35mm、厚み27mmで、34年5月「牛」C23地点採集。

3. 花崗岩質の美しい球状で、半面は焼けその一部は荒れている。長さ43mm、幅39mm、厚み31mm。34年「牛」C22地点採集。

なおこの種もので、このぐらいの大きさから親指先ぐらいの川原石で不正円形のものはかなり採集している。小型のものは袋に入れて錘石としたり投弾にも使用したのであろうか。

次に敲石と思われるものは、1個を除いて形状、大きさとも普通の磨石と変りなく両端または一端が小さいながらも平面状に顕著に残り、そのほとんどがその面に打撃痕を持つものを区別したまでである。選述すると



第18図　敲　石

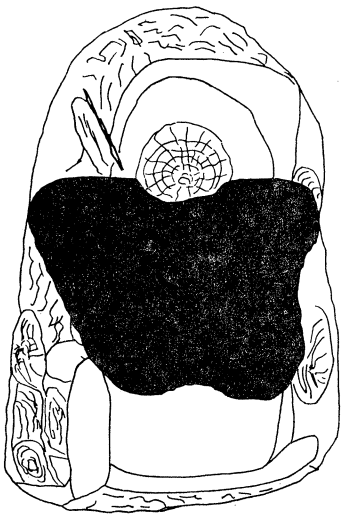
1. 石英粗面岩の俵形で両面的になり使用打撃痕がある。全体に細かい加工で美しく整形されている。長さ76mm、幅54mm。33年7月「牛」C15地点採集（第18図右）

2. 閃緑岩、縦長の俵形で斜に⅓ばかりを欠くが全形は推定出来る。川原石を全体によく磨いた比較的整った形の良品。現存の一端は平面的で打撃痕を持つ。長さ73mm幅46mm。31年5月厳島神社背斜面採集（第18図中）。

3. 閃緑岩、俵形で、両端は平面的。その一端は顕著な打撃痕を見る。とりまく表面の一部分には磨滅のような跡を残す。長さ65mm、幅43mm、厚み41mm。33年1月「牛」C11地点で採集（第18図左）。

そのほか36年7月「伯」a地区採集のは花崗岩質の不整俵形。風化による岩石の硬質部分のみが残り表面は蜂の巣状。両端は打撃痕を持つ。また23年厳島神社背斜面で採集のものは、花崗岩質俵形で両端に顕著な打撃痕を有し、とりまく表面に3箇所の凹みを有す。その他は省略しておく。

次いで凹石と見られるものは（第19図）、石英粗面岩不整短形の川原石で、表面から側面にかけて風化し、裏面は平面的で滑らかである。表裏両面のほぼ中央と側面端、ことに



第19図　凹石

裏面に径15mm前後の使用打撃によるやや深い凹みを有す。大きさは長さ120mm、幅50mm、厚み50mmぐらいである。31年「牛」B地区採集。ほかに安山岩の大型礫で長さ110mm、幅45mm、高さ40mmぐらいの山形で峯に近い部分に人工的にギザギザした15mm前後の細長くやや深い凹みが並び、3箇所とその周辺に5箇所有するものがある。これは発火器に関係するかもしれない。30年頃「牛」A地区採集。

以上丸石類の説明を終る。この種のものに火災にあった跡の見られるものがかなりありまた炉端などのため焼灰等の作用によって石材が灰化しかけたのも見うける。採集地点に一々綿密な調査をおこなっていないので確実にはいえないが、その多くが住居跡、炉跡と思われるような顕著な灰黒土の附近から採集したから、出土例の多くはこれらと関係を持つことであろう。

石器類説明の終りに当って焼石と石屑（石材）について少し記しておこう。

焼　石

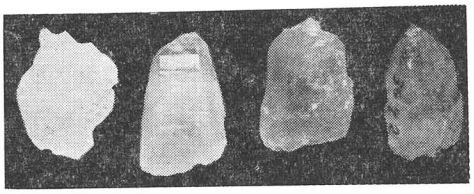
「牛」地域や「伯」東地域から、先にかかげた以外の焼石を若干採集。花崗岩質、石英質、砂岩質のもので多くは川原石のようである。碁石大ぐらいのが多く拳より大きいものはまれで、中には石英質のが淡紅色に美しくなったのもある。

石　屑（石材）

安山岩の石屑についてはさきに述べたのでその他のものを記す。

水晶　水晶類の非常に多量採集した所は、「伯」b地区安田氏道具小屋のある所より北へ10メートル周囲のわずかな場所で、現今ではそれもほとんど見られなくなった。地点は土取り作業によって出来た崖の西側斜面で、かなり深く表土より約30～95cm位のところで採集したが、土器包含層も黒土もなく地山に連なる単なる土砂で、強いていえば部分的に灰あく質的で土砂が少し凝くなっていたように思われる。水晶類以外には前述した焼けの強い丸石と棒杭状炭化物各1個のみである。この方面の土取作業は数年前よりおこなわれているが、35年より。より盛んにおこなわれ、水晶類の出土が筆者の目についたのは36年5月末以来のことで、6月末の大風水害で附近の土砂がかなり壊れ顕著に見出されることになった。筆者がこの地で採集した水晶類はかなり大型のものが多く、拳大前後の美しいものをワイシャツの紙箱にほぼ一杯と、その破片を同箱半分位を10月末日までに採集した。石質は無色透明のが多く半透明、不透明、良質の石英（乳石と呼ばれるものなど種々で）紫水晶に類するのも小量ある。結晶は大きなものがほとんどで、先端三角面の3辺は各40mmぐらいあるものは幾らもある。指先ぐらいの小さな結晶のはほとんどなく、破片も現存の結晶面から見てかなり大きいのが多い。

この地域は勿論水晶山ではなく附近に産地もない。「牛」地域から指先ほどの結晶を二、三個採集したほか、かつて出土例を知らない。当地点の出土状態は、特に大型のものが無惨に打割られたような形で、結晶先端が横向だったり下向きだったりして、ごろごろと出たことに得心のゆかぬ点もある。六甲山系は巨晶花崗岩（Pegmatite）は所々に産し、ことに裏六甲山系に多いというから、或はその地方で大割されたものが、何か目的のためにここへ運ばれたものであろうか。それにしても水晶類の完形品や半製品など一つも発見されず、ほとんどが一次的な加工で、破片の中に何物かを作るべく二次的な加工を見るものはごく僅かである。打製石器製作に当って水晶の尖端を利用する説もあるが如何なるものであろうか。なんとしてもこの地点に対する研究の余地は多分にあるだろう。



第20図　水　晶

燧　石　水色ないし紫色がかった燧石の小片が「牛」A地区より南の段々畑にかけ若干採集。

瑪　瑙　淡黒褐色劣等な1片を「牛」B地区採集。

軽　石　淡褐色原石1辺を打割った小片を「牛」C地区で2片採集。ほか33年頃、「勝」地域で比較的大型の石台状のものが出土したというが、今は失われて大きさ、形状も明らかでない。

硅岩および角岩　硅岩および角岩の川原石に人工的な打割りを持つ石片。24年頃厳島神社の背斜面で各1個採集。

硅化木

いずれも薄い板状で厚みは15mm前後、灰色ないし淡褐色、「牛」C11～23地点で採集したものは比較的大きな（最大95mm）もの多く3個、「伯」b、c地区からは各1小片で、c地区の1個は何かに使用されたようにも思われる。

鉄　器

考古学上鉄器は時代的に3期にわけられている。第1期は舶来の鋳造製品で、弥生前中期のもので北九州に見られる石包丁形の鉄器などをいうのであるが、類例が非常に乏しく疑問の点が多い。第2期は弥生後期（A・D 2世紀）より古墳前期に属し、当遺跡では「伯」a 地区で採集した大型鉄鏃を除いて、ほぼこの期のものと見られる。鍛造の技術が現われると共に鉄が地金（素材）の形につくられ、運搬、保存されることとなるから、その過程を通じて自ら地金に一定の規格が生じたことも類推される。いわゆる鉄鋌の出現である。

弥生文化期では鉄製品が利器として普及し、石器の消滅がみられるのは後期になってからである。この時期の鉄製品はほとんどが鍛造で遺物も種類も多くなく、前期古墳の副葬品にも共通するものが多いことは注目される。すなわち前期古墳の鉄製品は、刀剣を主とした武器類を除くと、それほど発達してい

ないといえるだろうし、弥生後期と同条件の住居址出土の鉄品に限って比較するならば前期古墳に属する例が少くないのに気付く。

第2期において国内でどの程度の鉄生産があったか明瞭でなく、今日まで砂鉄遺跡の確実な発見はなくて、従って「魏志」の弁辰伝にいう南鮮の鉄を倭が採取していたという記事を否定する材料も全くなく、第2期では南鮮の鉄原料に依存していたと見るべきであろう。

第3期は古墳中後期で南朝鮮産のものを加えて日本国産の砂鉄も使用され始め、国内に製鉄業も行われるようになり、副葬品を見ると、中期古墳とくに畿内のそれからの鉄製品出土数は突然変異的に激増し、製品の種類も前期に比べて豊富で形状も変化に富み、とくに武器と工具の発達はめざましいが、農耕具の発達はほとんど停滞している。

鉄製品では鋳造品と鍛造品の区別が問題に上ってくるが、出土品を肉眼で見て仲々区別のつくものではない。しかしわが国出土の鉄製品はほとんど鍛造で、鋳造品はごく稀れである。当遺跡よりは鏃やタガネ状農工具を採集した。

⑴第2期の鉄鏃で弥生式後期前半位いのものであろう（これとほぼ同形の打製石鏃が近かくの「牛」B地区で採集されている)。良質鍛造の鉄挺をタガネで割取って作成したと思われる。現形は縦割れなく、腐蝕部分は茎の根元部分一体に瘤状にふくれ上っているが、元来は二等辺三角形に短い茎をもつ美しいものであったろう。或は中国渡来品ではないかとも思われる（なおこの鉄鏃を採集したすぐ上の層から筆者は鍛造の板状鉄器を採集した)。全長37mm、最大幅（茎の根元）23mm、厚み5mm。推定茎の長さ7mm、幅10mm、厚みはほぼ一定で尖端より左右に刃をつけたようだ。33年2月「牛」C12地点採集。

⑵第2期の鉄鏃(？)で弥生式後期末ないし前期古墳時代に下るかもしれない。全体に鈍厚な実感で鉄鏃ともいい切れぬ。縦割れが強いが原形をよく保っている方で全形は縦長の台形で刃先に弯曲が見られ、頭上部に小さな突起を持つ。全長(突起を含む)69mm、幅は刃先の最大41mm、突起は長さ6mm、幅5mm内外。34年3月「牛」C22点採集。

⑶第2期のタガネ状鉄器(？)の一部であろう。鉄斧の類に見る向きもあるが形状より疑わしい。縦割れが強いが先端の方は原形をよく保存して刃を持つ。破損部分近い箇所は腐蝕の結果大分ふくれ上っている。現長115mm、先端の最大幅44mm、厚みは7mm前後であろう。34年5月「牛」C22地点採集。

⑷第2期タガネ状鉄器で弥生後期のものであろう。短冊型で段々幅広に先端に至り刃がつけられている。次の⑸と共に鉄鋌をを打割る工具であろう。縦割れがあり、また表部には疣状の腐蝕が見える。長さ139mm、幅は先端66mmで、厚みは7mm位であろう。34年6月「牛」D3＋C22地点採集。

⑸前者の少し大きいもので形状もよく似ている。頭上部に突起のあとをわずかに残す。全長（突起を含む）164mm、最大幅72mmで厚みは5mm位であろう。突起は長さ3mm幅10mm。33年6月「牛」西端2地点採集。

⑹第3期鉄鏃。中期古墳副葬品として普通に見られる鉄鏃で有茎斧矢式である。全長92mm、うち茎長22mm。刃先きの幅31mm。36年11月、「伯」a地区山上に近いかなりの傾斜地で単独に採集。古墳のあるような場所

ではないから実用に供されたものだろう。

ほかに前述した板状鉄器は素材と思われ、かなり土砂をかんで凝固しており、それを除くと鉄器を多分に損ずる恐れもあるので現在そのままにしている。従って原形も明確でないが一面はやや平面的で、長さ105mm、幅65mm、厚み12mm位である。他に各地域から釘状鉄器を若干採集している。その多くは厳島神社背斜面のものである。

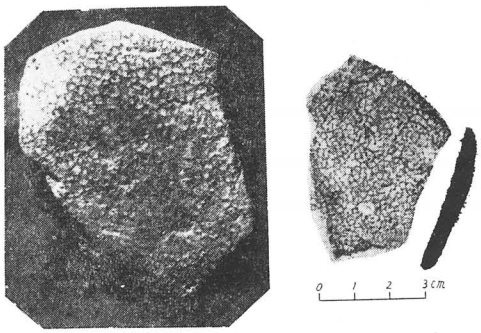
鉄器に関しては森浩一氏より多くの教示を得たことを感謝する。

土器

1片の縄文式土器以外はほとんど弥生式土器で若干土師器、須恵器を地域的に採集した。遺物全般のところですでに述べたから、詳細は各遺物説明の際にゆずる。一言添えたいのは当遺跡土器の中心である弥生式土器において、当遺跡採集のものは全般に、文様は流行を追って比較的新らしく、形状は比較的古い伝統を残すことがいえそうである。

縄文式土器

最近県下における縄文遺跡ないし縄文式土器の発見例は相当数を増したが、当遺跡でも縄文式土器の1片を採集した。何分1小片で熟視してもくわしいことがわからず、筆者の持合せている若干の書籍にも一通り当っても見、種々尋ねても見たが結局余り得るところがなかった。写真と拓本を見て戴かねばなるまい（第21図）。文様はやや磨滅しているが円形に近い小さな押型文であろう。45×60mm位の大きさで現存全体は少し弯曲が見られる。またそれとは異なって多少の凹凸があり、両端にはかなりの段落があってその附近で破損している。表面は黒褐色、裏面は淡黄褐色で内面の磨滅はかなり強いが断面より見て文様はかなり深い。厚みは4～7mm位いである。胎土は多くの砂粒を混入した粘土で、焼成は良好比較的硬い。地形的に他より押流されて来たことなどは考えられない。32年7月「牛」B地区採集。



第21図　縄文式土器

なお筆者居宅のすぐ南、篠原本町2丁目（旧称篠原字中之島）で古く昭和3年12月小林行雄氏が縄文晩期、いわゆる亀ヶ岡式の甕棺破片を弥生式土器と共に採集し、学界に報告されている（史前学1—5・4号）。

弥生式土器

当遺跡は非常に多量の弥生式土器が出土している。器物の形状がわかるのは少なくも100個以上、破片は無数に近い。復原して完形あるいはほぼ完形になり、製図上完全復原出来るのは50個余りもあるが、ほぼ完形のままで採集したのはごくわずかである。まだ十分に復原を終っておらぬが、復原または製図したものだけでもかなりの量になるので巻末折込に図示したものはその一部に過ぎない。その出土割合は牛小屋山地域60%、伯母野山地域35%、勝岡山地域5%位の現状で、勝岡

山ではほとんど胴部小片が多く形状のわかるものはごく少ない。「牛」「伯」両地域では形状、文様、色調、焼成など全く各種のものを採集した。いずれも有名な奈良県唐古遺跡を中心とする畿内第3様式～第5様式（以下単に「3様式」などと呼ぶ）すなわち弥生文化中期後半～後期全般に亘る。当遺跡の地域的な土器の新古を論ずるまでには至っておらぬ。なお「伯」西北部から大型盛期の器台を採集、形状文様（鋸歯文）は岡山県南部いわゆる吉備地方を中心として中部瀬戸内式に見られるのに似かよっている。石包丁と共に幾分ともこれらの文化が入り込んでいることは興味ある問題である。

非常に多量採集したからその形状も各種に亘り、壺、甕、鉢（甑を含む）、蓋、高杯、器台を始め飯蛸壺形土器、紡錘車その他に及ぶが更にそれを細別すれば多種になろう。文様なども無文有文各種で、普通無文は手づくね、ヘラ削り、刷毛目、叩き目、ロクロ削りから、有文はヘラ描き鋸歯文、曲線文などもあるが数少なく、櫛描文の方が多く見られ、中でも波状文を主に直線文、簾状文、格子目文、重孤文、平行線文、凹線文などがあり、粘土紐をめぐらし刻目文、円形貼付文、凸帯斜行文、刺突文、竹管文も見られ、ほかにヘラ描記号的標識文と思われるのも若干ある。裏面に木葉文(？)を持つのも1片ある。なお指痕や鉄丹、籾跡の顕著に残るものも数片ある。内面口縁部に文様を持つのも若干ある。内面はロクロ削り、刷毛目、荒いヘラ削りが見られる。成形（製法）は手づくね、巻きあげ、輪積(平均30mm位)、ロクロ削りの種々な手法が見られ、ごく精巧なものからごく粗末なものまであり、有孔も多い方であろう。色調も白から黄、紅、茶、黒系統の各色に亘り、厚みも2mm～15mmぐらい各種で、厚手大型のものでは胎土に火廻りをよくするため植物繊維を混入して焼いたのではないかと思われるのもある。時代と色調、焼成は余り関係せぬのが多いのも当遺跡弥生式土器の特徴と思われ、5様式でも焼成良好なのが相当ある。

器形の部分的細部を何と呼ぶか問題になろうが、通常人体になぞらう名称が用いられるのに従った。胴から口に移る所を頸、頸に接する胴の上部を肩、胴の張った所を腹、台の一種を脚というが、その境が不明瞭であるから頸から上を口頸部、口の上端を口縁部、胴の上下をわけて上腹部、下腹部などと呼ぶ。これら部分に限らず器形、胎土、色調、焼成などすべて実感のままで学術的用語に統一出来なかったが、その点は承諾いただきたい。

なお説明方法であるが、完形品（完形に近いもの、製図復原を含む）と破片に大きくわけ、前者は時代別、後者は部分的に細別した。土師器、須恵器は項を改めた。出土例の割合は20（3様式）:35（4様式）:45（5様式）の割合と思われる。

弥生中期後半（3様式）

壺形土器 (1)、次の(2)と共に3様式壺形土器の代表的なもので、その特色をよく見せている。大型で球形に近かく豊かに胴の張った器体に漏斗状の口頸部をつけ、比較的小さくやや丸味のある底（丸底という程でない）に終る。頸部より下腹部におよぼす13列の櫛描文は、最下の波状文を除いてすべて直線文である。口縁部は端を上下に肥厚させて数条の凹線文をめぐらした段上帯となる。口縁内面にも櫛目を1列にめぐらした施文がある。内

面は縦方向のヘラ跡を残す。胎土は選良土(良質の粘土)、色調赤褐色、焼成良好。口径238mm、腹径360mm、底径100mm、高さ392mm、厚み6mm位。32年12月「牛」C 9地点採集。

(2)前者類似で、前者程の胴張りなく、最大径が少し上って器体の中央にあり、底部はやや大きい。頸部より腹部におよぼす櫛描文は交互に直線文と波状文をめぐらし、上下は直線文とする。口縁端の上下肥厚は少し外開きで波状文を施す。胎土は選良土、色調茶褐色、焼成はやや軟弱で、口径128mm、腹径228mm、底径70mm、高さ270mm、厚み5～13mm。33年3月「牛」C 9地点出土。落合重信氏所蔵。

(3)算盤玉状に胴の張ったやや大きな平底の器体に、弱く外反し外開きする上下肥厚の口縁部をつけ、口縁部は凹線文を施す、器体は大きく荒い刷毛目のあとを顕著に有し、腹部は後に1条の不整形な丸味のあるヘラ描刺突文をめぐらす。頸部にロクロ、内面にヘラ仕上の跡を残す。胎土は選良土、色調赤褐色、一部淡褐色、焼成良好。口径118mm、腹径190mm、底径60mm、底面は少し丸味がある。厚みは4～15mm。34年4月「牛」C20地点採集。採集地点附近は小さな窯跡かと思われ本品の内部および周辺にスサと思われるものを交えた塊状の焼土を若干採集した。

(4)ごく小型の壺で口縁部をわずかに欠く。頸部は刺突文、胴部は不整なヘラ描斜行文を面白く施している。手づくねで成形し相当厚味がある。胎土は選良土、色調黒色、焼成良好。胴径44mm、底径24.5mm、現高44mm、厚み7～10mm。32年12月「牛」B10地点採集。

(5)把手付台付長首壺という長い名で呼ばれ美しい形状と色調を持つ。本品を水差形の一種と見るむきもある。把手の大部分を欠く。口縁は凸凹のある直口で、下腹部は張りが強く腰高で丸底を持ち、脚台の裾部も丸味がある。把手は肩部の左右に半環状に付き、手こねで小さくやや不整形に思われる。脚台は器体のわりには小さい。表面はヘラで縦横縦と使いわけ、荒いが雄大に描き、内面もヘラ仕上げである。胎土は石英質砂粒少量混入の粘土で、色調赤褐色ないし薄茶褐色、一部黒色、焼成良好、口径87mm、腹径150mm、脚台裾の径90mm、高さ225mm、厚みは器体底部を除いてほぼ5mm位。33年2月「牛」C12地点採集。

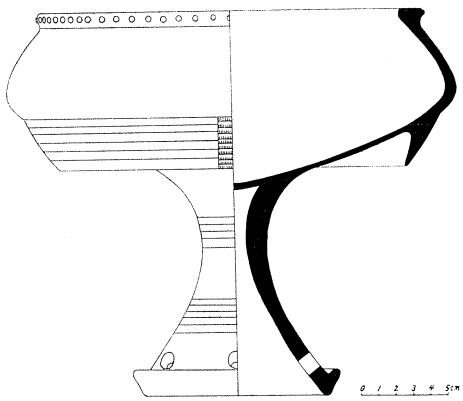
(6)ごく小型の台付壺。当期後半位であろうか。脚台は裾部を欠くも相当長い方であろう。器体は腰張りが強い。手づくねで器面は荒れているが元来無文であろう。胎土は多量に砂粒混入の粘土、色調褐色、一部黒色、焼成不良、口径43mm、腰径55mm、厚みは器体7mm、脚台12mm前後、32年11月「牛」C 4地点採集。

甕形土器　甕は通例壺ほどの華やかな装飾は見られず、3様式と4様式の区別は筆者の如き浅学には困難で確実なきめ手はない。形は余り変化がなく、4様式は3様式の文様なきものと大差ないといわれるが、必ずしもそうだといい切れない場合もある。

(7)比較的大型の長球形で縦横は2：1の割合。「く」字形に強く曲折した口縁部を持ち、なだらかな胴張りから安定のよい平底に終っている。頸部はロクロの跡を見、肩部以下は縦にヘラ仕上、肩部内面に輪積の手法が1箇所見られる。胎土は砂粒を少量混入の良質な粘土。色調茶褐色ないし黒褐色、焼成良

好、頸部の一部に煤が附着。口径160mm、胴径227mm、底径66.5mm、高さ315mm、底部の厚みは13mm。34年3月「牛」C21地点採集。

高杯形土器　当期に属すると思われるものは2種あるようだ。大型に類するものは口縁部に縦幅のある水平縁をもうけ、その外端を曲折させて垂れた浅い鉢形の杯部をもち、脚部はごく短い中空筒状の柱部に、下端を幅広く肥厚させた漏斗形の裾部をつけている。小型に属するものは仏前に供する仏飯器に類似の形状で、杯部は直口やや深めの鉢形で、脚部は長い中空筒状の柱部を急に曲折した裾形をつけている。後者の方が時代的に少し新しいと見なすべきであろう。前者の完形品を筆者らは採集出来なかったが、30年頃服部晃氏が「伯」東部地域で採集した図を戴いた、（第22図）。



第22図　　高杯形土器

⑻小型に属し形状色調共に美麗で、杯部は直口、稜をもって比較的垂直に下り深めで文様なく、脚部は長い中空筒状の柱部に漏斗状の裾部をつけたもので、柱部の裾部と接する上下は数多の櫛描直線文をめぐらし、裾部に多数の有孔と下縁をもっている。なお脚部に鉄丹を施した痕跡を見る。全体（内面とも）ヘラ仕上で、ことに杯部はよく研磨されている。胎土は選良土、色調赤褐色、焼成良好、口径115mm、柱径25mm、裾径65mm、高さ136mm、厚み柱部9mm他は3～6mmぐらい。孔径は表面3mm、内面6mm、で櫛描直線文にかかった分もある。32年11月「牛」C6地点採集。今所在不明で十分観察が出来ないが、当期後半位のものであろう。

蓋形土器　壺用と甕用とかある。他に高杯の破損した裾部を利用したのもあると思う。

⑼小形無頸壺の蓋と思われ、截頭円錐形で中央は上面を水平にきり立つつまみを持ち、2孔一対の紐孔をあける。表面は放射状にヘラ磨き、内面もヘラで掻き取って仕上げている。胎土は選良土、色調表面淡黒褐色、裏面鼠色、焼成良好、全高127mm、底径104mmつまみの径20mm、孔径3mm、厚みは4mm位。24年厳島神社背斜面採集。

異型蓋形土器　附図にした両者⑽・⑾とも類型を聞かないが、形状、手法等から当期と考えた。器体の小さい割に大きく顕著なさげ把手を有し、把手の形状が銅鐸の鈕に似て興味を感ずる。手づくねで内面はヘラ仕上とし、器面全体に多くの指痕が見られる。上下を逆にして小杯等を考えたが手法より見て無理なようだ。胎土は砂粒混入の粘土。色調黒色、焼成良好緻密。全高（有孔部分を含む）37mm、器体の高さ33mm、底径45mm、厚みは把手で7mm。33年5月と33年10月「牛」C8地点とC9地点で半分ずつ別々に採集⑽。

⑾前者と類似、一層把手が顕著で従って全高を増す。手法、色調、焼成等も前者に同じく器面に多くの顕著な指痕を有す。全高52mm、器体の高さ28mm、底径64mm、厚みは把手

で8mm。33年10月「牛」C8地点採集。

弥生後期前半（4様式）

（4様式は中期末よりはじまるとの説あり）

壺形土器　当期通常の壺形破片は非常に多量採集したが、ほぼ完形ないし復原出来得る程のものは少なかった。

⑿小型手づくね無文で、口縁部を欠くが恐らくは直口であろう。短かい頸部と上腹部のはった器体をもつ。内面は底面より45mm上に輪積の手法が顕著に見られる。器形は左右対称でない。胎土は選良土、色調灰色、焼成不良、現高58mm、上腹径59mm、底面やや不整で底径26mm、厚みは4～9mm。33年2月「牛」C12地点採集。

⒀前者よりやや大きく、長球形で口縁部を欠くが直口ではなかろう。胴腹部の最大径は器体のほぼ中央で、張りは余り強くなく、比較的大きな底部に終る。頸部はロクロの跡を、以下は内面ともヘラ仕上である。胎土は選良土、色調灰色、一部黒色、焼成やや良好。現高91.5mm、胴径86.5mm、底径38mm、厚みは6mm前後。33年2月「牛」C12地点採集。

⒁小型の無頸壺。口辺も底面も比較的大きく背の低い平底で、口縁部外縁が少し削られたように作成されているのは蓋を置く設備のためであろうか。扁球形の器体は胴張りがゆるい。ほぼ手づくねで作成し、口縁部はロクロの跡が見られる。胎土は選良土、色調表面茶褐色、内面黒色、焼成緻密。34年4月「牛」C22地点採集。

甕形土器　前述したように甕の3・4様式区別は困難であるが、一応当期と思われるのを選出した。

⒂「く」字形に強く曲折した口縁部は口縁端の心もち上方に拡がった感がある。胴部は丸味をもって比較的強く張り、小さな平底はやや突出したように作成される。口縁端は段状に凹線文を、胴部最大径附近に櫛目斜行文をめぐらす。口縁部はロクロ成形、以下はヘラ仕上で後に頸胴部に板状木片で横に叩き目を入れている。内面もヘラ仕上。胎土は砂粒多量混入の粘土、色調淡茶褐色、胴部以下に煤の附着箇所あり、焼成良好。口径175mm、胴径249.5mm、底径75mm、高さ310mm、厚みは5.5～10mm。34年5月「伯」西北部採集。当期後半か。

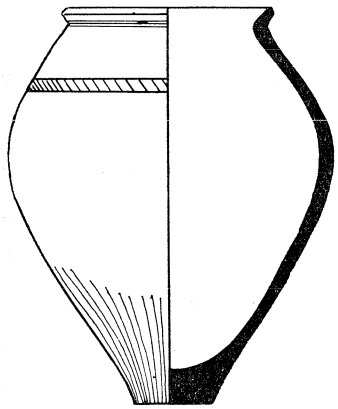
⒃口縁の大部分を欠く大型のもので、胴張りは比較的強く、焼ぶくれがあって左右はかなり不均等になり、底部は小さく安定が悪い。口頸部は貼付の櫛描凸帯文をめぐらし、全体にヘラ仕上をしている。胎土は上部選良土、下部は多量の砂粒を混入、色調灰褐色、一部黒色、焼成良好。胴径333mm、底径80mm、現高369mm、底部の厚み25mm。中心線は口頸部で右に37mm振る。32年7月「牛」B地区採集。

⒄「く」字にやや強く曲折した口縁部をもち、胴部は比較的強く張り、かなり大きく曲折して底部に至る扁球形の器体を持つ小形のもの。口縁部にはロクロの跡が、以下は所々に刷毛目が見られるだけで文様はない。内面も刷毛仕上。胎土は細砂少量混入の粘土、色調褐色ないし黄褐色、一部黒色、焼成良好、口径93mm、胴径114mm、底径38mm、底面は中央で1mm程上っている。高さ121mm、厚みは5mm前後。34年8月「牛」C地区採集。当期後半か。

⒅底部を欠いた大形の甕で、「く」字形に強く曲折し上下に肥厚した口縁部をもつ胎土は良質の粘土、焼成やや柔かい。口径352m

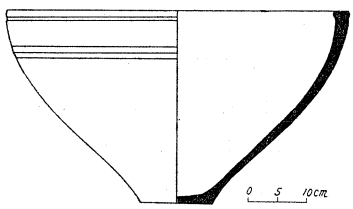
m胴経442mm 現高720mm。34年4月「牛」C21地点住居址採集。

なお30年頃服部晃氏より「牛」A地点採集の大甕を示され、下良之克氏に実測図を作成して貰った。胴部に貼付凸帯文の退化した刻目文をめぐらしたものであることは覚えているが、5年以前のことゆえ、メモもさがし当らず他は確実な記憶がない（第23図）。



第23図　甕形土器

鉢形土器　鉢形の全形が知れるものを我々は採集出来なかったが、服部晃氏が前述の高杯と同年、ほぼ同場所で採集し図をいただいたから示しておく（第24図）。



第24図　鉢形土器

⑲鉢の異形で把手付台付鉢と呼ぼう。壺形にすべきかと迷ったが、唐古遺跡のこの種の壺に見られる程扁球形の器でないので鉢としたが、壺によく似た点が多い。即ち器体に円筒状の脚台をつけた形で、脚台は器体の腹部に接続し、口頸部の曲線をうけて下方でちぢまる形に作られているが、通常の脚台とは外観をいちじるしく相違する。脚台には4個の円孔を穿ち、上腹と下腹および脚下部に凹線文をめぐらす。口縁部に孔はない。3様式の把手付無頸台付壺からみちびかれた形であろう。胎土は選良土、灰色一部赤褐色、焼成やや不良。口径208mm、底径138mm、高さ183mm、把手は片方のみで大きく中央よりやや下に少し肩落ちして付きほぼ100mmの長さとなる。厚みは5～10mm位。34年3月「牛」C21地点住居址採集。

高杯形土器　⑳直口の口縁部をもつやや浅い杯部に、上部から円錘形に開く高いめの脚台をつけたもので裾部は突出したように作成され、全形が角ばって見える。無文無孔。器面全体をヘラで研磨し、内面もヘラ仕上。杯内面一部に鉄丹の塗られた跡を残す。胎土は砂粒少量混入の粘土、色調暗褐色、焼成良好。口径200mm、底径128mm、高さ195mm、厚み5～13mm。32年5月「牛」B地区採集。当期後半か。

蓋形土器　㉑甕用であろうか。編笠状にて截頭円錐形。上縁部がひらたく裾をひく形で背高に作られ、つまみを持たない。下縁部は脚台の裾部のように顕著。表面の一部はロクロを使用し後にヘラで放射状に削り、内面もヘラで掻きとって仕上げている。胎土は選良土、色調茶褐色、焼成やや良好。上径40mm、下径101mm、高さ27mm、厚み4mm。34年4月「牛」C21地点住居址採集。

㉒甕用のであろう。器体は円板状でつまみは乳状小突起。手こねで胎土は砂粒少量混入の粘土、色調淡茶褐色、焼成良好。下径102mm、全高23mm、厚み18mm前後。33年「

牛」C地区採集。一般に4・5様式(ことに5様式)の類例少なく筆者には区別困難である。

弥生後期後半（5様式）

壺形土器 (23)長頸壺と呼ばれ、長球形の器体にやや長い筒形の口頸部をつける。この種のものとしては口頸部が比較的短かく、外びらきのかなりある直口で左右は対称していない。底部も無造作に小突出した平底で、すべて簡潔な手法を示す。口縁部はロクロ削り、頸胴部は荒い刷毛が面白く見られる。内面は輪積手法で成形された粘土帯の継ぎ目が顕著である。その幅は上より104mm、95mm、70mmある。胎土は砂粒少量混入の粘土、色調茶褐色、一部黒色または黄褐色、焼成良好。口径109mm、腹径186mm、底径62mm、高さ269mm、厚みは8mm前後。34年4月「牛」C22地点採集。当期前半か。

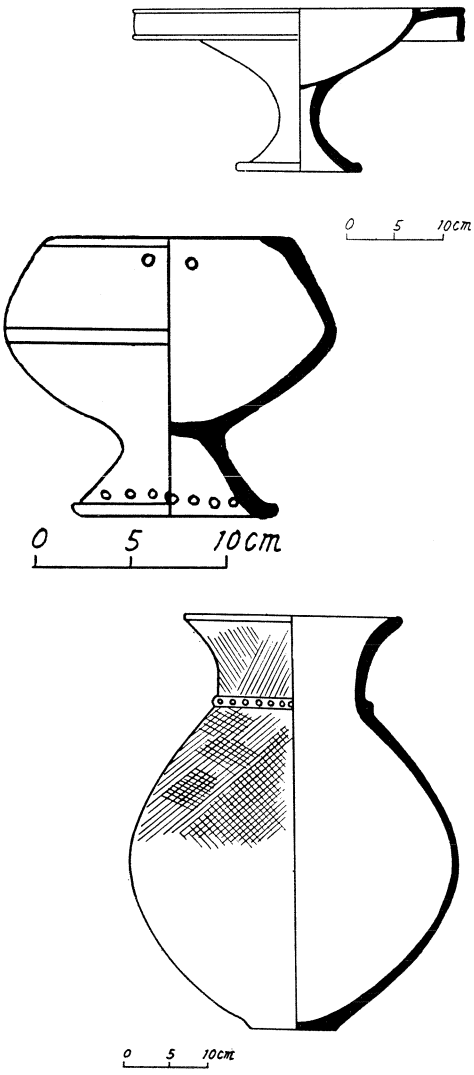
甕形土器 (24)奈良県新沢遺跡出土のものに類似し、口頸部が「く」字形にやや大きくなり、胴部が長く、底部は小さく不安定で、砲弾形のもの。底部は貼付け上げ底で小突出。底端を4mm程上げている。文様は全体に叩き目の後に刷毛目仕上し、まだらに両様が見られ、また刷毛目で消したような跡も見える。内面も刷毛仕上。胴腹部に広く所々に煤の附着を見る。胎土は荒い砂粒混入の粘土、色調黄褐色、焼成良好ではなく、器内は少し荒れている。口径148mm、胴径185mm、底径35mm、高さ264mm、厚みは4mm前後。36年11月「伯」c地区にて口縁部を手前に横倒しに採集。

(25)鉢に近かづいた甕。口縁部は大きく上下に肥厚してやや内反り、その下端は少し狭められ、底部はやや丸みをもつ貼付底である。底面には籾跡および植物茎の如き跡あり、腹部にも籾跡らしき物もある。頸部以下はヘラ仕上している。内面は刷毛仕上。胎土は細砂混入の粘土、色調赤褐色で底部半面には煤を見る。焼成良好。口径174mm、底径68mm、高さ169mm、厚みは厚く、12mm前後。33年7月「勝」地域採集。当期前半か。なお籾跡の顕著に見られるものは5例ほど採集している。

鉢形土器 (26)小型直口普通のもので比較的古式を保つ。底は平の貼付け底。縦に荒いヘラ削りで仕上げ底部近かくは板目が見られ、底面は細かい凹凸のまま。内面は横に櫛目で薄く削り、後にヘラで研磨。なお口縁両面はロクロの跡が見られる。胎土は石英質細砂混入の粘土。色調表面灰黒色、内面淡黒褐色、焼成やや良好、口径136mm、底径49mm、高さ86.5mm、厚み8mm前後。36年10月「伯」c地区採集。

高杯形土器 (27)杯部は大きく、ごく浅く平たい鉢形で、口縁部より少し下った所に小さな縁となった突出が見られる。蓋を安置するためとも考えられるが、口縁端の垂線より内側にあるから実用にならぬ筈である。脚台は上部よりなだらかな裾びらきを見る全体ごく薄手のもの。器内は入念なヘラ磨きで仕上げ、裾部に凹線文をめぐらす。胎土は選良土、色調淡黄褐色、焼成良好、口径173mm、裾径75mm、高さ143mm、厚み5mm前後。33年8月「牛」D2地点採集。

以上で弥生式土器一般形状完形およびほぼ完形品の説明を終り、紡錘車・飯蛸壺形土器を一括説明するが、その前に服部晃氏より戴いた原図が前述以外にあるので示す。



第25図　高杯、台付無頸壺、壺

上より高杯（3様式）台付無頸壺（4様式）壺（5様式？）で我々も破片は若干採集しているが、この図で始めて全形を知ることが出来た。ただし前述下良之克君実測の甕以外は図のみで実物は見てないからくわしいことはわからない。

紡錘車

石製のは発見出来ず、土製のみで3個と破片と思われるもの若干を採集。全部土器片を利用している。麻糸をつむぐ時に糸巻棒にさして回転をたすける機具である。

㉘小型（といっても通常この位いのが多い）で正円に近かく整っている。作成の時の打欠きが周辺一部に残る。器面はかなり弯曲がありやや中高。胎土は選良土、色調淡黒褐色、焼成良好。長径34mm、孔径4mm、厚み4mm。33年「牛」C12地点出土。3様式後半か。

㉙やや長円形で大きく撫角状に角張る。器面は水平であるから、相当大形の壺を利用したのだろう。作成の打欠きが少し見られる。胎土は選良土、色調淡褐色、焼成やや不良。長径50mm、孔径4～6.5mm、厚み4.5mm。33年「牛」C10地点出土。

㉚⅓近かくを欠くと思われ、前者より縦長の長円形であろう。薄手で弯曲がある。胎土は細砂混入の粘土、色調淡茶褐色、焼成やや不良。短径44mm、孔径5.5～7.5mm、厚み3mm。33年8月「牛」C17地点採集。4様式であろう。

飯蛸壺形土器

小型の蛸壺で、大阪湾沿岸と北九州沿岸に出土例が多いが、六甲山系高地性遺跡では当遺跡を除いて余り出土例を聞かぬ。この種の土器は弥生式後期に初めて現れ、時を経ずして顕著に発達し、古墳時代を通じて近世に至るまでその形状が伝統的に存続して来た。

その研究大成は戦後で、ことに森浩一氏の論文（「大阪湾沿岸の飯蛸壺形土器とその遺跡」古代学研究2、昭25）は堺市浜寺町四ツ池遺跡を中心とする大阪湾沿岸のこの種土器の分類と出土遺跡を網羅し、その後赤松啓介氏と斉藤の両者により当遺跡「牛」地域採集の考察を進め（「たこつぼ型土器の型式編年

—神戸市・伯母山遺跡の研究—」神戸史談214、昭34)、大別については森氏提唱に準じ、特に第1式の分析に重点を置き型式分類による編年とその推移過程を辿っている。更に今里幾次氏は両論文を参照しつつ姫路市平松出土のものについて(「播磨平松の飯蛸壺形土器」神戸史談216、昭35)研究発表され、当遺跡についても少なからず有益な言を述べておられる。筆者の如き浅学にはそれ以上の研究もないが、追加採集もあるので先輩のすでに発表されたのを基として述べてゆくことにする。

器形は3型式に大別出来、第1式は器体が壺形で口縁(口唇)直下に1孔を穿つ(例外として2孔のものあり)、第2式、第3式は直接関係ないので略すが、第1式はまた3型式に分類され、第1型は平底、第2型は丸底、第3型は尖底で、第1型は群と類に、第2・3型は類に細別する。ほとんどが「牛」地域採集で「伯」東部地域では破片若干である。出土例は破片を含めると20個以上となろう。

(31)第1型(以下略す)第2群第1類。胎土は砂粒少量混入の粘土、色調灰白色、焼成良好。粗雑な手こねで内面はヘラ仕上とし、厚手で表面は荒れている。口縁部はかなり内曲し、外縁が少し削られたように作成。胴部最大径は器形のほぼ中央、孔は口唇下7mmにあり径は10mm。孔の上部とその対称する位置にすり減りが見られる。口径47mm、胴径70mm、底径34mm、高さ88mm、厚み10～14.5mm。32年7月「牛」B地区採集。4様式前半か。当遺跡最古の形に属し、この頃に飯蛸壺形土器の器形が固定されたらしい。

(32)3群1類。胎土は選良土、色調赤褐色、焼成良好。口縁より胴部に横板目文、以下に縦の刷毛目を施す。胴部の最大径は底から⅓程、口縁部はほぼ垂直。底部は大きく傾斜はあるが安定は悪くない。孔は口唇下15mmにあり、径は8mm。口唇附近に糸跡らしい1痕を有す。口径56mm、胴径76mm、底径32mm、高さは一方99mm、他方92mm、厚み7mm。33年2月「牛」C12地点採集。以下(36)まで5様式前半であろう。

(33)未発表のもの。前者と同類。少し横長で底部は厚く、少し突出したように作成され、胎土は細砂少量混入の粘土、色調灰褐色ないし黒色、焼成やや良好。表面上半分は横に板目、以下は内面ともヘラ仕上。胴部の最大径は底から⅓。口縁部はやや内反している。口唇下10mmに径8.5mmの孔を持つ。口径9mm、胴径5mm、底径14mm、高さ98mm、厚みは5～17mm。34年4月「牛」C22地点採集。

(34)3群2類。胎土は砂粒少量混入の粘土、色調黄褐色、焼成やや良好、胴部の最大径は口縁部と余り変らずほぼ中央にあり、左右対称はやや歪む。口縁より胴上部にわたって横板目が強く、その部分はわずかに階段状を呈す。口唇下10.5mmに強く内傾した径11mmの孔あり、底部は少し突出して作られている。口径53mm、胴径61mm、底径30mm、高さ83mm、厚みは9mm前後。33年2月「牛」C12地点採集(大矢氏所蔵)。

(35)3群3類。胎土は選良土、色調白褐色、焼成良好。器形はほぼ円筒形で胴張りがない。口縁から胴部にかけて大きく簾状に近い板目を有し、下胴部から斜に淡黒い煤が胴部をまいている。口唇下8mmに径10mmの孔あり。口径56mm、胴径63mm、底径40mm、底面はやや丸味をもつ。高さ94mm、厚み7

mm前後。33年「牛」地域採集。

㊱未発表のもの。3群4類とした。胎土は細砂少量混入の粘土、色調淡黒褐色、焼成良好。胴部の最大径はほぼ中央にあり、口縁部は少し内反りしている。手こねで底部のみ横板目を施す。口唇はややすり減りも見られるが元来凹凸があったらしい。口唇下14mmに径11mmの孔あり。口径63mm、胴径72mm、底径45mm、底面はやや丸味をもつ。高さ82.5mm、厚み8～12mm。34年7月「牛」D3＋C22地点採集。

㊲4群1類。胎土は選良土、色調淡茶褐色、焼成やや良好ながら粗雑な作り。表面は縦刷毛目、内面ヘラ削りの仕上。胴部の最大径は底面より⅓の所にあり、胴張りは比較的大きい。口唇下13mmに強く内傾した径7mmの孔あり、底部は平底。口径55mm、胴径85mm、底径31mm、わずかに傾斜が見られる。高さ86.5mm、厚み2.5～13mm。33年2月C12地点採集。5様式後半ないし亜流と呼ばれる頃であろう（大矢氏所蔵）。

㊳未発表のもの。前者同類。胎土は砂粒混入の粘土、色調灰茶色、焼成不良で一部に荒れが見られる。良好な手こねで仕上げ、胴部の最大径は中央よりやや下にある。口縁より胴部最大径にかけてやや右下りした板目を施す。口唇下14mmに強く内傾した径11mmの孔あり。口径59mm、胴径76mm、底径35mm、高さ87.5mm、厚みは5.5～11mm。34年7月「牛」D3＋C22地点採集。5様式前半であろう。

㊴未発表。5群1類とした。薄手で形状は電球型。胴張りは大きく最大径は底面より¼の所。底部は丸味がかなり加わっている。胎土は選良土、色調灰茶褐色、焼成良好。表面は手こねのままで凹凸あり、内面はヘラ削りの仕上げ、成形もよく精巧に作られている。口唇下12mmに径9mmの孔あり。孔の上部は磨滅している。口径57mm、胴径79mm、底径30mm。34年4月「牛」C22地点採集。5様式後半か。

㊵未発表。2孔を有する特殊品で、仮りに6群1類とする。胎土選良土、色調茶褐色、焼成やや不良。扁球形に近かく胴部の最大径はほぼ中央にある。美しく成形され底面はやや丸味を持ち、口縁部の内反りも強い。一般より孔は下って口唇下25mmに径8mmの2孔を持つ、孔はほぼ平行で孔端より他の孔端まで17mm。2孔を有することは進化を示すことになろうが、他の遺跡には出土例を聞かない例外品である。口径56mm、胴径85mm、底径30mm、高さ99mm、厚み8mm前後。34年3月「牛」C21地点採集。5様式後半ないし亜流か。

㊶2型2類。胎土は砂粒少量混入の粘土。色調灰褐色、焼成やや良好。尖底に近い丸底、口唇は段がつき、比較的胴長。胴部の最大径はほぼ中央にあり、口縁部は内反りしている。口唇下15mmに径8～10mmの孔あり、孔に対向するあたりの口唇にすり減りが見られる。成形は手ずくねで、やや粗雑、表面は荒れ、胴の一部に煤の跡を残す。口径58mm、胴径76mm、高さ104mm、厚み7～12mm。33年2月「牛」C12地点採集。前者と同時代か。

㊷2型3類。胎土は選良土、色調淡赤褐色、焼成やや不良で成形粗雑である。胴張りは大きく最大径は底面より⅓のあたりにある。孔は小さく口唇下13.5mmに径5～9mmの孔をもつ。口唇は段があり、口縁部はや

や内反を見る。口径56mm、胴径74mm、高さ89mm、厚み8mm前後。33年2月「牛」C12地点採集。前者と同時代か。(41)と共に尖底への移行を如実に示すが、確実な尖底は筆者等の知る限り出土例を聞かぬ。当遺跡を除き表六甲山系高地性遺跡ではこの種土器の出土例が少ないにしても、当遺跡では石錘・土錘（時代は下る）も採集しているので、多少の疑問はあるが筆者は森浩一氏の推定された漁具として飯蛸壺に使用されたことに賛成したい。これは当遺跡における季節的な生業であったろう。他の用途についても考えては見たが蛇足となるので止める。最古の(31)を除いては「牛」C12、C21、22地点に主として採集したことは、当遺跡内の特徴でもあり、使用者等について何か暗示しているかもしれぬが、そこまで突止めていない。

以上で弥生式土器完形品全体の説明を終り、次に破片に移る。破片は非常に多量採集したが、実は余り多数なためこれらを整理分類し図示することは限られた枚数上、全く不可能で、中からある程度の特色を持つ比較的大きな破片を一部撰出したにすぎない。

また説明についても筆者は完形品同様の詳細な記録を作っているが、ごく必要以外すべて省略し、用語も簡略にした。

口縁部破片

壺形土器 (43)球形で豊かに胴腹部の張った器体に、漏斗形の口頸部はその端を上下に幅広く肥厚させ凹線文を段状にめぐらし、頸部の中ほどがひきしめられたように成形しヘラ描短線文を2段にあたかも羽状のようにめぐらす、ごく薄手のもの。全体ロクロ仕上。32年5月（以下破片採集年月省略）。「牛」B地区採。3様式。

(44)～(49) 普通の壺形、口縁部は顕著で、その端を上下または下に幅広く肥厚させ、多くは凹線文をめぐらす。(44)は凹線文の上に縦2本（長短あり）と円形の貼付文をほぼ等間隔にめぐらし、口縁部内面にも重弧文を施す。「牛」C23点採。3式後半か。(45)凹線文の上に円形貼付文をめぐらし、頸部も凹線文でひきしめられたように作成、胴上部は櫛描の簾状文、胎土の内部は繊維質を混入した黒土状。「伯」西北部採。3式後半か。(46)口縁部の幅はやや狭い。上半は細かい波状文、中央に円形貼付文を施し（推定51個ぐらい）、口縁部内面にも櫛描の列点文を見る。頸部はやや長めで、下方に凹線文がある。「牛」C12点採。4式前半か。(47)凹線文の上に広い間隔で縦2本ずつの粘土紐貼付文を施す。「牛」C21点採。4式前半か。(48)凹線文を段状にめぐらし、その上に間隔広く、円形貼付文を施す。「牛」C5点採。3式後半か。(49)口縁部の幅はやや狭く、上下に櫛描の羽状綾杉文をめぐらす。「牛」C12点採。4式後半か。

(50)～(52) 頸部のやや長いもの。ただし長頸壺ほどではない。(50)口縁部は上下に幅広く、段状の凹線文をめぐらす。胎土は黒雲母の多量混入せる粘土（この胎土は恐らく化粧土として意識的に混入したであろう。他に「牛」地域から若干採集。4式に多い）。「牛」C22＋D2点採。4式後半か。(51)長頸壺に近づく。口縁部は狭く、垂れも少なく、円形貼付文を施し、胎土は前者同様黒雲母を多量混入。「牛」C23点採。4式後半。(52)口縁部はやや外開きした漏斗状の簡潔な製形で、口縁下端の透間に少し粘土をつめ込む。「牛」B地区採。5式。

(53)〜(58) 口縁部はかなり外開きして大きな長頸壺で凹線文をめぐらす。(53)胴上部まで現存。比較的頸部が長い。口縁部上下端に凹線文、頸部下端は貼付凸帯文に刻目を見る。「牛」A地区採。4式。(54)中央に凹線文をめぐらす。「牛」C地区採。4式。(55)多数の凹線文をめぐらし、その下方数線は特に深い。「牛」C23点採。4式。(56)上端の内曲した口縁部は下方に行くに従ってかなり狭められ、頸部をひきしめている。「牛」DT上採。4式。(57)鉢等にも見えるが、本品を熟視すると壺の口辺部と思われる。口縁上部に5条の凹線文をめぐらす。「牛」C地区採。4式。(58)口縁中央やや上部に2条の凹線文とその間の高まりに凸帯文の退化した刻目文をめぐらす。「牛」C15点採。4式後半か。

(59)〜(63) 口頸部が小さくて長く、長頸壺にやや類似し、下方が一旦せばめられたもの。多くは凹線文を有す。(59)口頸部はゆるく外開きし、上端を削り取ったように簡潔な作成。「牛」C6点採。5式。(60)上端は内開き、上端近かくは凹線の上に円形貼付文、下端にも凹線文をめぐらす。「牛」B地区採。4式。(61)上端は内開き、上端より⅔まで凹線文をめぐらす。「牛」C23点採。4式。(62)上端はやや外開き、口頸部下方まで数多な凹線文をめぐらす。「牛」C21点採。4式。(63)上端はかなり外開き、口頸部に5条の凹線文をめぐらす。表面にはかなり煤の附着した部分あり。「牛」C21点採。4式後半か。なお(61)・(62)(63)のうち水差形の口頸部があるかもわからない。

(64)〜(67) 普通壺形のやや異形なるもの。(64)「く」字形に曲折した口縁部は上端が狭く、削り取られたように作成。口頸部は縦、胴部は斜または横に叩き目を付け、肩部は比較的大きな円形貼付文を施す。胴の一部に煤の附着を見る。内面は輪積手法による約20mmの粘土帯継ぎ目が顕著に見られる。「牛」C22点採。5式。(65)口頸部の短かい長球形の器体。口縁の下端は丸味をもって狭められ、上端は少し小さくなる。表面は全体に荒い刷毛目で簡潔な仕上げ。「牛」C21点採。5式。(66)前者に類似し、器体は胴腹部の張りが大きい。内面はおよそ30mm幅粘土帯を巻き上げにより成形した継ぎ目が見え、後に口頸部を貼付けている。表面胴上部にヘラ描山形を呈した簡単な記号文と思われるものがある。所有者目印の標識文様であろうか。「牛」C地区採。5式。(67)口頸部はごく短かく非常に大きな彎曲をもって胴腹部に接す。口頸部は器体と別に作って貼付けている。「牛」C1点採。5式。

(68)〜(73) 甕の形状に近い壺で、薄手が多く、口縁上端に施文(70)〜(72)も見られる。(68)口頸部の整った普通の壺に近い、やや厚味あるもの。口縁部は外開きが強く、その上端は削り取られたように作成され、仕上げはやや粗雑。刷毛目仕上げの上、頸部に多数の小さな刻目文をめぐらす。内面は上端より6.5mmに段落が見られ、頸部には継ぎ目箇所がある。「牛」C22+D2点採。5式。(69)口縁部が「く」字形に強く彎曲し甕に近い。胴上部は縦刷毛目の上に叩き目を羽状に面白く施す。一種の標識文か。「牛」C21点採。5式。(70)口縁部上端は、やや突出気味に作成し、その部分に櫛描の列点文をめぐらす。内面は凸凹の箇所あり。「牛」C地区採。5式。(71)口縁部上端は突出したように作成され、2段になり下方の下端に刻目文をめぐらす。

「牛」C地区採。5式。(72)甕や鉢にも見られる形状で、口縁も胴部も彎曲が強い。かなり薄手で、口縁上端には凹線文、胴上部にはやや不整列に櫛描の短線文をめぐらす。「伯」西北部採。5式。(73)前者の類似で、口縁上端の幅をやや広くし、少し厚味がある無文のもの。胴部に煤が附着。「牛」C21点採。5式。

(74)～(78) 無頸壺に類似し口縁部が突出し、その部分は直接または粘土紐を貼付けるなど分厚く丈夫にしたもの。(74)口縁部の突出はわずかで、下端はしまりがほとんどなく胴腹部に接する。口縁部は狭い間隔でやや不整列な円形貼付文と直下に浅い凹線文をめぐらす。なお上面にも数条の浅い凹線文がある。「牛」C6点採。4式後半か。(75)口縁部に2条の凹線文を間隔一定でないほぼ一列の円形貼付文を有す。上面にも浅い4条の凹線文がある。「牛」地域採。4式前半か。(76)やや幅のある口縁部は無文で、その下端に2孔を有す。胴上部には数条のヘラ描直線文を2列にめぐらす。「牛」地域採。4式前半か。(77)狭い口縁部は櫛描の刺突文、胴腹は櫛描の波状文と直線文を交互に恐らく下腹部まで幅広くめぐらしたであろう。表面は全体にわたって赤色の化粧土を用い、内面は荒い刷毛目の跡を残す。「牛」C21点採。3式後半か。(78)前者に類似し、口縁と胴部の接線附近にヘラ描の刻目文を施すのみ。「牛」地域採。4式後半か。

(79)～(80) いわゆる無頸壺。脚台の有無はわからないが、無かったようにも思える。(79)上端近かく大小2個の円形貼付文を施し、その下に櫛目波状文を入れている。胴上より胴下部にわたって幅広い凹線文を数条めぐらす。凹線と凹線の間は少し盛上って、あたかも凸帯のように見られる。「牛」D2点穴の中で採。4式。(80)上端よりおそらく胴下部まで幅狭く凹線文をめぐらしていたと思う。凹線の間は少し盛上ったように作成。「牛」地域採。4式。

(81)口縁部のやや外開きした、胴張りのある球形に近い小壺。表面はヘラでよく研磨され文様はない。胴腹の一部に煤の附着あり。「牛」C22点採。5式。

甕形土器 (82)～(83) 大型口縁部に特色が見られるもの。(82)口縁部は装飾的で顕著に作られる。即ち、やや突出して幅広く上方は凹線文の段状、下方は凸帯に荒く丸味のある刻目文を施す。「牛」C14点上採。3式後半か。(83)やや外開きした狭い口縁部はヘラで刻目を施し、ゆるく曲折して胴部に接す。「牛」C23点採。4式後半か。

(84)小型で合口甕棺に見られるような長円形を半分に切った形。狭い口縁部は水平に突出して成形。「牛」C23点採。5式前半か。

(85)通常のやや丸味あるものだろう。口縁部も丸味を持ち、上端は顕著に内方に向って水平に曲折している。「牛」DT左上で採。4式後半。

(86)口縁部が外方に肥厚して作られ、下端に孔の跡あり。「牛」C22＋D2点採。4式。

(87)～(91) 通常の甕形種々。(87)底部附近を破損した長球形のもの。口縁部は幅広く、「く」字形に曲折する。胴部に附着物が多い。「勝」地域採。5式前半か。(88)口縁部は突出して彎曲が強く、なだらかな胴部をもつ。現存下端部に煤の附着を見る。「牛」C21点採。5式。(89)胴張りが強く平らたい器体に、口縁部はやや突出して、その先端は斜下方に下ったように作成。「牛」C21点採。5式前半か。(90)口縁部は「く」字形に強く彎曲し、先端は

少し削られたように作成したごく普通のもの。「牛」C地区採。4式か。(91)薄手の球形に近い器体に、口縁部を「く」字形に、その先端を削り取られたように作成。胴腹の一部に煤の附着あり。「牛」C21点採。5式。

(92)把手付台付の小形甕。当遺跡では他に類形を見ない。脚台と把手を破損するのみで、ほぼ全形は推定出来る。口縁部はかなり彎曲し胴腹部の張りも強い。把手は頸部に小さくつけ、全体がこじんまりした美しい器形よりなる。口縁部は櫛描の斜行短線文を、胴腹最大径附近に櫛描の羽状線文をめぐらす。表面は赤色化粧土を使用す。36年7月「伯」a地区採。4式前半か。

鉢形土器 (93)口縁部は少し突出し先端は削り取られたように作成され、胴上部が垂直に下り、それより急に彎曲して底部に至る。やや粗雑な手法。「牛」C21点採。5式。

((94)〜(98)) 無頸壺と余り変らないが、斉藤の説により台付鉢の口縁部とした。ただし現存部分のみでは脚台を知ることは不可能である。なお附図に孔がないからといっても、必ず孔がないとはいい切れない（口縁の一部しかないものより製図復原したのがある)。凹線文をめぐらす。(94)口縁より胴部にかけてかなり内反し、胴部最大径の上下に幅広く7条の凹線文をめぐらす。「牛」DT左上で採。4式。(95)前者に類似し、口縁部先端を少し縮め、その直下に2孔一対の紐通し孔があり、胴部最大径はやや下って、その附近に狭く数条の凹線文をめぐらす。内面は赤色の化粧土で磨かれている。「牛」C14点採。4式。(96)口縁部先端は少し縮め、胴部最大径附近に数条の凹線文をめぐらす。「牛」C6点採。4式。(97)口縁部先端は内方へわずかに曲折、直下に2孔をもち、胴上部はゆるい外開きした稜線で最大径附近に2条の凹線文をめぐらす。なお内面最大径やや上部に継ぎ合せた跡を顕著に残す。

(98)土師器や須恵器に見られる碗に似た形状で、口縁部上端に蓋をのせる設備がある。「牛」C地区採。5式後半ないし亜流か。

高杯形土器 ((99)〜(101)) 口縁部に幅広い水平縁をもうけ、その先端を曲折させて垂れ、内端には水平縁をめぐる1条の隆起帯を突出させた形で、浅い鉢形の杯部をもったものでその進化を筆者なりの時代順に置いてみた。(99)水平縁が最も長く、その先端を垂直に垂れ凹線文をめぐらす。「牛」C23点採。3式。(100) 先端に凹線文をめぐらす水平縁の上に、縮まった1条の隆起帯を突出し、口縁端はやや斜下方に垂れる。「牛」C11点採。3式後半か。(101) 水平縁が短かく、杯部は少し小さく、肩下りが見られ、上下端に各々凹線文をめぐらす。内端には水平縁をめぐる1条の低い隆起帯あり。水平縁の先端は垂直に垂れる。「牛」C6点採。4式前半か。

((102)〜(111)) 大型高杯。杯部は直口大きくて浅い鉢形で皿形に近いのもある。(102) 杯部はこの種ではやや深め、中央附近に3条の凹線文をめぐらす。脚台は短い中空円筒状の柱部をへて裾広がり。「牛」B地区採。3式後半か。(103) 浅鉢形、口縁部はほぼ垂直に下る。「牛」地域採。4式。(104) この種の異形。幅広い口縁部は下端を押広げた、深めの杯部を持つ。口縁部は短い間隔で2列の櫛描波状文をめぐらす。「牛」地域採。4式前半か。(105) 口縁部は垂直で上下端を突出させ、その部分に凹線文をめぐらす浅鉢形。角ばった感じを受ける。表面は煤の附着箇所あり。「牛」

C21点採。4式前半か。(106) 鉢形はやや深め、口縁部はゆるやかに内面、上端および中央に凹線文をめぐらす。「牛」地域採。4式。(107) 円錐形に近づいた浅鉢形。口縁端は削り取られたように作成、先端と中央に幅のある凹線文をめぐらす。「牛」A1点採。4式後半か。(108) 口縁部はやや内曲し下端を少し突出させたように作成した浅鉢形。「牛」C6点採。4式後半か。(109) 鉢形はごく浅くなり、口縁部は先端をやや削り取られたように作成し、なだらかに内反りする。文様なくヘラ研磨の仕上。「牛」D2点穴の中で採。5式前半か。(110) 杯部は浅く皿形に近づき丸味のある強い彎曲が見られる。36年7月「伯」b地区採。5式。(111) 杯部は浅く角ばった皿形で、内底面が大きい。美麗なヘラ仕上げ。「伯」西北部採。5式後半か。

((112)〜(117)) 小形高杯。杯部の鉢形が比較的深く碗形に近いのもある。(112) 口縁部はほぼ垂直に下る浅鉢形で、脚台は短い中空円筒形柱部から裾広がりに下り、柱部はほとんど充実した箇所もある。36年8月「伯」b地区採。4式。(113) 口縁上端から丸味をもって強く彎曲したごく浅い鉢形。「牛」C21点採。4式後半か。(114) 口縁先端よりなだらかに内曲する杯部に、脚台は短い中空円筒形柱部から裾広がりに終る。「牛」C21採。4式後半か。(115) 半球形で、碗形に近い。ヘラ研磨で美麗に仕上ている。「牛」C14点採。5式。(116) 逆台形に角ばって見える碗形。「牛」C23点採。5式。なお附図しなかったが円筒コップ状の非常に深い杯部を持つのがある。(117) 甚だ小型で、口縁部は垂直に下りその部分が大きい。「牛」C15点採。5式。

蓋形土器 ((118)〜(119)) 壺用に使用されたと思われるもの。(118) 低い截頭円錐形で、裾部は下縁端を心もち上げる。なお中央に上面を水平にきりたつ低いつまみを附けたと思われる。表面は縦のヘラで放射状に磨かれている。孔は無いようだ。「牛」C21点採。3式か。(119) ごく低い截頭円錐形で、すんなりとした丸味を持つ。つまみは現存状態より見てごく小さく、孔は1孔一対であろうか。「牛」C21点採。4式か。

((120)〜(123)) 甕用と思われるもの。(120) 高杯の裾部を思わせるような背のある編笠状。高杯作成中都合で蓋に変更されたのではあるまいか。なお破片高杯の裾部を甕用に利用されたのは若干見うけられる。裾部の孔は現存等間隔の3孔で一対かどうかはわからない。孔は左より始めのは盲孔、次はよく開孔し、終りのはわずかに開く。下縁は顕著で凹線文をめぐらす。「牛」C5点採。4式か。(121) 截頭円錐形で下縁は段状にせばめられている。つまみは中央に上面を水平にきりたつ小さいものであろう。孔はかなり上にある。1孔一対か。「牛」C5点採。4式。(122) 編笠状で、下縁は段状に突出しその端を上へ反らせて顕著に作る。2孔一対か。「牛」C22点採。4式。(123) 円板状で低く、上面は段をつけてやや高さを増す。つまみは乳状小突起か。孔は2孔一対であろう。かなり時代の下る形物であるが、まず5式後半か。「牛」C地区採。

底部破片

底部だけでは壺、甕、鉢などの区別と時代区分は余程の特色がない限り、その見分けが困難であろう。甑を加えて形状および時代の明らかなものはそれを記述した。

((124)〜(125)) 甑は「牛」地域、「伯」地域を合せて10個以上採集。周知の如く穀物を蒸

すために使用したもので、当遺跡のは余り深くない鉢形で底部は焼成以前に1孔を穿つ。孔は非常に大きいのと小さいのがある。(124) 丼鉢を思わせる半球形で上部の破損は幾らもあるまい。底面は押しかためられた指痕と荒い刷毛目が見られる薄手のもの。孔は大きく径26mm。「牛」C21点採。4式。(125) 底部が小さく立上り、胴腹部の張ったやや長めと思われるもの。底部を厚くし、小さい孔は上部程広くしている。底面の孔径18mm。「牛」地域採。4式か。

((126)〜(127)) 大形の甕。底の内外面とも広く作り、稜線で立上り胴腹部の張ったもの。(126) 「牛」D2点採。3式後半か。(127)「牛」C21点採。前者よりだいぶ小さい。4式か。

((128)〜(135)) 多くは壺であろう。小型平底のもの。(128) 普通のもので底部が厚い。「牛」C11点採。3式後半か。(129) 胴腹部の外反がやや強い。「牛」C12点採。3式後半か。(130) 底部が小さく胴腹部の外反りがかなり強い。「牛」C地区採。4式か。(131) 薄手で、底内面を広めに作り、胴腹部の外反はやや強い。「伯」西北部採。4式。(132) 底は内外面とも大きく、やや強い稜線で立上る。外底面を荒い刷毛で美しく仕上げている。「牛」C21点採。4式か。(133) 外底面が広く、強い稜線で立上り、胴部が厚手のもの。「牛」C21点採。4式。(134) 外底面のやや広く、ゆるい稜線で立上るもの。底部が厚い。「牛」C21点採。4式か。(135) 胴腹部外反りの相当強いもの。「牛」C21点採。4式か。

((136)〜(139)) (136) を除いて、わずかに上げ底の見られる小型のもの。(136) 底部を厚く作り、台形の小さな脚台状の上げ底を持つ。「牛」C22点採。5式後半か。(137) 底をわずかに上げる。「牛」C22点採。5式。(138) 底をわずかに上げる。「牛」C21点採。5式。(139) 外底面の中央部に指で押したような凹みが見られ、植物茎のの跡らしいものが二、三見られる。表面は凹凸のある作りで、胴腹部の外反りが強い。「伯」西北部採。5式か。

((140)〜(144)) ごく小型の平底で、少し特色の見られるもの。(140) 厚くやや長いめの底部は少し突出したように作成されている。「牛」C21上点採。5式。この種のものは10例以上採集。(141) 貼付け底で、段状に突出して作られている。胴腹部は叩き目がみられる。「伯」西北部採。5式。(142) 底端がやや丸味を持ち、胴腹部の張りが強い。「牛」C21点採。4式か。(143) 小さい底部はその上が急に外反するもの。「牛」C地区採。5式。(144) 底部はやや突出したように作られ少し丸味があり、胴腹部の外反はゆるやか。胴部は板目が見える。「牛」C地区採。5式か。

((145)〜(146)) 薄手で底面がやや広く、ゆるい稜線で立上るもの。前者は表面に、後者は内面に荒い刷毛目を見る。甕であろうか。(145) 胴腹から底面にわたり厚く煤の附着する箇所がある。「伯」西北部採。4式か。(146)「牛」地域採。4式か。

((147)〜(154)) 脚台状ないしそれに準じ、上げ底の顕著なもの。(147) やや小さな底面は茶碗に見られるような高台状に空いた上げ底。「牛」C14点採。5式。(148) 脚台状で、脚がやや高く、相当裾開きするもの。「牛」C23点採。5式か。(149) 低い脚台状で裾開きが少ない。「牛」C23点採。5式。(150) 底部は底面に近づく程大きく突出し、顕著に作られ、底面は長方形状に空く貼付された上げ底である。内底面はかなり凹凸が見られる。器体は

球状に近いものであろう。「牛」E３点採。５式。(151) 現存部分は糸巻き状に残り、丸味のある上げ底で、胴部はゆるく外反する。「牛」C21点採。５式。(152) 底部はやや小さく、胴腹部は急に外反する。底面は長方形に空いた上げ底。「牛」C21点採。５式。(153) 面はやや大きく、少し突出気味に作成し、丸く空いた上げ底。胴部の外反はゆるい。「牛」C６点採。５式か。(154) 底部の上端にしまりがあり、下端を突出した作製。器体は長球形であろう。「牛」地区採。５式。

(155) ごく小形で、いわゆる丸底の壺であろう。「牛」C６点採。４式か。

(156) 筆者は上下を逆にして高杯の脚台を考えたが、一応斉藤の説に従った。筒形の底部は底面ともよく整形され、内面はヘラで掻き取った仕上である。「牛」C21点採。４式か。

(157) 平底で、その中央部をやや上げ気味。底部に近く１個の円形を貼り付け、その円形にヘラで縦２線を入れる〔㊞〕。所有者の記号文であろうか。「牛」C22点採。５式。

(158) 口縁部をわずかに破損するごく小形の長球形よりも円筒形に近い壺で、飯蛸壺形土器に薄手の口縁部を付けた感じ。製塩土器を思わせるものがある。全体手づくねで、下半には煤の附着箇所が多い。「牛」C21点採。４式後半か。

((159)〜(160)) 無頸壺の底部。(159) 脚台を持たぬ底部はやや突出気味に作られ、器体は横の長球形で強い丸味をもつ。口縁の幾分を破損する。表面はやや凹線がある。「牛」C21点採。４式。(160) 内外底面を広く作り、直接胴部に接する。器体は横の長球形で胴張りが強い。長首壺の底部に考えられぬこともない。「牛」C地区採。５式か。(古川昭雄氏所蔵)

(161) 現存部はコーヒ茶碗状。おそらく把手付深鉢に類するものであろう。やや斜下に反った把手は低く胴下部にある。胴部に２条の凹線文をめぐらす。「牛」C23点採。４式。

(162) 把手付台付鉢。口縁部の幾分と把手を破損する。鉢はやや深く、半球形に近い。脚台は顕著で上部から円錐形に裾開きし、下端近かくに太い凹線文をめぐらす。脚台の中央に把手のついていた跡を残す。「牛」B点採。４式か。

((163)〜(168)) 高杯形土器。脚台が多くの場合上部から円錐形に裾開きし、裾部をよく装飾し、下端が顕著に作成され、２個以上数多の孔を持つもの。(163) 柱部は中空円筒形でやや長めと思われ、裾開きが強い。柱部下端に細かい凹線文をめぐらし、裾部は比較的上方に推定12箇の孔を穿ち、下縁の直上に３条の凹線文とその間に半截竹管文を施す。下縁は突出して作られ、その端を斜上に向ける。「牛」B地域採。３式。(164) 柱部下端に櫛描の直線文をめぐらし、裾部はやや上方に小孔を17mm 間隔に穿つ。下縁はやや右上よりの直線文とす。下端は削り取られたように狭められている。「牛」C21点採。４式前半か。(165) 下端を突出して幅広く、その端を斜上に向ける。下縁直上にヘラ描の短線文を施す。孔は１孔のみ現存するも、小片で孔の数などわからない。「牛」C21点採。４式後半か。(166) 下縁は段上にやや突出し、３条の凹線文をめぐらし、その直上に17mm 間隔に孔を穿つ。「伯」西北部採。４式前半か。(167) 下端に１条の凹線文をめぐらし、裾部中央に22mm間隔に現存２孔を穿つ。「牛」C15点採。４式。(168) 下端を突出させて段状とし、その

直上に数条の直線文をめぐらす。小片にて1孔のみを現存。「牛」C13点採。4式。

(169)〜(171)) 脚台が長く、多くは中空円筒形の柱部を持つ。(169) 中空円筒形のやや長い柱部に、裾部の開きが少ないもの。柱部上下に広くヘラ描の直線文をめぐらし、下縁近くに相互2列の小孔を間隔 6 mmに穿つ。「牛」C23点採。3式。(170) 薄手で円筒形の長い柱部を持ち、裾部の開きは普通で下縁は幅広く、その端は斜上に向かっている。下縁近かくにある孔は2孔四対。「伯」西北部採。3式後半か。(171) やや長い円筒形の柱部に、裾部は急に開いて下縁を設け、その近くに間隔13 mmで孔を連ねる。「牛」C23点採。3式後半か。(172) 短い円筒形の柱部に開きの少ない裾部をもつ小型でよく整形している。下端近かくに1条の凹線文をめぐらし、その上方には器形の割りには比較的大きい孔を穿つ。「牛」C21点採。4式。

(173)〜(176)) 脚台が短かく、その柱部が太くて、上端より円錐形に裾開きするもの。多くは器体内底面の丸味が強い。(173) 大型。器体の割りに裾部はやや小さく、下端を削り取ったように作成。「牛」C10点採。4式後半か。(174) 前者に類似した小型で、杯部の外反りは弱いように思われる。「牛」地域採。4式。(175) 前者の類似、下端を削り取ったように作成。裾部上端はヘラ描で横に短線をめぐらす。無孔。「牛」地域採。4式。(176) 前者の類似。下縁は2条の線文をめぐらし、段状にやや狭められる。「牛」地域採。4式。

(177)〜(178)) 裾開きが強く、裾を長く引く。(177) 裾を非常に長く引き、狭い下縁は段状に突出している。小片で孔の有無はわからない。表面はやや凹凸がある。「牛」C13点採。5式。(178) 裾部はやや長く引き、ラッパ状。狭い下縁部を設け、無孔。4式後半か。

(179)〜(180)) 脚台が高く、上端より円錐形に裾開きする簡潔な手法。(179) 柱部上端は充実し、裾部は狭い下縁を設ける。「牛」B地区採。5式前半か。(180) 前者に全く類似のもの。脚台は中空で裾部がごく薄手、下端近く1条の凹線をめぐらす。「牛」D3点採。5式。

(181)〜(182)) 器台形土器　小型のもの。脚台は高杯に似て、その上に大きく開いた口縁部を持つ。(181) 孔に特色をもつ。孔は大きくヘラによって底辺のごく短い二等辺三角形と縦長の平行四辺形を一対に穿つ。「牛」C6点採。4式前半か。(182) 柱部下方に幅広く顕著な凹線文をめぐらし、下縁も幅広く突出して作られ、その端は斜上に向っている。「伯」西北部採。4式。

(183) 大形器台。鼓形で下方より上方がややゆるやかに外開きするもの。底面より⅓の附近に長円孔を等間隔に5個穿つ。孔の上下には5条と3条の凹線文をめぐらし、その直下にヘラ描き正三角鋸歯文（大小あり）を連続的に施す。下端は斜上にやや突出し、その部分にも2条の凹線文をめぐらす。23年12月「伯」地域古池の北方＝現在大西養鶏場の西北採。5式。この種の鋸歯文は小野市河合三ツ塚出土の器台口縁部破片の口縁にも見られる（やや形のくずれたものと聞く）が、小野のは口縁部に垂直する櫛目で、篠原のは左辺に平行するヘラ描で篠原の方が本場の吉備地方形式をよく受継いでいる。鋸歯文は中部瀬戸内地方の中でも岡山県南部のいわゆる吉備地方に多く出土する特徴があり、その代表的遺跡は都窪郡庄村上東遺跡である。その遺跡は大形器台の盛行期として知られ、中部瀬戸内

3式に属すというから、唐古を中心とする畿内としては5式前半におくべきであろう。

把手破片

((184)〜(190)) 当遺跡「牛」・「伯」両地域ともかなり多く、大小合せて50個以上になろう。今その幾分を選出した。多くは水差形（しかしその口縁部の顕著なのは出土例がない）ないしは台付鉢（壺）のものと思われ、カップ状深鉢の一対2箇の把手を採集したこともある。横位、縦位の推定出来ないのもかなりある。すべて半環状把手である。(184) 深鉢形の両側縦位につけた方。厚手で彎曲が強く丸味を持ち、かなりの重量がある。附着部分は大きくない。一対2個接近して採集し、色調、焼成に状色があるから、すぐそれとわかった。「牛」B地区採。4式。(185) 大形壺の肩の片側に横位。(184) よりも厚味はやや薄く、彎曲もややゆるい。「牛」C3点採。3式か。(186) 前者に類似して少し小さいもので、粘土帯状。「牛」D2点採。3式後半か。(187) 凹線文をめぐる面を上面とし、横位につけた水差形であろうか。附着部分はやや大きく作られ彎曲は弱い。「牛」B地区採。4式。(188) 縦位につけた台付鉢であろう。幅はかなりあるがやや薄手。彎曲はやや強く、附着部分を大きく作る。「牛」C21点採。4式。(189) 縦位につけた台付鉢と思われ、薄手で彎曲弱く、少し歪んでいるように思われる。「牛」B地区出。4式。(190) 深鉢形の縦位につけられたと思う、小型の彎曲強いもの。「伯」b地区採。4式。この外に小型の彎曲ややゆるいものは「牛」・「伯」両地域から若干採集した。やや焼成不良のものが多い。当遺跡は把手類の出土例はかなり多い方である。彎曲の差こそあれ、何れもほぼ半環状ばかりである。

以上で弥生文化期遺物の説明を終るが、最後に壺棺のことを附記しておこう。

「牛」地域西端はその地域の地形から墳墓地帯の色彩が強いことは十分伺われるが、この地点すなわち西端の附近から壺棺が出土している。未だ整理復原が進まず、筆者もくわしくは知り得ないので簡単な紹介にとどめておく。いずれ赤松氏より詳細な報告が行われるはずである。

大小2個出土し、その1つは33年6月巻頭第2図「牛」C地区上側△印の地点で出土、幼児を葬ったと思われる小形で、大きさはほぼ口径160mm、胴の最大径260mm、高さ330mmくらいで蓋は破損して中に落込み、ぎっしりと土がつまって骨片は見られなかったといわれ、地表90cmのところに岩盤をくり抜き埋められていたと聞く。筆者の知るかぎり、近くは加古川市大野の日岡山から神野西条の城山にかけ、この種壺棺の共同墓地があり、並んで多数出土した。この場合多くは蓋のかわりに石をのせていた。

他の1つは、下側△印の点で前者の発見後間もなく出土、合口式で高さ600mm、胴径400mmの壺に高さ300mm、胴径20mmの壺を合せ、やや斜にして埋め、付近から木炭も出土したと聞く。34年ごろ茨木市上穂積出土のものに似ているように思われる。

土師器、須恵器・土錘

当遺跡「牛」・「伯」両地域から土師器、須恵器は部分的に漫然と小片を少量ずつ採集したが、器物の個数としてはごく少ないだろう。

((1)〜(7)) 土師器杯ないし小皿。(1)杯と思われ、薄手で焼成硬質緻密で美しくよく整っている。底部は中央に従ってかなり上げてい

る。指痕あり。「伯」西北部採。国分式か。採集地点は古池北方のなだらかな傾斜地に舟型に突出した小山頂上の中部で、この種焼成の土師器小片とほぼ同期と思われる薄手須恵器口縁部小片と共に採集した。祭祀遺跡の色彩が強い。(3)小皿。前者とほぼ同地点採。(2)少し大きな小皿。胎土は細砂を少量入混して焼成やや良。底面はやや凹凸あり。「牛」C10点採。(4)小皿。「牛」C地区採。(5)小皿。底部をやや小さく作って、突出したように立上り、口縁端は垂直。「牛」C10点採。(6)やや厚手のごく小さい小皿。「牛」C地区採。以上小皿は真間式に属するものであろう。(7)口縁部をやや引延ばしたように作られた小皿。「牛」地C区採。以上小皿は多くの場合後期古墳時代と思われる。古式に属するものは1つもない。

(8)土師器大甕。口縁部が斜上方に強く外開きして器体より大きく、器体は半球形に近い。胴部以下に煤が附着する。「牛」地域採。古式に属する鬼高式か。

(9)土師器土釜。現今の飯炊き釜と同形状の鍔釜（羽釜）である。鍔はその端をやや下げている。内面全面に荒い横刷毛目を見る。「牛」E1点採。奈良時代前期か。他に数例採集し、その1つは内面がよく磨かれた黝黒色のもので鍔の上に1個の小突起がある。

（(10)～(12)） 須恵器の甕類。(10)大甕。口径400mm胴腹部の最大径624mmで、胴腹部の張りが強い、非常に大型。胴部最大径直下まで完存。附近より底部ないし下腹部など全く出土しなかった。この形状のまま何かに利用されたのではなかろうか(埋葬用などに)。頸部以下に叩き目を入れた厚手の新しいもの。(11)(12)中甕。ほぼ同形の口縁部をもつ。(11)は焼成緻密良好で口縁部内に1条の凹線文をめぐらす。(12)焼成熱度の加減か淡黄色を呈す。口縁部と胴部は別作りで貼付けている。胴部の縦叩き目は綾杉状。火に逢ったと考えられぬこともない。いずれも「伯」地域古池の北で採。大甕より時代はやや下るであろう。

この外須恵器片は多く「伯」地域に採集された。薄手のものは「伯」b地区、厚手黒釉綾杉文のは「伯」地域古池の東で若干採集した。

一説に同期における土師、須恵の差は貧（土師）富（須恵）を表わすというがいかがなものであろうか。

なお特徴ある遺構としては「伯」地域西端で切立つ岩盤を奥行せまく横穴式に掘込んで（縦、横、高さ各1メートル位）その中から末期の須恵器および陶器が出土した。ほぼ甕形と思われるもの2個分であろう。

（(13)～(16)） 土錘　いずれも大型の新しいもので、「伯」地域古池の北、当時六甲農園のあった場所で、石錘採集地のすぐ南側で採集した。(13)(14)円筒形に近い管状で両端を少し狭めて作成。中央は竹管様のもので孔を穿つ。胎土は砂粒を混入した粘土で、色調淡茶色、一部黝黒色が見られる。焼成は他の2者と比較してやや軟かい。両端は使用当時の欠減が見られる。(16)両面は両端の突出した長円形で側面に凹溝をめぐらした滑車形のもの。顕著な幅の広い溝を指で圧してつけて、指痕を多く残した美麗な成形。色調赤褐色、荒い砂粒を混入した粘土で硬く焼き上げている。(15)中央部のふくらんだ不整形な管形。土笛にも似ているが、やはり土錘である。胎土は砂粒の混入した粘土で、色調淡赤色。焼成はかなり硬度が強い。

以上一応古い順に並べて見たが、その新古

は余り大差がなく、ほぼ同一時代だろう。この種の形状をもつ土錘はすでに弥生後期ないしは古墳時代の遺跡からも採集されているが、近代のものと区別しがたいものが多い。

古　　墳

古墳といっても後期の小型円墳ばかりである。筆者の15年以上に遡る古い記憶では六甲高校校庭の西北部と「伯」地域古池の上方の通称塚坂と呼ばれる当りに、それらしいものがあり、前者は石室の一部のようなものがあったような記憶があり、後者は須恵器の破片を若干拾ったようにも思うが、何れも確実に古墳であったかどうか分らない。いつの間にか破壊されてしまった。それとは別に「牛」B地区西端に近く、当時吉岡勝蔵氏道具小屋のすぐ西北でほとんど全壊寸前のものを筆者が偶然の機会に発見した。勿論封土のことも、何もわからず、ただ南北に石室を持つ古墳の東北のごく一部が残存するのみであった。当時その地点は土取作業が激しかったから、数日を経ずして30年5月22日下良之克と共に、緊急調査した。そして10余日後には土取りのため全くその姿を消した。薄い表土とその附近には遺物は小片もなかったが、調査すると敷石にへばり付くようにして小量の遺物が現れた。

1、須恵器蓋坏の蓋と坏各2個。ただし蓋をしたままでなく、別々に出てセットにはならない。ほとんどが反り歪んでいる。坏の1個に鉄器の附着が見られる。

2、釘ないし鏃のさき、合わせて7個。全部頭を欠き、先部はほとんどのものが現存。ほぼ一括の状態にあった。

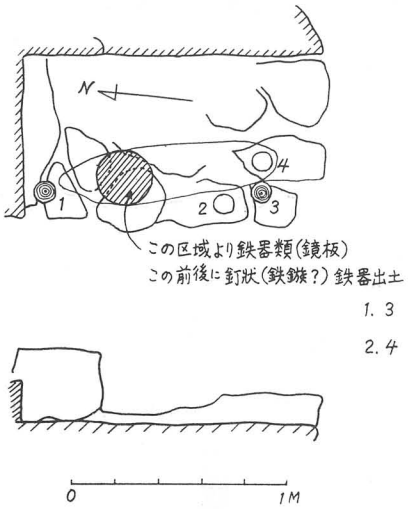
3、馬具の鏡板かと思われる鉄器の小片。

当地域のものは奈良時代位に置くべきであろうか。この種の土錘が当地域のような場所で採集したことは珍らしいと言えよう。

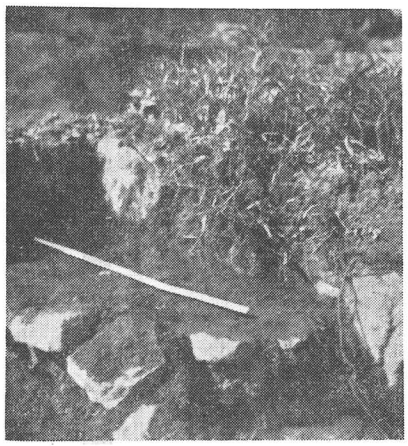
古　　墳

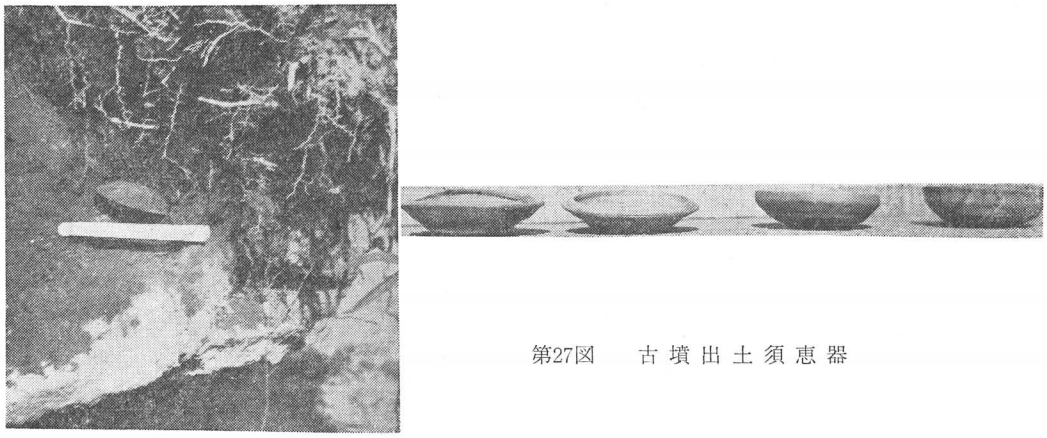
環状にめぐらした把手様のものが付いている。当時の実測図を下に掲げておこう。

（第26図）



第26図　　古　　墳





第27図　古墳出土須恵器

最後に西摂（阪神）地方の主要遺跡発展経過表を作っておく。

第28図　**西摂主要遺跡発展経過表**　■発展期　▮▮継続期

遺跡 / 編年		川西市	尼崎市		西宮市	芦屋市	神戸市			
		加茂	上之島	下坂郎	五ケ山	会下山	保久良	篠原	東山	
地性		台地	低地	低地	高地	高地	高地	高地	高地	
前期	上		■							B.C.300～200
	下									
中期	上	▮▮			▮▮	▮▮		▮▮	■	B.C.100～A.D100
	下	■		▮▮	■	■	▮▮	■	▮▮	
後期	上	■		■	▮▮	■	■	■		A.D.100～200
	下	▮▮		■		▮▮	■	■		
土師器				▮▮			▮▮	▮▮		A.D.300～400

あ と が き

以上をもって概略の報告を終る。通例として結語などを書くべきであろうが、筆者のごとき浅学な者に高地性遺跡の意義など結論の出てくるわけでもなく、最初から遺物の説明のみを目標とし、多少の論旨はすでに文中で述べた。字伯母野山地域東部若干を残して、すでに当遺跡が湮滅してしまった今日、出来るだけ記憶の新しいうち何物かを残す必要が感じられ、当遺跡発見端緒以来の行掛り上、浅学もかへりみず概況報告を作成した。

遺物の説明中心としたため、遺跡のことなどについては乱雑に暴走したうらみもある。何分未熟であり、且つ粗略な点の多かったことは慚愧に耐えない。ご一覧の上、何かとご教示を得たく思っている。

文　責　　若　林　　泰
製　図　　斉　藤　英　二

昭和38年3月

＜神戸市文化財調査報告　6＞

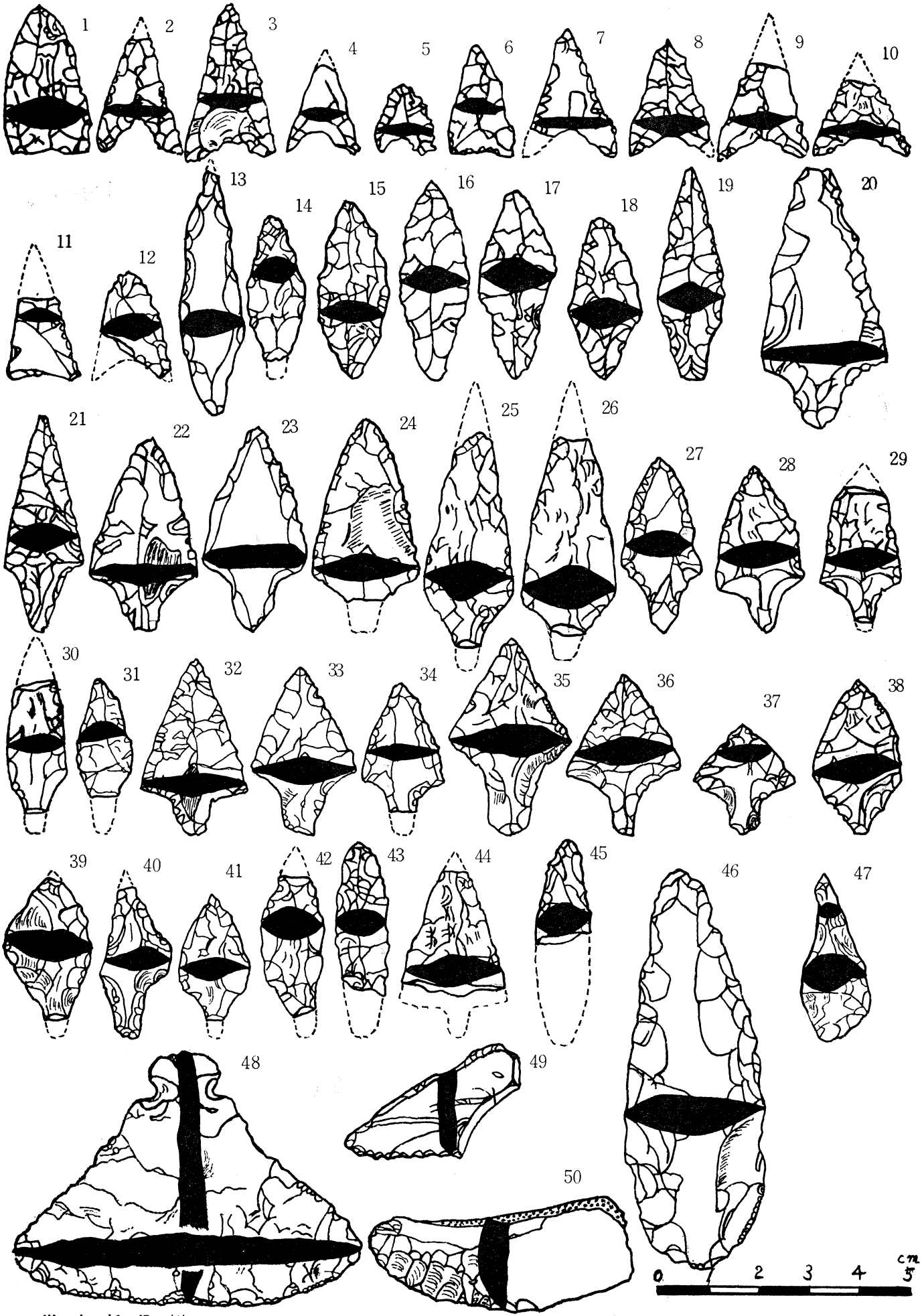
著　者　　若林　泰
　　斉藤英二

編　集　　神戸市教育委員会
　　社会教育課

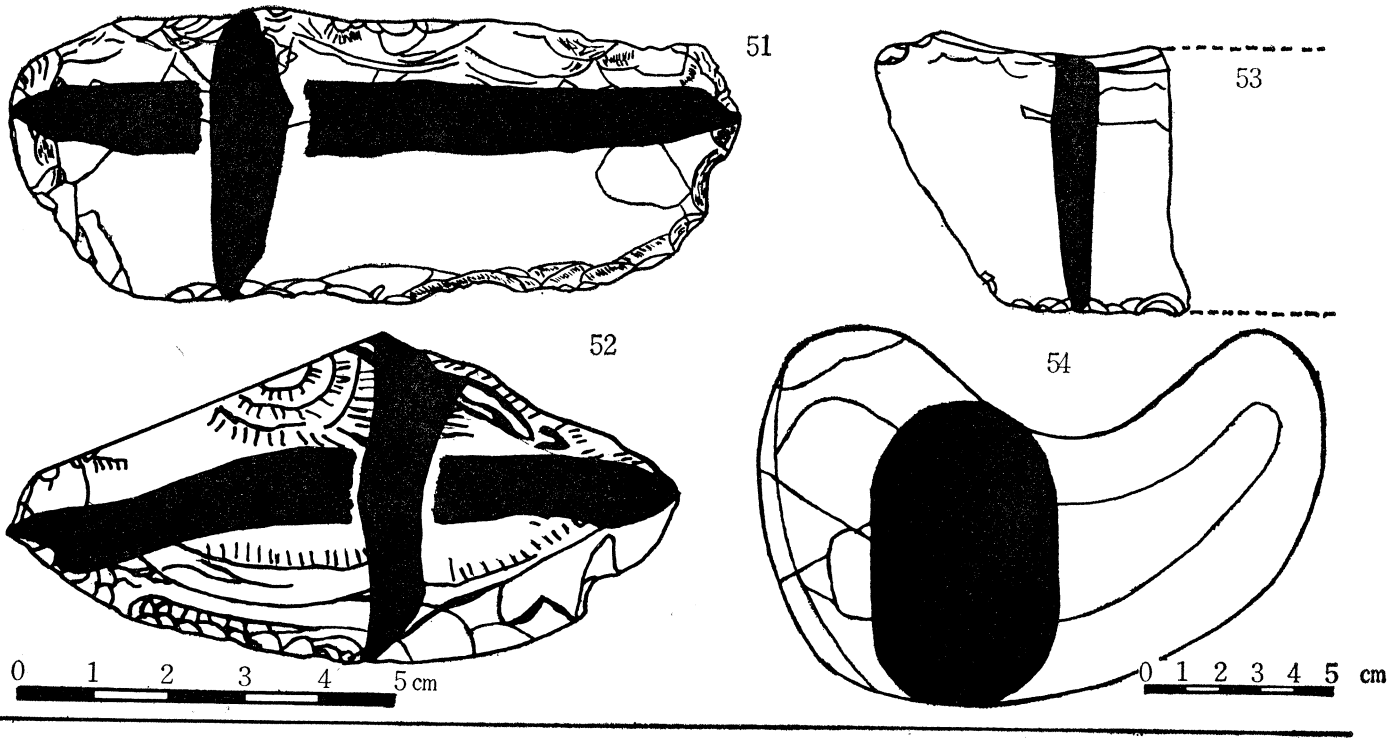
印　刷　　高田印刷紙器工廠

発　行　　**神戸市教育委員会**

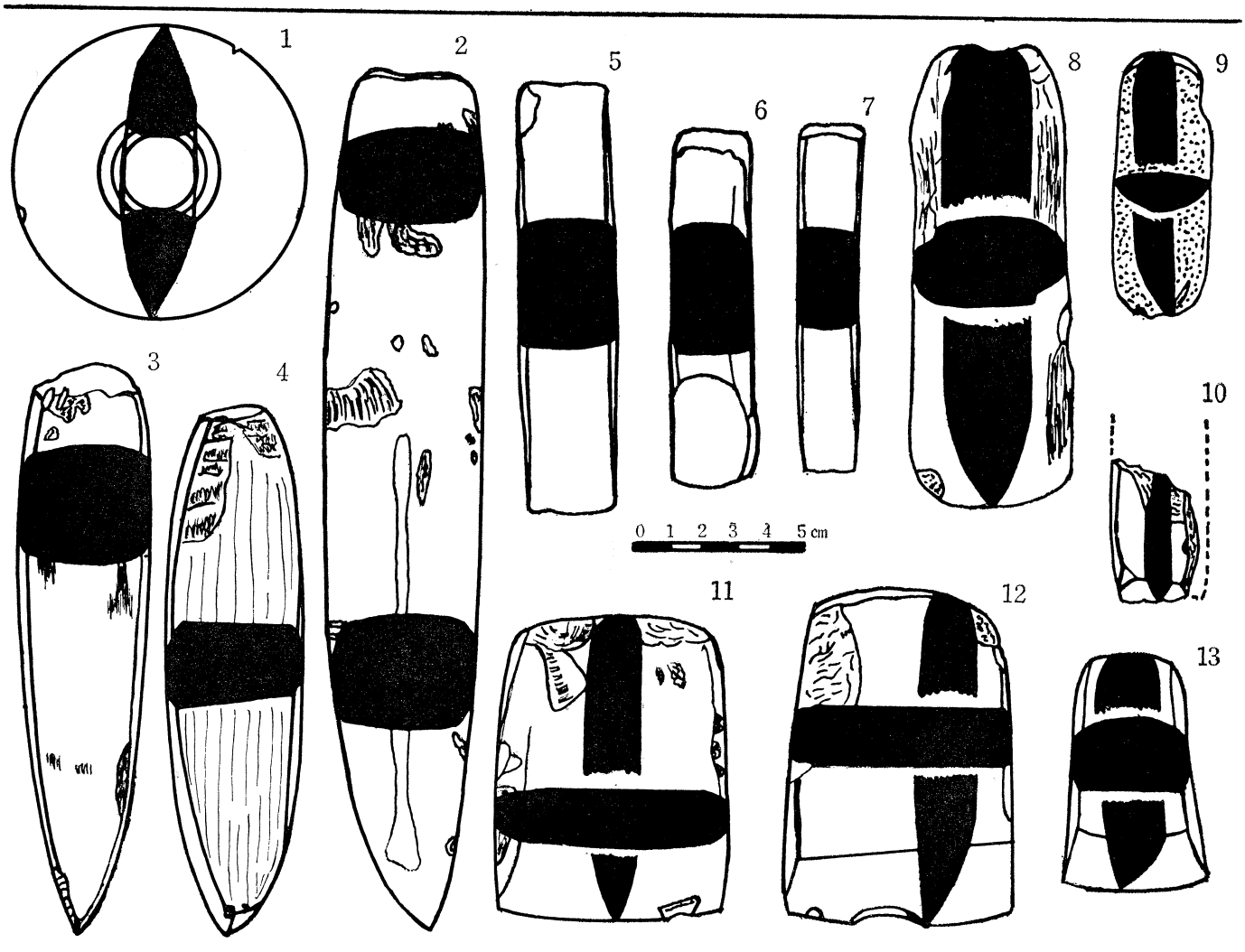
打　製　石　器　1～54

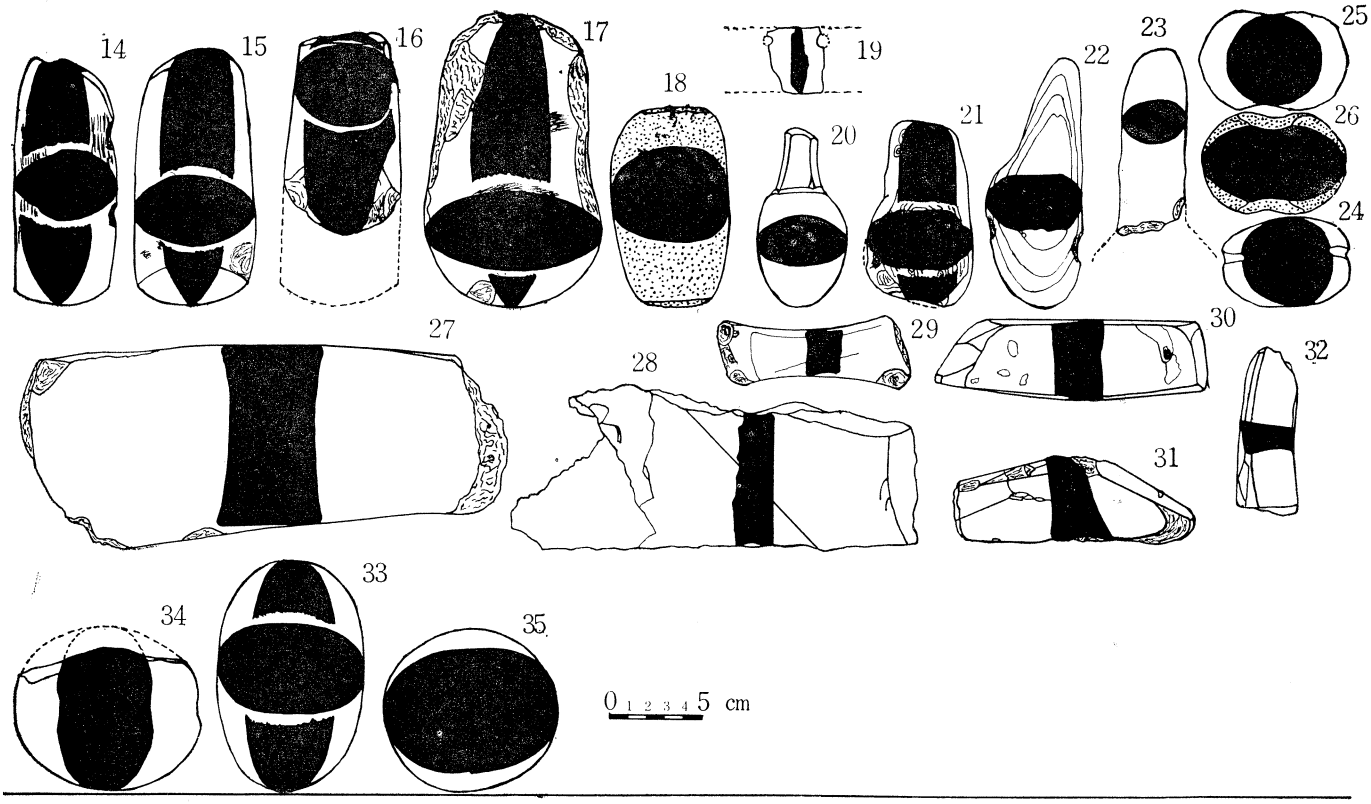


巻末折込 (1)

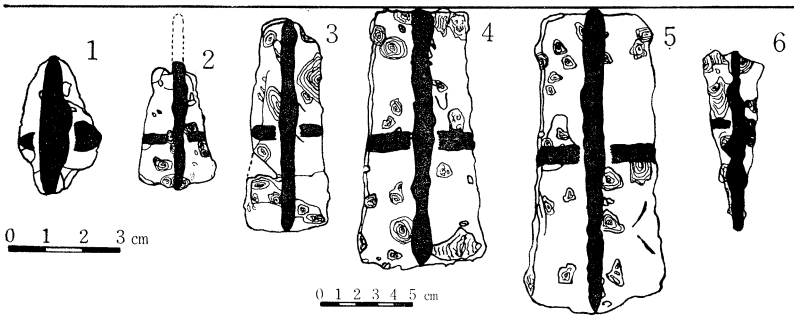


磨　製　石　器　1～35

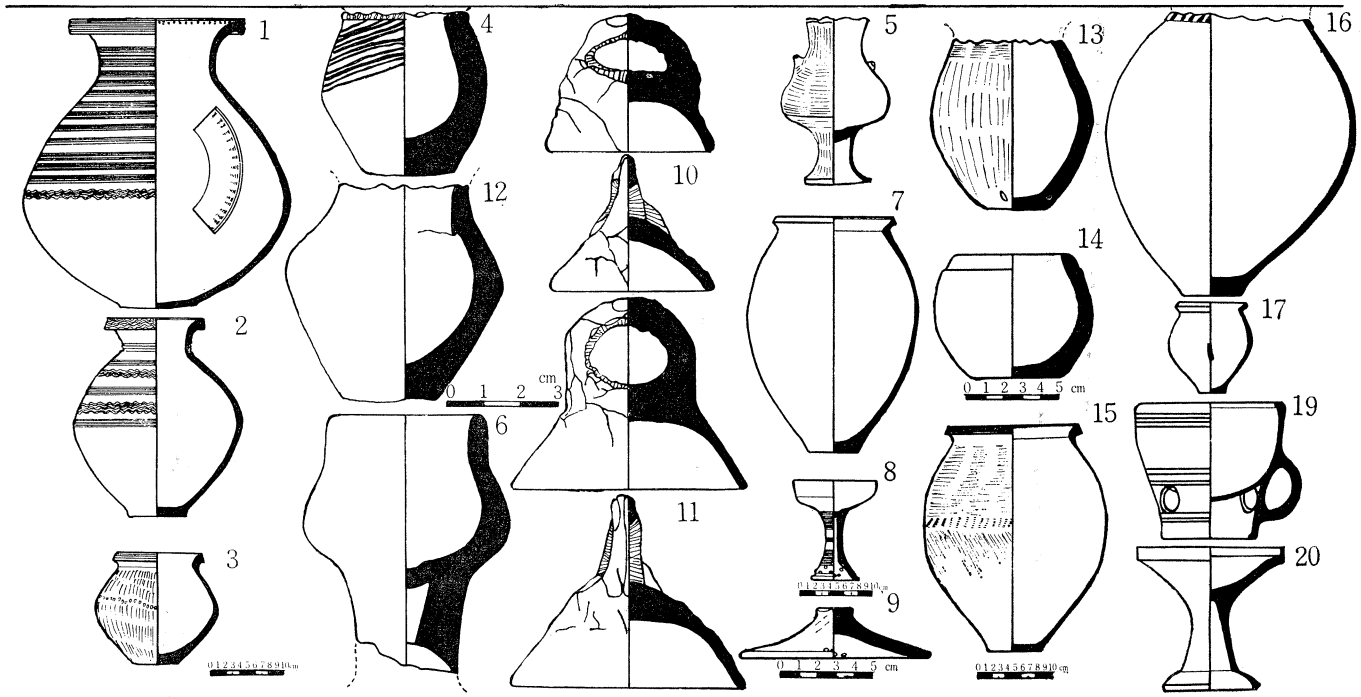


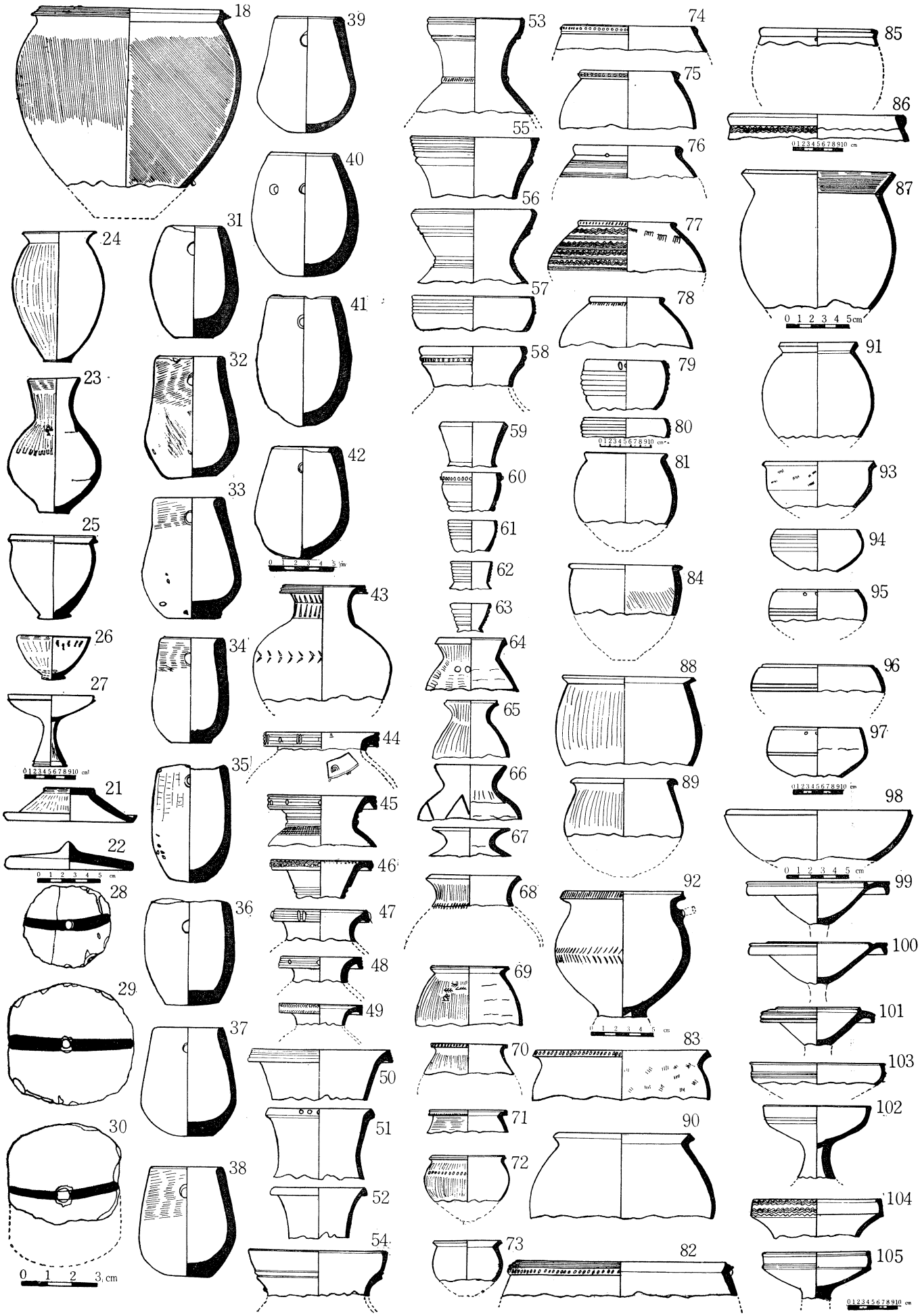


鉄　　器　1～6

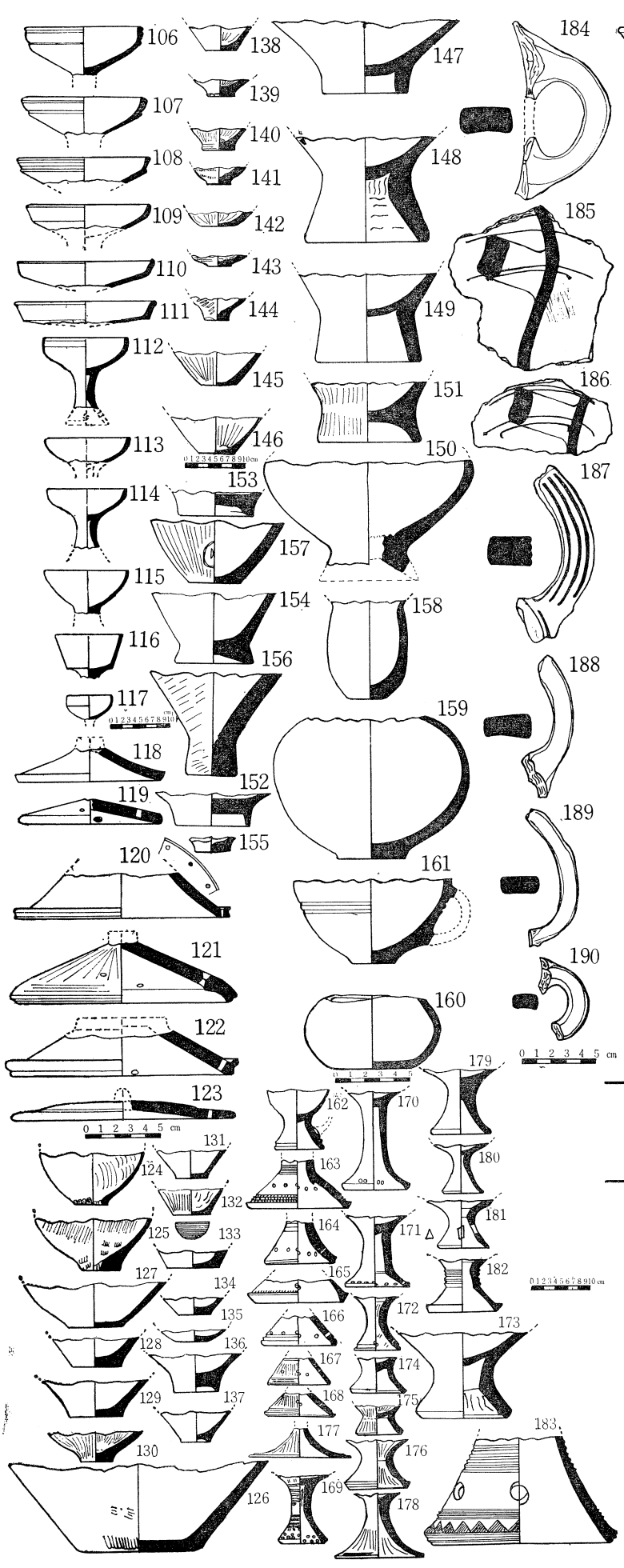


弥　生　式　土　器　1～190




18
24
23
25
26
27
21
22
28
29
30
0 1 2 3 cm
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
54
53
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
84
88
89
92
83
90
82
85
86
87
91
93
94
95
96
97
98
99
100
101
103
102
104
105

巻 末 折 込 (4)



土師器·須恵器·土錘

1～16